
喰

小林 劼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喰

【Nコード】

N8392T

【作者名】

小林 劼

【あらすじ】

これは己が己として生きるために、喰らうことを拒絶し続ける少年と、喰らい続ける少女の、お話。 ※現代の非似日本が舞台です。若干シリアス寄りの一人称小説。メイン主人公はヘタレ少年で、サブ主人公がある意味最凶少女。そんなキャラが嫌だという方は来ていただいたのに恐縮ですが、戻るをお勧めします。

1 嬉しくないご指名

気まずい。

何気まずいって、この部屋の空気。

24畳あるこの和室、電気も付いてて明るいの、その空気は重い。

一番の原因は、険しい顔をして眉間に皺寄せて、あぐらをかいてる、親父。

向かい合ってるオレの事も考えて欲しい。

ただでさえ心臓に悪い話を今さっき聞いたばかりだって言うのに、まだ気難しい顔をしてやがるし。

そろそろ何か言ってほしいんだけど。

「仕方ないな」

読まれた!?

ぎくりとしたオレをそのままに、親父が「はああああっ」と大きく息を吐き出した。

「人手が足りない」

「いや、足りなくないだろ？」

「足りない。自分のトコの不始末だ、こっちでカタを付ける必要がある」

「……現地に任せるって出来ないのかよ？」

「出来なくもないが、そういう訳にいかねえんだよ」

って、行き成り素になんたっ!!

じろりとオレを睨んで、もう一度、溜息。何だよそれ、どーいう意味だっ!?

「お前、何でもここにいてるかわかってるよな？」

「呼ばれたから」

「その理由だよ、理由」
ぐっ。

……わからないでもない。

視線を右足へと落とす、そこにあるのは一振りの刀。親父からの預かり物で、オレのじゃないそれ。

「そーだよ、それだ」

げんなりと声をあげる。つーか人の視線の先を追うなよ。

「で？ オレにどうしろって？」

「それ持って言うて来い」

「あっさり言うなーっ！！」

「しよーがねえだろ。仕事だ仕事」

「いや、オレ 「つべこべ言うなよ、シメるぞ？」

くっ…実の息子を脅す親がどこにいるんだよ。――て、ここにいるわな。

「しよーがねえだろ？ 話を通した矢先に、コレだ」

ぺらぺらとA4サイズの紙をうんざりしたように振って示す。

さっき聞いた、心臓に悪い話ってのがソレ。

「無闇に人を襲い、喰った。ったく、バカかっての。ニュースでガン報道されてるじゃねえか、こっちの立場も考えろっての」

そんなモノ考えてるなら、そもそも掟破って出てかねえって…。

「何だ？ 何か言いたい事でもあんのか？」

「別に。ただ、問題になったのオレは知らなかったけど、その時の事考えたらこうなるってわかったんじゃねえかなって思っただけ」

「まーな。協会の方にも注意は呼びかけてたんだがなあ」

その結果がコレか。

――23才女性、獣に食い散らかされたようなバラバラ死体で発見。

今日は朝からそのニュースだよ、どこの報道でも。

「ま、そういう事だ」

「どーいう事だっ！！」

「言わねえとわかんねえのかよ？ ったく。被害がなければ、発見地の管理者に任せる。その流れでよかった。だが、アイツら掟を破

った。ここを出て行く時、更にコレ。むしろこっちのがひでえな」
「確かに、それは酷いとは思う」

追ってなら、業界関係者なら、ともかく。何の関わりもない一般人、それを、自分の欲望のままに屠った。

「んで、こっちでカタをつける事になった。該当区域の管理者にはこっちから話を通してあるから、行つて来い」

「何でオレなんだよ…」

「人手がた足んねえんだよ。逃亡者は4人、現在進行形で追つてもかけてある。だが、コレの犯人は1人だ。それをお前に当たらせる。こいつだけでいい」

「そいつって」「ああ、三知^{みち}をかわしたヤツだな」……やっぱり」

あつさり言うなよコンチクショー。

「オレにどうこう出来ると思つてゐるわけ？」

「2人組だったからなあ」

うおい！？ 暢気な口調で言うなよっ！

っーか視線オレから逸らしてんじゃねえか！！

「ま、何とかなるだろ？ むしろ、何とかしろ」

「無責任な事言うなああああっ！！ 親父が行けばいいだろ！」

「それが出来たらとっくにそーしてらあ。できねえから、こーして、末っ子のお前に頭下げてんじゃねえか」

下げてねえええええ！！

全っ然、下げてねえだろ。すっげー上から目線じゃねえか！

「出来ねえって？」

「無茶だろ、幾ら何でも……—オレなんか」

「あつそ。んじゃ、ソレ返せ」

指差す先は、オレの右膝。じゃねえ、刀。

確かにコレは親父の持ち物で、オレのじゃねえから、そー言われたら返すしかねえんだけど…。

「元々、お前が持てる代物じゃねえのに、オレがお前のためを思っ

て貸してんだからなあ。そこんとこわかって欲しいよなあ。色々大変なんだぜえ？ 他のヤツラから言われてよお」

泣き落としかよ、上から目線の。つーか結局脅してんじゃねえか……。

何だよコレ。

結局、アレか？ オレが行くしかないっていうパターンか？

「どーする？ 返すか？ 行くか？ 男なんだからはっきりしろい！」

この場合、男とか女とか関係ねえだろ…。

何だよこの傍若無人ぶり。

いつも思うが、本当に、無理難題言い過ぎだよ、この親父。

しかも我儘だし。

我が親ながらどーしようもねえっつーか…。

「おい、返事」

言いつつ、何で右手をこっちに出してんだよ。無言で返せつつつてんじゃねえか。しかも半目で睨むなよ、こええんだよ、親だけど！

「……………わかったよ」

「何が？」

「行けばいいんだろ、行けば！」

「最初から素直にそー言えよ」

「……………行きたくて行くんじゃねえよ、脅されて行くんだよ、オレは」

「誰も脅してねえ」

あっさりど、あっさりとおお！？

脅してない顔か、それが！ 思いつきり睨んでるじゃねえか！！

「で、どこだよ、場所？」

「あゝ。アイツラな、多分に調子に乗ってるだろうからなあ、移動してねえだろうな。一応、外に出さないよう管理地囲むように結果張ったつつってたから」

は？

管理地囲むって、どんな巨大さだよ。つーかそんなもん作れる腕があんなら、アイツラ簡単に捕まえられるんじゃないの？ それとも何か？ 結界だけは作るの得意なんですけど、戦うのって苦手なんですよねー（はあと）とか、そういうパターンか？ やってらんねえ。

「何暴走してんだよ」

「人の思考に突っ込むなよ！」

「いや、お前が何考えてるかは知らねえが？ 顔に、やってらんねえ、とか書いてあんだが？」

…………。何この親父。

「ま、いいやな。管理者も忙しいんだよ、あっちこっち、管理地外からも仕事入るからな。オレよか忙しいだろ、多分に」

「……親父と同じヤツ？」

「いや？ ま、“北斗”以外で国内唯一のSSクラスだからな。しよーがねえ」

人間じゃねえな、それ。

どう考えても人外だ、どこの種族かはわかんねえけど。

「“北斗”と違って自由に動き回れるから、あっちこっちから引っ張りだこなんだよ」

「ああ、なるほど。親父ら、誓約あったもんな」

「一応組織の要だからなー。ああ、メンドくせえ」

メンドくせえつつってるよ。いいのかよ、それ…？

協会トップの人間がコレでいいのかよ、絶対間違ってるだろ…。

「じゃ、そういう事で」

「場所聞いてねえよ？」

「統京、第3指定26区」

「報道のあったトコだな」

「そ。結界に引っかかったって話が来てねえから、まだ、その中にいるはずだ」

「広い」

「まーそらな。3市3町2村だからな。広いだろうな」

「もう少し範囲狭まらないのかよ？」

「……1市2村ってどこか」

「狭まりすぎだろ!？」

「身を隠すなら森の中って言うだろ？」

「木だよ、木!!」

「細けえ事を気にすんなって、男なら」

「どこがだよ!　ってか、関係ねえって、男とか!!」

「ま、とにかくだ。その3つの中心が山だから、そこだろ。多分に調子こいてるからなーアイツら。ま、追って振り切ってあっちの方まで逃げてんだ、そら、調子にも乗るだろうなあ」

「……返り血浴びた格好、街中じゃ目立つからな」

「そういう事」

「管理者の名前は?　一応、挨拶くらいはした方がいいんだろ?」

「必要ねえよ。話は通してあるし、こっちでさっさとカタ付けねえと、向こうが出ない訳にいかなくなるから。そうすると、オレの立場以前の問題になるからな」

「一族の問題になっちまうって事か」

「そーゆう事。だから、あっちとしても、手を出せないってのもある。今んとこな。……たく、コレが無けりゃあなあ、もう片付いてたんだろがなあ」

ぺらぺらとA4の用紙を忌々しげに眺めて、弾いた。

この親父、これでよく一族のまとめ役とか協会のトップとかやってられるよな。

どこをどう見ても、ちょい悪親父ってか、ただのヤンキー……………ああ、ヤンキーのヘッドってヤツか。

ちらりと親父を見てみる。けっとか言ってる、けっ!　って。

うわあ、すげー似合ってる。ハマリ過ぎ、絶対そっちのノリだ。

暴走族だよ、間違いないよ、この親父。

「ま、一応言つとくか。危ねえっちゃ、危ねえから」
「は？」

「乃木の管理地^{のぎ}なんだよ」

「乃木？ ……って、あの乃木？」

「どれを考えてんのか知らねえが、多分そうだ」

「わかんねえのに頷くなよ！」

「んじゃ何だよ？」

「聞くなよ！ ……五大霊場の一つじゃなかったか？ 乃木って」

「おお、親父の目が丸くなったぞ？」

「こういう反応だ、これ。喜んだらいいのか？」

「…よく覚えてたな」

「ばあちゃんに聞いたから」

「オレの話じゃねえんか」

「親父に聞いた事あったっけ？」

「した」

「初耳だ」

「いや、話したね」

「聞いた覚えはない」

「言ったつうの！」

「知らねえっての！！」

「強情だな」

「親父に似たんだろ」

「……はー。沙夜^{さや}、聞いたか？ すっかり小生意氣^{こしやうぎ}に育ちやがった

よ、この野郎は。親を親とも思わねえんだからよお」

「母さんの写真に泣きつくなよ……」

「気持ち悪いから。」

大の大人が…って、親父、本当にデカイ筋肉質な男だし、それが写真に頬を摺り寄せながら泣きついてたら気持ち悪いだろ？ 普通に変わって写真の中の母さんの時間ってば13年前で止まって、40代そこそこで、息子のオレが言うのも何だけど、めっちゃめっちゃ

美人なんだよ。何でこの親父と結婚したのか未だにわかんねーって
いうか。

ま、流石に声に出して言えないがな。チキンって言うなよ！ 親
父キレたら、オレ殺されかねねーんだから！ マジで。

……って、何でこっち見るか！？

「沙夜」

ちがっ！！ 擦りよって来んなーっ！！ 人違いっつか、性別
すらちげえ！！

がっしり頭を掴んで、人の頭ってか髪にほお擦りかますな！

「何でオレを置いていつちまったんだよおお」

気持ち悪い、マジで。止めてお願い。

「息子は反抗期だしよおお」

「…おい」

やばい、悪寒が。つかキモイ。我が親ながら本当キモイ。マジ
でヤバイって！

「沙あ夜あああ」

ちっげえ！ 母さんじゃねええええ！！

ええい、頭撫でんな。触んなっ、ほお擦りすんなーっ！！！！

必死に抵抗してんのに、何、この親父のバカ力。びくともしやが
らねえんだけど……。

「……おい、親父」

「沙夜あ、オレは淋しいぞおおっ！！」

「親父っ！！ そろそろ帰って来い！」

じゃねえとオレが死ぬ。いや、マジで。

「じゃ、そういう事で行って来い」

「行き成り過ぎるわっ！」

すっぱり離れて、これまたあっさりと言いやがった。何なのこの
変わり身の早さ。つかオレ遊ばれてる？？？

「…その乃木であってるよ。くれぐれも妙な事に巻き込まれんなよ
？ 珍事件スポットだからな」

「嬉しそうに言うなよ」

「まあ、それはそれで面白そうかなと」

「……。この親父、いつか絶対、殺る。」

「んじゃ、行ってくるよ」

溜息交じりに告げて、立ち上がる。

右手にはしっかりと……借り物だけど、愛刀を持って。

「おお、気合い入れて逝って来い」

「逝ってどうすんだよっ!!」

「男が細かい事気にすんなって」

「どこがだっ!!」

はー。疲れる。この親父、マジで疲れる。もうとっとと退散しよう、そうしよう。

行く前に脳の神経焼ききれるっつーの。

「――あゝ、十郎太^{じゅうろうた}。一つ言い忘れた」

襖を開いてとっとと閉めようとしたオレにそんな声。

まだ引き止めやがるかこの野郎。

「何だよ？」

「カリパクすんなよ？」

はあああ!?

行き成りなんだよ、それ!

「誰がするかっ! つーか、いい年した親父がそんな言葉使うなよっ!!」

「父は若いコと仕事する機会も多いのだ、息子よ」

「妙な学習すんなっ!!」

も、何なんだよ……この親父。

思わず頭を抱え込みそうになって、踏み止まって親父を睨む。くっそ、何でニヤニヤしてんだこの親父!

「きっちり返すわ、ぼけえっ!」

「ははっ、そーかそーか。迷子になんねーよーになあ」

「誰がなるかっ!」

ばちんっ!!

渾身の力を込めて襖を閉じてやりましたよ。

ささやかなオレの抵抗ですよ。こんちくしょー。

親父のバカ笑いが聞こえる気がするが、いやきつと気のせい。

：ったく、素直じゃねえっつーか。あの親父。普通に言えねんかよ、普通に。

生きて帰って来いって。

思わず口元が緩む。……って、何喜んでんだよ、オレ。

「勝てねえなあこんちくしょー」
呟いて。

これが本当の負け犬の遠吠えってか。

右手にしっかり握った刀を見やって、改めてがっくりと頭を落とした。

2 KEEP OUT

バスに電車に新幹線、更に電車を乗り継いで。

「遠っ…」

車窓から街を眺めながら呟く。

都会だなー、鉄筋の建物ばかりだよーすげーなあ……って、もう感動終わったわー！！

くっそ、まだ着かねえのかよー。暇だよー退屈だよーありえねええ……。

「はぁ」

電車に揺られ揺られ、立ってるのは苦痛でも何でもないが、この時間が苦痛だ。

暇すぎて死にそう……。

ぱちっ。

一瞬、軽い電磁ショックが軀を通り抜けた。

やっとか、と胸を撫で下ろす。管理地を囲むように結界を張ってある、と言ってたから、今のが境界なんだろう。

どうやら目的地までもうすぐらしい。

………とは言え、国内で上から数えた方が早い敷地面積を誇る管理地だけに、本当にすぐ着くかどうか怪しいんだが。

つかコレだけの広さ囲めるならすぐに………て、ああ、それはダメなんだっけか。

ああ、めんどくせえ。

+++++

で。

「着いた…」

オレ泣きそう。よくわからんが、すっげー達成感がある。

結局アレから30分も電車に揺られたんだが………どんだけ広いんだよ。つーかコレ、本当に管理しきれてんのか？ ……いや、オレが未熟なだけかもしれないけどさっ！

「とりあえず、現場…」

報道されていた場所を確認しとかないと。臭い確認しないと。阿呆みたいだけど、必要だし。

コートのポケットに手をつっ込んで、折りたたまれた紙を取り出す。

「つて、何じゃこりゃあ！」

叫びを上げてから、はっと気付く。周囲を見回すと………通りすぎる人の注目の的だった。

………。

こほん、と咳払いを一つ。その後でオレが何ごともなかったかのようにその場を去ったのは当然だ。ちくしょーいきなり恥かいたわ！

くそっ、親父の野郎。こんなとこまで来て！！

折りたたまれた3枚の紙の一番上には、親父が満面の笑みでVサインかましてる写真があった。オレには文句を言う権利がある！

絶対ある！！ これは当然の権利だっ！

「何でこんなモノが混じってんだよ…」

丸めてコンビニの可燃ゴミ箱へ投げ捨ててやった。ざまーみろっ！！

………さて、気を取り直して。

事件のあった現場は、公園だ。

駅からそう遠くはない、駅周辺の商店街から住宅地への境目あたりにある、小さな公園。

手荷物は背にかけた細長い袋だけ。中身は愛刀。真剣さながらつてかソレよか性質の悪い代物だけど、オレの服装は学生服にコート。背中のコレも、竹刀が入ってるとしか思われないだろう。

地図と建物を見比べながらゆっくりと歩き出して、ちょっとだけ気になったから、かけていたメガネをずらしてみる。

「うへえ…」

思わず声に出して、慌ててメガネを掛けなおす。

五大霊場と言われているのは伊達じゃないな。こんなトコに住んだったら、敏感なヤツは神経イカれるんじゃないか？ ……その前に憑かれるか。まあ、そうならねーよーに、協会があるわけで。こんなトコで仕事してたら、嫌がおうにも腕上がるよな、そりゃ。

しっかし…。

その状態以上に、目を引いたのは、街をぐるりと取り囲むように覆われていた、薄い緑の幕。人間にできる芸当とは思えないよな、やっぱ。こんだけの管理地を囲む結界なんぞ。

隅々まで見えたわけじゃないけど、とりあえずそう結論。だってこの結果の中に入ったの電車で30分前だし。むしろ電車降りてから………ってえ、何で18分も過ぎてんだ！

くそ、親父のせいだっ！ 余計な時間取らせやがって。

歩くスピードを上げた。暢気にやってたら日が暮れる。夜になってご対面なんざしたら、万に一つの勝機が消える。

……すでに万に一つとか言ってる時点でダメか、オレ。

ええと、この先の銀行を右折……ああ、あれか、あそこ曲がったらすぐな。

更にスピードを上げて、オレは角を曲がった。

曲がったんだけど……。

ってえ、何だよそれは！！ これはアレか！ オチってヤツか！ 笑えねえ！！

流石に声には出せないから、内心思いつきり叫んだ。ありえねー。

現場近くまでやって来たオレの目に入ったのは黄色の帯。

KEEP OUT KEEP OUT KEEP OUT KE
EP OUT ——以下、エンドレス。

公園、立ち入り禁止。はい、終了。ダメダメじゃん。どうしようもない。

むしろ周辺の道路が封鎖されてる時点で終わってるよ。こんちくしよー。

ちらりと周囲を見ると、発見が昨日の明け方で1日経過してるっつーのに野次馬いるし。報道の方々が：多い事多い事。邪魔だなー。もしかして道路封鎖されてんのコイツらのせいかな？ ああ、どうすんだよー。

……いや、ちょっと離れた所から飛んでくとかすれば気付かれはしないだろーけど。流石に未熟なオレでも：って自分で自分を未熟って言うのも問題あるけどな、事実だし！ ちくしょー。何かよくわかんねえが悔しくなって……じゃなくて。とにかく、オレでも一般人の目にも止まらぬ動きくらいは出来るわけで。

でもなあ……。

現場調べるのになあ、人いるっぽいなあ。ダメだよなあ。協会に連絡して人払いに立ち入り許可って目立つよなあ、やっぱ。一応、逃亡してるヤツを捜してる追っ手になるわけだし、相手にここまで追いついたってか、オレが来たってバレるもんなあ。

バレたら逃げられるか、奇襲されるか。

……オレだってわかれば、間違いなく後者だろうな。

だから親父がくればよかったんだよ、ちくしょー。めんどくせえなら“北斗”なんか辞めちまえ！ っても、そうもいかないからなあ。それってイコール引退って事だしなあ。親父が引退なんかしたら、オレの学費がっ！！

……って、違うだろ、オレ。落ち着け。ヘンな方向行ってる。まず

はこの状態をどうするか、と。

どうしようもない。うん、どうしようもないわっ!!

「……コンビニいこ」

とりあえず時間を潰して、中の方の人が減った後だな。めんどくせーけど、歩いて行けないなら飛び越えてくしかねえし。

確実に夜じゃねえかよ、夜。大丈夫か、オレ？　どこどこへこむっつーの。

こんな時はアレだな、やっぱアレ。

コンビニで、元気の源、マミーげっと。

とりあえず買い占める。ふっ…大人買い。店員が引いてた気がするが、そこはスルー。

駅前まで戻って、マミーを飲みつつ人間観察に興じる事にした。

「あ」

激しくやる気のない足取りで駅まで戻って来て、駅名を見てから、気付いた。

そういや、現地付いたら電話しろって言われてたんだっけ。

親父のせいですっかり忘れてたぜコノヤロー。まったく、何であんな写真…っーかいっ撮ったんだっつーの、あんなの。

思い出したらムカついて来た…。くそっ、親父のヤロー。こんな遠くにまで来させといてオレで遊ぶなっ!!

駅の傍にあった電話ボックスに入り、ポケットから財布を取り出して、一枚のカードを取り出して、溜息。

っーか今時テレホンカードなんか使うやついねえっての。

項垂れつつ、受話器を上げてカードを挿入。

自宅の電話番号をプッシュして、呼び出し音に反応が出るのを待つ。

……………ぶるるるるる。

って、何で誰も出ないんですか？

自分で電話しろって言っというて、親父いないんですか？

何だ？　新手のいじめかコノヤロー。

……ぷるるるるる。

オレがうるるるるだコノヤロー。何だよっ！ 何が定時連絡だよっ！！ 馬鹿にしてんのかっ！

だーもっ、真面目に電話してるオレがバカみたいじゃん。バカだよ、バカ。こんちくしょー。

かちゃ。

「…親父、覚えてろよ」

って、何そのタイミング！？ 思わずトリップしたまま呟いちゃったじゃねえかよ！ どうしてくれる！！

「……十郎太？」

優しいげな、若い声がオレの名前を名指しするわけで。つまりはアレか？ しっかり聞こえてたって事ね。あはははは。よかった、親父じゃなくなつて。

「兄貴？」

「やっぱり十郎太か。いきなり父さんにそんな事言うの十郎太くらいだからね」

「…いや、わざとじゃないから。こう、ちょっと……自分で電話しろって言つといて、到着時間の予測くらい付くだろうに、電話に全くでないから新手のいじめかと思って、独り言を」

「そっか。無事に着いたんだね？」

「うん。……で、渦中の人は？」

「いないよ」

はい？

何ですと？ いないですと？ ちょっと待てえええ！！

「1時間くらい前に、召集かかって出かけた筈だよ。今日は帰れないかもってオレのところに連絡来たから」

「そうなんだ…」

「うん。いぢめてるわけじゃないから、そこは安心していいよ」

「忘れたんだな。オレに電話しろって言ったの」

「そうじゃないよ」

何でか苦笑が返る。

「そーいや、兄貴。今日帰ってくる予定だったっけ？」

「いや？　本当は直接次の仕事だったんだけど、父さんから連絡があって。忘れてる事を視野に入れて確率は五分だけど、十郎太から電話があるかもしれないからって言うから。そのために一度帰って来たんだよ」

「え…そーなの？　わざわざごめん」

「いいんだよ。連絡しろって言った父さんが悪いんだから。それにオレは長男だし、そのくらいのフォローしないと。可愛い末っ子のためにも」

「……。何でこの人、平気でこういう事言えるんだろう。誰かが回りで聞いてるわけじゃないのに、すげー恥ずかしいんですけど。」

「でも、丁度良かったよ。今帰って来たところだから」

「そっか」

「玄関開けてたら電話鳴るから、間に合うか心配だったけどね」

「もう2、3秒遅かったら切ってたかも」

「父さんへのメッセージを残して？」

「だって言わないと気がすまないじゃんか。ってかさ、普通、留守電とかさ。あるじゃん？　何でウチっていつまでも黒電話なわけ？」

「んー。電話回線が繋がっていると、その間の狭間という感覚がなくなってるね。家の周りを結界で覆ってても、電話回線繋がっているとそれが通り道になっちゃうからじゃないかな？　電話使って攻撃とか、普通に届くし。留守電なんかにしたら、留守録中、やられ放題になっちゃうから」

「……だからって黒電話はないと思うよ。もう使ってる家、絶対日本でもすげー少数だと思うよ。せめてプッシュホンにしようよ」

「うーん。父さんが死ぬまで無理じゃないかなあ。何しろ、母さんと最初に会話をした電話だし」

え…？　何それ？　初耳だ。そんな話聞いた事ない。

「そうなの？」

「……その声の感じだと、知らなかった？」

「うん」

「そっか。しまったなあ……」

「何でしまったんだよっ！ 別にいいじゃんか。だいたい、それ知ってたら電話変えろって言わないよ、オレ」

「うん、まあ、そうだろうけどね。父さんの母さんへの溺愛っぷりは、見てて痛いくらいだから」

「実際痛いんだけどな。主にオレが」

苦笑が返る。つーか苦笑しか出ねえわな。あの親父では。

「まあ、そんなわけだからさ。父さんも、普段は大人でしっかりしてるんだけど、母さんが絡むとどうしようもなくなるから。何ていうのかな、母さんの思い出一人占めたいんだろーうね」

どこの甘えん坊な子供ですか……。

「そういうわけだからさ、十郎太も……耐えてあげて」

「すげー嫌」

「いやまあ、気持ちにはわからないでもないよ？ 見てる方にもダメージあるからね、あの光景は」

49才にもなる男、しかもデカイつーかいかついおっさんが、自分の息子に妻の姿を重ねて懐く姿は、確かに気持ち悪い。

一応言っておくが、オレの顔が母さんにそっくりってわけじゃない。顔だけなら他の兄弟のが似てるってか、そっくりなのが一人いるしな。それなのにオレにやたらと固執するのは、頭のせい。まあ、頭つつーか髪の毛の毛んだけど。兄弟の中で、オレだけが母さんと同じ髪。

だからこの髪にはお擦りしたりするんだよ、あの親父は……うわ、寒気がした。

「十郎太？ 大丈夫？ 失神してない？」

「…大丈夫。ちょっと思い出して寒気はしたけど」

「そう、悪かったね。……まあ、そういうわけだから、電話はこの

「まだだよ」

「使用停止になったらどうするつもりなんだか」

「自分の部屋にでも飾るんじゃないかな？」

「やりそうだ……。」

「——それで、十郎太。話が随分と逸れたけど、丁度、到着したところ？」

「え、ああ、うん。じゃないや、一応、着いてから現場見に行ってみただけど」

「うん？」

「立ち入り禁止になっててさ。人も多かったから駅に戻って来て、電話してる」

「なるほど。人払い頼む？」

「いや、目立つからいい。もう1、2時間してから、見に行くつもり」

「……夜になるよ？」

「わかってる。でも、ヘンに目立ちたくないし、人払いなんか頼んだらオレのことバレるじゃん？」

「……どちらにしろ、危険なのは変わらないか」

「うん。だから、そこは諦めた。目立って奇襲されるよりいいかなって。一般人、これ以上巻き込むわけにもいかないだろう？」

「……それは、そうだね」

間を置いて、「はあ」と溜息を一つ。

「十郎太、自分には荷が重いつて思ってるだろう？」

「え……あ、うん」

「それは半分当たってるけど、半分外れ。父さん、十郎太でもやるって思ったから頼んだんだよ」

「そ、かあ？」

「そうだよ。じゃなければ、頼まないよ」

「……自信ないんだけど」

「でも父さんには、自信があったんだろうね。十郎太ならやれるっ

て。信用されてるんだから、やり遂げないとね」

「…………信用、されてんのかな？ そっちの方が自信ないや」

「してなかったら頼むわけないだろ。一族の恥なのに」

恥って…。兄貴。何か声のトーン下がってますよ？？？

「半分当たってるって言ったのは、相手がどうしようもなく性悪で卑怯で性格曲がりまくった変態だから」

うわっ。何か凄い事言ってるっ！？

何だろ、ここまで妙…………いや、普通だったら妙でもないけど、兄貴がこんな事言うのってすげー妙なんだけど。何かあったのかな…。電話越しに伝わって来る殺気にも似た何か怖くて聞けないけど。

「十郎太は馬鹿正直なくらい素直で真っ直ぐだから」

「なっ！ 誰がだっ！！」

「そういうところが、だよ」

くっ。あっさりと言って「はあ」とか溜息付いてるし！！

「だから、そういうところがオレとしては心配」

ぐっ、そう来たか。

そんな事言われたら何も言い返せないじゃんか！

「まあ、父さんが信用してまかせてるんだから、オレも自分の弟信用しないといけないんだけどね。でもね、やっぱり…………甘やかす気はないけど、可愛い末っ子が心配なんだよ」

…………。いや、だから恥ずかしいからそういう事をさらっと言わないで欲しい。

「十郎太、不安があるようなら、オレから乃木の方へ連絡しようか？」

「え…？」

「流石に管理者には無理だけど、父さんとやり取り合ったろうから。でも、跡取くらいなら連絡取れるよ」

「知り合い？」

「前に一緒に仕事したことあるし、そっちにオレ、訓練で何度か行った事あるから。普通に知り合いかな？」

「……………そうなの？」

「そこ歪みが激しいだろ？ ……っと、見てないかな？」

「一応、最初に見たけど…」

「そうか、確認はしたんだな。まあ、そういう状態だから、訓練力リキラムとかも結構組まれたりするんだよ」

死亡しそうなんだけど、それ。どんな訓練か想像つかないから勝手な思い込みだが。

「どうする？ ……すぐに連絡すれば、動いてくれると思うけど」

「……………うん、いい」

「いいの？」

「うん。…兄貴が言うように、本当に父さんに信用されてるんだとしたら、それ、裏切るわけにもいかないし」

「そうか」

ぽつぽつ言ったオレの科白に、兄貴の嬉しそうな声が返った。

「余り無理はするなよ？」

「う、ん…」

「十郎太が“父さん”なんて呼んでるの、聞ける機会って少ないからね」

んなっ！？ クスクス笑いながら何てこと言うんだっ！！

そこはさらっと流しておいて欲しかった…。

「父さん聞いたら喜びそうなのに、本人前にして、絶対言わないから」

ぐっ。

……………ささやかなオレの抵抗だよ、そこんところは。本当にささやかだけど！

「そろそろ度数、危ないかな？」

「……………うん。帰り、連絡できないと思う。多分」

「無事に帰ってくればいいよ。連絡なんかなくなたって」

「わかった」

「オレも明後日には帰るから、その時元気な顔を見せるように。命

令ね、これ」

「って、何で命令!?!」

「次期長としての命令?」

笑いながら何言ってるんですかつ、この兄貴は! しかも疑問文だったよ今!!

「十郎太、返事は?」

「……善処する」

「そんな難しい言葉よく知ってたね」

「一応、オレ、受験生だから!」

「そういえばそうだったな。じゃ、帰ってきたら勉強も見てやろう」

はう!?! 余計な事言っただけ!?!!

兄貴、頭いいし、勉強の内容とか話してる分にはいいんだけど、
“教える”となると激しく鬼になるんだよ。こええんだよ!

真面目に、親父より怖い。

……こ、断らないと。マジで。

「じゃあな、十郎太。しっかり頑張れよ」

「えっ、あ…待って兄貴。勉強…」どこに行く事になっても楽勝で入れるようしっかり見てやるから安心していいよ」 ……はい」

ダメだ。もう手遅れ。すでにやる気です、この兄貴。

「頑張る……」

「またな」

「また」

がちゃん、と電話が切れて。つー、つー、つー……と。

度数の残りはたったの2。これじゃ本当に帰りの連絡は出来ないな、と。

無事に帰れても、その後に地獄が待っている事を哀しく思いながら受話器を置いた。

3 自称占い師

時間を潰す事2時間。空はいい感じに茜色。

オレの心も、沈む夕日と共にどんどこ沈んでるんだけど。

そろそろ行こうかな、とマミーを一パック飲み干して立ち上がる。

「そこな少年」

例の現場をもう一度見に行って、人が減ってる事を祈りつつ。つか減って無くても、もうやるしかねえよなあ…。

「そのメガネかけた少年」

しかしかこの分だと夜だよねー間違いなく。日は確実に沈むだろうなあ、どうしたもんかね。

「そのマミー少年」

「って、誰がミイラかつ!!」

「あははは。いい反応だねー少年」

思わず反応した先にいたのは、豪快な笑いを展開する女。何っーか、結構美人な筈なのに、全く大人の色気となくなっってガサツに見えるのはオレの気のせいかな？

「…初対面のレディに対して失礼だね、少年」

「なっ…何が!？」

「私に対して失礼な事を考えたね？ 動揺してるのが何よりのしょーこ」

くっ…。この女、何者……………ってか、オレってそんなに顔に出てるんだろーか。

「ああ、まあ、少年はポーカーフェイスとはほど遠いわね」

「人の思考に突っ込むなよ!」

「あははは。本当にそんな事考えてたのか。素直だねー」

「どっちが失礼なんだよ」

「えー？ 何が？」

何が？　じゃねえ！！　何だよこの女…。

アレか？　コレが親父の言ってた珍事件とかか？？？

っーかこんな女に構ってる暇ねえっーの。

「じゃあな」

「ちよつと待ってよ。せつかく声かけたのに」

「…何か用かよ？」

「用ってか、単刀直入に言うよ。――少年、死相が出てる」
ぐはっ。

何か断言した！！　しかもありえないくらいマジ顔で。

「…何だよそれ。どっちが失礼なんだよ、初対面の人間に。っーかアンタ何？」

「心が狭いねー少年。そんなんじゃデカイ人間にはなれないよ？
見てわかんない？」

わかったら聞かねえっての！

「しょーがないね。見ての通りよ、う、ら、な、い、し」
…………。

くるりと反転。オレは何も見えていない、何も聞いてない。

「こらこらこらこら。現実逃避はいけないぞー」

ぐはっ、何か肩掴まれた。何コレ、馬鹿力？？？　す、進まん…。

「こら少年。年長者の意見は聞くものだよー？」

「離せよっ！！」

「少年、注目の的だよー」

「誰のせいだ！」

「ま、下校時刻のこの時間、この程度の騒ぎを気にするような愁傷なヤツはこの辺りにはいないけどね」

「何だそれ！」

「それくらい賑やかかって事よ。っていうか、まー事件があったせいで、気にする余裕ないってのがホント」

肩を竦めて苦笑する。っーかこっちが苦笑いだったの！

「でね、少年。死相が出てるんだけど」

「あっさり言うなよ、あっさり！　つかそんなもん、勝手に占ったって金なんか払わねえからなっ！！」

「誰も金払えなんて言ってるじゃないよ。私の言いたいのはその先」

「先？」

「そ。少年の死相、回避する方法があるんだけど、コレでどーお？」

言いながら、3本、指を立ててオレに示した。

にっこりと意味ありげな笑みを浮かべて、オレの反応を待ってる感じ。……いや、どうしろと？

「で？　それが何？」

「何だ、少年わかんないのか」

「いや、わかんねえだろ？」

オレの科白に、「はあっ」とこれ見よがしな溜息を吐き出しやがった。喧嘩売ってる？

「……少年、裕福かつ甘やかされて育ったね」

ぽつりと失礼な事を言いやがった。

そりゃ確かに貧乏じゃないし、甘やかされてる気もするけどさ。裕福な暮らしじゃねえし、痛い目ってか死にかけた事も数知れずなんだけど……身内のせいってか主に親父のせいで。

「凶星かね、少年？　いかなー。ウチの妹の爪の垢でも煎じて飲んだらいいよ」

「…何で通りすがりのアンタにそんな説教されなきゃなんねえんだよ」

「確かにそれもそーね」

半目で睨んだオレに、やたらあっさりとした頷きが返る。何なんだよコイツ…。

「3万。これで私が死相回避してあげる。どお？」

「いらん」

得意満面な顔に即答。つか、どこをどーみても、足手まといっ

っーか。厄介者っっーか…。

「3万で死が回避できるのに？」

「……あのさ、一つ言っていていいかな？」

「何？」

「オレがそんな金持ってると思ってるわけ？」

「子供が死ぬのを防げるなら親が出すでしょ？ その程度」

「……。あっさりと、何なんだこの女。」

っーかそもそも、そんな金払うくらいなら、オレに言わねえっての。あの親父は。

「出ない。出さない。ありえない。っーかオレが死ぬって前提かよ」

「死相が出てるもん」

エライにこやかに言われました…。

「死相だろ、確定じゃない」

「んじゃ死ぬ」

「何だそりゃ！！」

「とにかく、どーお？」

「いない」

「即答か。まだ若いのに命捨てる事ないと思うよー？」

「だから何でオレが死ぬ前提なんだっっーの！！」

「落ち着け、少年。つねに平静でいられるようにならないと。まだまだだね」

「だから何がだよっ！！」

「それは、少年が未熟 「大変なんですけどー」

「何がっ!？」

「大変なん 「いや、これ電話」

はあ!？」

大変なんですけどー、という声が続く。っーかコレ着信音かよ。大丈夫か、この女。

「で、少年。考え直さない？」

「直さないし、電話出れば？」

「つれないなー」

なおも、大変なんですけどー、という着信音が続く。つーか誰の声だよ、これ。

上着のポケットから携帯を取り出したのを見て、オレはきびすを返す。まったくいつまでも付き合ってられるかっての。

「って、少年ちょっと待った！」

「いらんいらん、何もいらねえっての！」

「ちっ」

……今、ちっ、って言ったよ、この女。舌打ちしたよ、何なのコイツ。

「あーもお、しょーがないな。んじゃ、アドバイス 「いらねえ」

……そー言わないで聞きなつて。死を回避するアドバイスあげるから」

「だからいらねえって」

しつこい、と思って睨み付けるのに振り返ってみれば、大変なんですけどー、と鳴り響くってか言い続ける？ 携帯を左手に、にこ

やかな笑みを浮かべてる。……アレは絶対何かたくらんでる顔だ。

そうに違いない。これ以上関わらない方が良さそうだ、オレの本能がそう叫んでる。もう絶叫レベルで。

だって親父と同じニオイがすんだもん。この女……。関わると死ぬような場面じゃなくても死ぬ気がする。

「少年、本気になりな」

「は？」

急にマジ顔になってそんな事を言いやがった。何だコレ、不意打ちか？ 思わずバカみたいな声上げちまったじゃねえか。

「本気の本気、もうマジになりな。そーしたら、回避できるよ」

「何だよソレ」

「いいから聞いときなつて。結構当たるって評判なんだから」

「……金は払わないって言ったよな？」

「いいよ、別に。そーだね、当たってたらさ、また、何かあったら私んトコきなよ。そしたら、そんな時はお金払ってもらうから」

…なんだそりゃ。

「って事で、死相の少年。死なないで、次、遠慮なく私に入金しに来なさい」

「それが結局狙いかーっ!？」

「当たり前よ。副業だけど、貴重な収入源なんだから」

「副業かよっ!!」

「そーよ。悪い？」

いや、悪いって言われても。別に悪くはないんだろうけどさ。…って、違うだろ！

何なんだよこの女。何でオレ半目で睨まれてるんだよ。わけわからないよ。

「ま、とにかく。せっかく言ったんだから聞きなさいよね？ 本気になる事。忘れないよーにね」

へらっとした笑みを浮かべて、大変なんですけどー、を停止させる。じゃなくて電話に出た。

「何ー？」

……声デカイよ。

「え？ 嘘っ、それはヤバイんじゃないの？」

何がだよ。っーかお前の存在の方が絶対ヤバイ。

だいたい占いの方が嘘っっーか、いや、多分、オレに死相が出てるのは確かだろうけどさ。この女の占いは当たらないと思う。だって適当さ加減しか伝わってこねえもん。真面目に相手しちゃったオレがバカみたいじゃねえか。

……今更気づいたオレって本当バカだな。

溜息一つ、きびすを返す。

さっさとこの場ってか、この女の視界から消えよう。これ以上、こんなところで時間喰ってる場合じゃねえし。

すたこらと歩き出す。

「あ、ちょっと待ってて。……少年」

スルー。完全にスルー。人ごみにさっさと紛れ込む。

「マミー少年ーっ！！」

その声を合図に、オレは全力疾走した。

つかマジで付き合ってられるかっての！！

その足で例の事件のあった現場へと行って、確認して。ああ、まあ、人はいたけどもう気にしてる暇なかったし。ちょっと走り抜けただけだから、多分気付かれてない筈。騒ぎにもなってなかったかな。

その後で、親父の言ってた山とやらへ向かった。

勿論、ここにいて確認は全然なかったんだけど。

事件の現場に残ってた気配は綺麗に消えてた。いや、消されてたって言った方が正しいかな。これだけの事をやるだけあって、流石にバカじゃなかったらしい。まあ、同族の追っ手振り切って逃げる連中だしな。そのくらい当然か。

それでも、微かに残るモノがある。

オレ達にしか嗅ぎ分けられない、ニオイ。……いや、オレ達って言ったら語弊があるか。探査を専門にしてるヤツラなら、腕がよければ気付くかもしれない。

一族特有のってかね、何て言えばいいのかなー。犬とかのマーキングに似た感じというか。アレは自分のテリトリーを誇示するためのもんだけど、得物を定めた場合に、似たような事をするから。それが残ってた。ま、周囲に気付かれないようにするから、マーキングみたいにあからさまじゃないんだけどさ。

とにかく、それが、しっかりがつつりと、親父の言ってた山へ続いちゃってるわけで。

もー勘弁してくれて泣きたい気分だったんだけど。正直。でもわかつちやった以上、気付きませんでした、わかりませんでした、みつかりませんでした、って訳にもいかないから。

それはもう決死の思いで、オレはその山へと足を踏み入れるので

あった。

辺りは何っーか暗い。

日没まで2時間と読んでいたんだが、実際はもっと早かったらしい。

そうだよなあ、移動してるんだもんな。東に……はあ。

まだ完全に夜ってわけじゃないが……中は完全に真っ暗だろうなあ。おい。

「どーするよ、コレ……」

あのヘンな女のせいだ。こんちくしょー。

どこかで一泊して、明るくなってからにするかなあ。

いや、でもなー。コレでまた別に被害者が出るなんて事になったらなあ……親父の立場が余計悪くなるしなあ。

被害に会う人にも悪いしなあ。

だからと言って、このまま行ったら、オレ、殺されに行くようなもんだしなあ。

どーする、どうするよ、オレ。

素直に、兄貴に連絡取ってもらえばよかった。……もう遅いけど。

「……とりあえず、栄養補給」

最後の一本、ママー。

これが最後の晚餐かもしれねえなあ……はははは。笑えねえ。

手ごろな木の根元に腰を下ろして、街を眺めるように。

都会の夜は明るいねえ。電気が。

家は山山中だしっーか、山が家っーか……。山のふもとに学校はあるし、あんまり遠出しなかったもんなあ。

……って、アレ？

もしかしくなくても、オレ、人生初の長距離移動したんじゃない？

うわ、気付くの遅っ！！ 実感あまりないけど、そーだよなあ。

西日本から東日本へ。大移動だなあ。いやー遠くまで来たんだな、今更だけど。

そうだよな、遠いんだっけ……骨も拾ってもらえないくらい。
哀しくなった。

……いかん。マイナス思考しか働かねえ。

えーと何か別の事……そういや、他にも追っ手ついていたんだっけ。
そいつらが拾ってくれるか、骨。って違うだろ！

っーか、そっちのヤツラが、アレだよ。片付けてくれねえかなあ。
そーしたらオレ、このままUターンでいいんだもんなあ。未熟で経
験不足なオレを出すなっつー話だよ、そもそも。

だいたい、地理だってさ、そりゃ、逃げてるヤツも詳しくはない
だろうけど、オレよりは絶対詳しいだろーし。

ダメな要素しか思い付かねえ……。

「雪」。オレ、今度こそ死ぬかも……？」

独り言。答える声は当然なし。

ちなみに“雪” ってのは、オレの……じゃないけど、愛刀の名前。
オレが付けたわけじゃないからな！ そこ間違えるなよ……！

まあ、今までにも何度か、あの親父のせいで死にかけたよ。何度
か。むしろ何度も。

だけど今回は、一人。完っ全に、オレ一人。保護者なし。

死にかけて済んだのは、保護者同伴だったからであって、今回
はそれがナイ、と。

こっそり誰かが付いて来てるってのも考えたんだけど、ないみた
いだし。子供にやらせるには荷が重過ぎるよなー絶対。いくらオレ
が“雪”を預かってるったってさあ。限度があるっつーの。親父に
信用されてる以前の問題な気がしてきた……。

だいたい……ライオンは子供を千尋の谷へと突き落とし、這い上
がってきたモノだけを自分の子供として育てる。実際は蹴落とした
りしないらしいが、オレはする……とか。親父の口癖。実際、
千尋じゃないけど、谷に蹴落とされた。っーか何で蹴る？

もうわけわかんないよ親父。

「死んだら親父を呪ってやるか」

化けて出る、と言わないところがオレ。つーか化けて出たら餌食になるだけで、絶対勝てねーもん。相手はそれで生計成り立たせてるんだからさ。オレの学費とかも。

はあ。

もう溜息しか出ない。もしくは乾いた笑い。ははははって、バカかオレは。

……せめて骨くらいは拾って欲しいところだけど、今更言っても始まらない。そもそも覚悟は出来て……るわけないじゃん。けど、やらないわけにもいかない、と。こんなトコまで来ちゃったし？

「んじゃ、行くかあ」

やる気とか全然ないけど。

やられに行くようなもんだしなあ、やる気を出せって方が無理だよ。こんちくしょー。

くしゃつとマミーのパックを丸めて、ポケットに突っ込む。

死んだら絶対化けて出ると心に決めて。……いや、決めたくないけどさ。念のために。

せめて中学くらいは卒業したかったよなあ。後半年切ってるのに。

それに、今度の冬休み愉しみにしてたのになあ…。

「“雪”が取られるわけにもいかねえし、何とかしねーとなあ」

でも、何とか出来なかったら、享年15才。……いや、ダメだろ。それは。つーか出来ない確立のが高すぎなんだっつーの。

ちくしょー。

がつくりと落とした肩を立たせて、メガネを掛けなおす。

やるしかない、やるしかない、つーかヤレ。成せばなる。

自己暗示をかけつつ、不安をいっぱい背負って、つーか不安しかないけど！ オレはやつと森の中へと、ニオイが強く残っている場所へと足を踏み入れた。

もう帰れないかもしれない街を3回くらい振り返る。

情けないのは自分でもわかってる。だからそれが、見納めになら

ないよう、まあ、祈るしかねえんだけど……。

4 捕食する者

だーっ！ もう、いきなりだよっ！！ いーきーなーりーっ！！

とりあえず、必死に走る。走る。走る。

やったらニオイが強く残ってたから怪しきプンプンだったんだけど、アレだ。今更だけど……コレ罠ーっ！！

10歩も進まないうちに銀の刃が飛んで来た。

で、以後、ずっとそれを交わしながら森の奥へ奥へと進んでるわけ。……絶対誘導されてるよな、コレ。

「……つぶね」

木の根っこに躓いて転びそうになったところに銀の刃が飛んで来る。慌てて、袋に入ってたままの“雪”で弾いて、反転。

続けて飛んで来る刃を避けて飛び上がると、再び走り出す。

やばい、本気でヤバイ。相手の確認をする余裕がないっ！ ……情けねええ。

オレの標的になってるヤツだったらいいけど、全く関係ないヤツだったらオレは即死決定だよ。ちくしょー。

「……こっちが疲れて止まるの待つ気……じゃないよな。誘導されてるくせえ」

逃亡者は全部で4人。追っ手は何人かいた筈だけれど、現時点で動いてるのはガチンコ用のオレを含めた、同数の4人。あんな目立つ事があったから、一族からの4人の追っ手しかない筈。

一応、その4人の中で一番弱いヤツがオレの標的だし。

今攻撃して来てるのがソイツである事を、本気で願う。っーか違ってたなら恨む。何を？ って聞かれたら困るけど、とりあえず、親父かなあ？

「……って、球っ！？」

細身で30センチほどの長さしかなかった銀の刃の雨が、直径3

0センチほどの球体へと変化した。

慌てて木に飛び移り——って、直撃コースっ！？ 同時に飛び乗った枝目掛けて球が飛んできたわけで。

「っだあっ！」

ぎりぎり回避する……ってか、まあ、落ちた。普通に。完全にこっちの動き読まれてるよ、コンチクショ―。

一回転して、地面に着地。流石にへばって間抜けに落ちるわけにはいかない。

だが、ぴたり、と攻撃が止んだ。

「やっぱ、誘導だったんだな」

直感でそう感じたのは、嫌にニオイが残っていたから。強く、強く。その場所が自分のテリトリーであると、告げるためにわざと残したんだろう。

他人の土地にマーキングってバカだよな、と思う。しかもここは、乃木の管理地。ど真ん中より外れてるとはいえ、あれだけの結界を作れる人間がいるんだから、こんなところに自分のテリトリー広げてたら、ここを基点に結界張られてまごついてる間に討伐隊………もとい、オレ達が失敗すれば、管理者自身が出てくるだろうし。

どんなヤツかは知らないけれど、親父と同じくらい強いヤツだ。何しろ“北斗”以外のSSクラス。

国内にたった3人しかいない、退魔師協会認定のSSクラス。世界を見ても10人しかいない、それ。反則なくらい強いに違いない。

「……はあ」

余計な事を考えていたのに、攻撃はない。つまり、そこにオレが立ち入るのを待ってるって事だ。

今もどこかで見てるんだろう、こちらの様子ってのを。くそっ、最悪だ。

……でも、悪態付いても始まんねえし、ここまで来ちゃった以上諦めてやるしかない……よな、やっぱ。

はあああつと息を吐き出しながら、ゆっくりと立ち上がる。

落ちた木を背に、前方に広がるのは森の中にぽっかりと開いた空間。直径で3、40メートルくらい多分ある、広いその場所。

ここなら、翩り殺すつてのがやりやすいだろう。障害がない分、動きがオレよりいいと自負してるんだろうし。

一步、踏み出す。

どこから来る？ 四方に神経を集中させながら――

「ガキが来るとはオレ達もナメられたもんだな」

声は、上空を流れるように届き、地に降り立つ。やたら堂々と姿を見せたのは、その場の中央……何てーか、真正面。

「ガキで悪かったな」

ナメてんのはそっちだろ。気持ちにはわかるがなっ！

睨む。とりあえず顔を確認、間違いない。オレが言われた相手だ。違うヤツじゃなくてよかった。

内心安堵の息を吐き出すオレを見据えて、黒い双眸を細める。

「…はん。どこかで見た面だが……？」

「他人の空似だろ。初対面だ」

「そーかい」

クスクスと口元を歪めた笑みを零す。

じっと睨んだまま、もう1歩、踏み出した。こちらの間合いまでは、まだ遠い。“雪”を行き成りさらすわけにはいかないし、あちらがどのくらいの動きをするのか確認しなければならぬ。

オレにも追えるレベルの筈だ、でなければ親父は言わないだろうし……こちらの手にあるのが“雪”だと気付かれないければ、勝機はある。

ありがたい事にオレが誰だかわかってねえみたいだし、ナメててくれてるし。

「んーじゃ、お手並み拝見と行こうかねえ？」

ぐるりと一回転し、地を蹴った。

「愉しませてくれよなあ」

勝手な事をつ！ 半身になって突撃をかわし、3回転。立ち上がり、“雪”を持つ右手を腰に、左手を前に構える。

「一つ目はクリアってかー」

オレを品定めするように細めた双眸で笑う。気合いで負けてたまるか、と、メガネごしに睨む。

「つかね……やばいっす、速いんですけど。」

真面目に、これ以上スピード上げられたら避けられる自信がかなり……、ない。

“雪”を握る手に自然と力が入る。

「ガキ、その手のモノは飾りかあ？ なぁんで袋入ったまんまなんだよ、抜かねえのか？」

「……コレが気になるのか？」

「わざわざ持ってきてるんだ、いいモノなんだろうなあ。さぞかし？」

そりゃ、“雪”ですから。言えないがなっ！！

「悪いが、そう簡単に、期待には答えられない」

「そーかい」

クスクス笑いながら、ぶんつ、と右手を一振り。

「……ま、出し惜しみしてて死んだら、いー笑いもんだと思うがねえ？」

その手の爪が鋭く尖って伸びていた。……何だよ、そのままでも使えんのかよ。

「さーて、どこまで持つかなあ？」

言いながら、今度は右手を一振り。同じように、爪が鋭くなって、カチカチと合わせる。

……気持ち悪い。まだ特に何かをしてるって訳じゃねえのに、嫌悪感しかわかねえ……何でだ？

細めた双眸で、愉しそうに口元を歪め、突っ込んでくる。

「……ちっ」

袋に入ったまま、“雪”でなぎ払う。……て、払えねえええ！？

「よく止めたなあ」

愉しそうに、一言。ぺろりと舌なめずりをして。

……くそっ。止めたくて止めたんじゃねえっつーの。なぎ払うつもりだったんだってーの！

両手にがっしりと“雪”が挟まってる……じゃなくて、掴まれている、か？ この場合。

「……どこかで見た顔だな」

上から目線で、ぼつりと呟いた。身長差があるから実際上から睨まれてるわけだが。

「他人の空似だろ。初対面だってさっきも言った筈だ」
負けじと睨み付ける。

これは、何っーか非常にヤバイ状況のような気がする。

「どこだったか……」
聞けよ！

つーかマジで、オレとは初対面だっつーの！！

……まあ、ウチの家族、全然似てないってわけじゃな……いや、一部いるけど、オレはそうじゃないから、この近距離でいつまでも顔付き合わせると、気付かれないとも限らない。そうになると、虎の子の“雪”にも気付かれるわけで。

マズイよな……。

「……谷口慧斗^{やぐち けいと}。何で、こんな真似をした？」

とりあえず、聞いてみる。

つーか他のことで気を散らして貰わねえと……。がっしり掴まれて、こっちの力じゃ、どうにもこうにも動きそうにないっつーか、引いたら、あの両手の爪で切り裂かれるだろうし。

「年上を呼び捨てか」

ギリッ、と両手に力が込められたのが“雪”を通して伝わる。こっちも両手で“雪”を掴んで踏ん張ってるだけに、どうしたもんかなー……。しかもこっちは、抜きやすいようにって右手で持ってただけに、支点がずれてるからなコンチクショー。

「犯罪者に敬意を払えとは教えられてないから」

「はははっ、愉快だな。犯罪者か」

「違うってのかよ、あんな真似しといて」

オレの科白に、薄っすらと双眸を細めた。

「本能に従ったまでだ」

っ！！

コイツ、きつぱり、はっきり断言しやがった。

「我々は喰らう側、人間を喰って何が悪い？」

……ダメだ。

コイツとは、絶対、相容れない。根本的に、違う。

「元より、我らとて互いに喰らい合っていただろうが」

「……それ、何百年って昔の話だろ。今は、違う！！」

右足を半歩踏み出して踏ん張り、腰を落とすようにしながら左に捻って、谷口の驚いたような顔が視界の隅に映ったが、そのまま勢い付けて“雪”を振り上げた。

びりりりっ、袋の破れる音と、“雪”の振りに合わせて弾き飛ばされる、谷口。

「人間に混じって、人間として暮らしてるヤツだって大勢いるんだ。人間に混じる以上、そのルールを守るべきだろ」

数メートルの間を置いて、何ともなしに着地する姿を睨み付ける。

「一族が1つにまとまって以来、定められた掟、お前はソレを破ってるんだよっ！！ 2つもな！！」

今度は、こちらから仕掛ける。言いながら地を蹴って、一直線に谷口へと向かう。

現状でケリを付けないと、マズイ。

「はっ。それが甘いんだよ」

嘲笑うかのような声を上げて飛び上がり、両手の爪で攻撃をしかけてくる。

「生き残るためには当然だろうっ！」

“雪”で間合いを計るようになぎ払い、それでもなお突き刺してくる爪を交わして、蹴り上げる。……って、まあ、あっさり交わされるたが。

「一族内でバカみたいに同士討ちやってたから減ってんだよ。種類とか属性が違ったって、同じ一族には変わりねえのに！」

「甘いな。やっぱガキだな、わかってねえ」

「うっせえ！ ガキは余計……つぶねー」

「よく交わしたな。……踊ってみるか？」

後方に大きく跳んで、距離を10メートル以上おく。

薄い笑みを口元に浮かべ、両手を腰あたりで広げる。その周囲に、ねっとりとした嫌な空気が集まっていくのがわかった。……いや、まあ、あくまでもオレにはそう感じられただけで、実際は、単に“力”を集約させてるだけなんだろうけど。

“力”ある者が上に立つ、“力”のねえ者は、何されても文句は言えねえんだよ。それこそが、自然の掟ってヤツだ。オレ達が最優先して守るべきは、そちらだと思いがねえ？」

ふわり、と谷口の周囲……両手を基点にして、か？ 銀色の光る球体が現れる。

1つ、2つ、3つ、4つ、5つ、6つ、7つ、8つ、ここの……
……って、多いわっ！！

「お前と一緒にするな！」

ぎりっと“雪”を握り締める。

マズイ……

これを一度に放たれたら、避ける余裕がない。つーか避けきれる自信が全くない！

「否定するなら、止めてみる」

歪んだ口元でそう告げて、両手をオレに向けて振り上げる。全部かよっ！！ 一気に銀色の球体がオレへ向かって来た。

「……っくしょー！！」

袋の上から“雪”の柄を掴み布越しに“力”を通し、目前まで迫

った球体へ向けて、右手の力を抜いて一気に振り抜く。“雪”を預かってる以上、オレだって居合抜きくらい使えるんだよ。……へっぽこだけど！

眼前まで迫った球体は、振り抜いた“雪”によって四散する。

「な、に……？」

谷口の驚いた声も当然だ、きっとオレにそんな真似できるとは思ってなかったろうし。けど、全然喜べねえ。せっかくの隠し玉を披露しちまったんだからな。

姿を隠していた“雪”は、その柄の部分と一部を残して布が消し飛んでいる。無理もないが。だからと言って、刀身が見えているわけではない。そこに見えるのは、白い鞘。

谷口の視線は、当然のようにオレ……じゃなくて、オレの手の内にあるモノに集中してるわけで。やっちまいましたよコンチクショ

「……お前、どこかで見た顔だと思ったが……、そういう事か。——白い鞘は“雪”だったな。一族の宝刀“雪月花”の一振り」
やっぱりか、バレちまいましたよ……。

この後の展開はもう予想が付いたし、当然のように谷口はそう行動するだろう。内心絶望で一杯になりながら、“雪”を振って鞘を右手で握り直す。

「だから何だよ」

「追っ手の割に、本気で来ないから可笑しいと思ってはいたんだが……。無理もないな。長の末子、“なりそこない”か」

「——っ！」

唇を噛み締める。“雪”を握る両手にも当然のように力が籠った。

なりそこない——幼い頃に影で散々言われてたのを知ってる。今はもうオレの耳に入るようなところで口にするヤツはいないが、それでもそう言われ続けているのは、わかっていた筈だった。

なのに、あらためて面と向かって言われて、悔しさだけが込み上

げる。

誰も好きで、こう生まれてきたわけじゃないのに。

……母さんが悪いわけでもないのに。

「一族最強の、長の血。はははっ、あれは美味かった」

「……お前、何言って」「三知、だったか。“月”の持ち主は」……

……持ち主は親父だよ。オレ達は借りてるだけだ」

「……ああ、そうか。そうだったな」

クスクスと愉しそうな笑い声を上げながら。

「去り際に一撃、ま、掠っただけだがなあ……オレの爪に引っかかったヤツの血は美味かったぞ。その前に喰ったヤツなど、足元にも及ばないくらいにな」

「……っ、お前!!」

「まだガキで、なりそこないとは言え、お前もさぞかし美味いんだろうな。追っ手なんぞ、殺すだけでいいと思っていたが、気が変わった。お前は喰う事にしよう」

そんな事を歪んだ口元で告げて、舌なめずりを1つ。

……悪寒が走った。

ヤバイ、コイツ気持ち悪い。親父とは別の意味で、比べ物にならないくらいキモイ。

「その血肉、しっかりとオレの“力”にしてくれる。なりそこないのお前には宝の持ち腐れだろうからな、オレが有効活用してやるよ。感謝しな」

「ふ、ふざけんなっ! 誰がてめえなんかに喰われてやるか!!」

「お前を喰えば、三知にも勝てる“力”が手に入りそうだ。ははっ、三知は喰いがいがあるからな。長の娘とは思えんくらい、見た目がいい」

………は?

全身に走っていた悪寒が、一気に消えた。

何っ! か、アレだ。無理もない話だが、いや、気持ちは果てしなくわかるが……思わず笑いが漏れた。

「気が触れたか？ まあ、その方が喰い易いが」

気付いてねえ。コイツ、バカだ。キモイ上にバカだ。

「バカじゃねえ？」

それが、相手を挑発する科白以外何でもないとわかっていても、口にせずにはいられなかった。

ひくりと谷口の笑みが凍る。

「お前、本物のバカだな。オレをどーのと言う前に、何だ、お前なんか、ウチの一族にいらないうてか、その資格すらないね」

「血を撒き散らさないよう縊り殺そうかと思ったが、そんなに嬲り殺しにされたいのか？」

「何だよ、本当の事だろ。何を勘違いしてんのか知らねえけどさ、いや、……気持ちわからねえでもないよ？　けど、笑わずにいられねえだろ」

「何が可笑しい！」

「あー所詮、三下ってヤツだな。可哀想に……。——本条三知は、男だよ」

オレの科白に、場が凍り付いた。

あからさまに動揺つつ一か困惑した顔になってる谷口。無理もない。

心の底から同情する、この件に関してだけは。

本条三知——三知にいは、見た目はかなりの美人だった母さんに瓜二つな、オレの兄。言葉遣いは丁寧で自分の事を私と言うし、ストレートの髪を腰まで伸ばしてる上に顔は文句なしの女顔だし、体の線も細い。身長は170超えてるけど、声が男にしては高いというか、ハスキーなせいか、長身のすらっとした綺麗な女性によく間違えられる。街を歩けば知らない男にナンパされる。……ナンパ男は容赦なく殴り倒している事も付け加えておく。知らないけど。

だがしかし、どこをどう見ても女だが、しっかりばっちり男なのだ。

「それから、長の子供は息子ばかりが10人ってバカみたいな話、

一族内じゃ結構有名だと思ってたんだけどな。それを知らないつー時点で、終ってなくね？」

「……バカな、アレのどこが 「信じられなくても、事実だから。三知にいは、男」

2度繰り返し返したオレに、谷口が完全に固まった。

漫画とかなら「ひゆるるるる」って風が吹きそうな雰囲気がある。う。

緊張感がまるでなくなったこの情況に、オレは感謝しつつ“雪”を握りなおした。

仕切り直した、ちよつと卑怯な気もするが、これを利用しない手はない。

三知にいは、さんきゅー！！

谷口の硬直をよそに、オレは“雪”に“力”を込め始めた。

間合いに入るまで、6歩……。

一撃、それで決めなければならぬ。確実に当てるためには一気に間合いを詰め、その際のインパクトを最大限にするための“力”が必要だ。

それを成しえるために、この情況を利用しない手はない。

チャンスは一度。これを逃せば、次はないだろう。

谷口の様子を慎重に観察しながら、居合の構えを取り、ゆっくりと軀を鎮めて行った。

5 ケモノの子

一線———。

それは、全身全霊をかけた、全ての命運をかける一撃。

全力を預けて伝家の宝刀“雪”による居合い抜き。

谷口の立ち位置はしっかり間合い———というか、クリティカルヒットが可能だった。

「軽い…」

———筈、なのに。

唇をかみ締めて、形だけは“雪”を構える。見据えるは前方、全身を覆っていた見事な銀色の体毛を己の流した血で赤く汚してはいるが、しっかりとその両足で立っている姿。

くっそ、アリエネエ……。

呼吸が乱れて大きく肩を上下に揺らす。激しい動きをしたわけじゃない、ほとんど空っぽになる勢いで“魔力”を込めて“雪”を使った反動だ。元々、“握る”事のできる状態で、かつ全力を出せるようにと、遠き先祖が作りし一族の守り刀。

オレの全力でも、全然余力があるんだよな……“雪”の方が。

「遅かったってか？　ちくしょう、洒落になんねー！」

睨む先にいるのは、谷口だ。

ただ、人間が見たら絶対信じないだろうなって姿だが。

人としての谷口の面影は今や皆無だ。

生きている事を確かに告げる、僅かに動く肩と胸。だがそのいずれも、今や銀に波打つ毛皮で覆われていた。全身に毛皮を纏い、その耳は三角形にピンと天を射抜こうと立ち、呼吸のために開かれている口はせりでて鋭い牙を覗かせているし、俯き加減の頭だが薄く開かれている鋭い瞳は濃紺。極めつけは、両足の間から見える、尾。

じんろう
人狼。

それが、現在呼ばれている、その存在の一族の総称だ。

海外ではJINRO、酒じゃない。……どうでもいいか。

かつての呼び名はその土地、その国によって区々だったが、各血族が血で血を洗う争いに終止符を打ち、1つに統合された数百年前に、人狼に統一された。

理由はいたって単純だ。

それぞれをまとめあげ、長として君臨した者が、その血族が、自らを人狼と名乗っていたから。ただそれだけだ。尤も、1つに統合したと言っても、各血族によってその能力や特性が違うから、人狼なんたらって個別の種族はあるけどな。

「――は、ははっ…」

鋭く伸びた爪をそのままに、体毛で覆われた左手を頬辺りへと当てて、谷口が笑い声を立てる。

くそっ、全然平気そうじゃねーかよ!!

「腐っても、長の血族か…。やってくれる」
ぺろりと長い舌で口を舐め、

「頭も悪くはないみたいだな。仕損じたのに気付けば、止めを刺しに来ると踏んだが…」

言葉を紡ぎながら、俯き加減だった頭をゆっくりと上げた。

「見抜かれてたか」

愉しげに何言っただっつーの！ こっちは立ってるのがやっとなんだよ!!

有り難いんだが、ムカ付く。買いかぶり過ぎだっつーの、こんちくしょー。

「――で？ そのままでいいのか、なりそこない」

悠然と、ぱっと見ぼろぼろの谷口は激しく上から目線でそんな科白を口にした。

「お前なん 「なりそこない」には、無理か」
っ!!

自然と、拳に力が入る。

「なるほどな。だからこそ、呼び名」

睨むオレに返るのは、歪んだ相貌。愉しげに、卑下するように――

「……うるせえよ」

「一族の誉れ高き、長の血族。歴代の長の中でもトップを争うと言われている、今代の長。その末子　「うるせえ、黙れよ」　…哀しき、されど忌まわしき、混血の血ってか？」

っ、コイツ！！

「もう一度聞くんが、なりそこない」

「黙れよ…」

「そのままでもいいのか？」

「黙れってんだよ！！」

好きでこう生まれたわけじゃない。

「何も知らないくせに、エラそうに言ってんじゃねーよ！」

「だったら黙らせて見ろ、なりそこない」

「てめっ……くっ！？」

言い返す間もなく、谷口が跳躍して鋭く尖った爪を携えた両手を振り下ろして来る。慌てて振り上げた“雪”で受け止めて、いつかの再現。

「よく止めたなあ」

相変わらず上から目線で、“雪”をはさんで対峙する。

「うるせえ」

「さて、どこまで持つかな？」

ぎりぎりと力を入れられて、歯を食いしばって唇かみ締めて、口の中に鉄の味が広がって。どこをどうやったって、力負けているのはあからさまだ。谷口にはまだまだ余裕がある、少しずつ力を込めて押してきているのがいい証拠。それに比べてオレは限界ギリギリ。

でも、下がれない。

あそこまで言われて下がれるわけないし、大人しくやられるのも駄目だ。

コイツだけは、絶対に――

「肝心な事を忘れてんなあ、なりそこない」

嘲笑うように呟いて、鋭い牙を伴うその口をぱっくりと開いた。

「っ!!」

やばっ…。

一瞬、気がそがれて、力任せに“雪”を押し下げられる。肩口を狙って開いた口をぎりぎりですれ交わし、“雪”を右から振り上げるように捻って谷口の手を逃れ、そのまま左へと一回転して跳ね起きて――

「動きが鈍ったか？」

“雪”を構えるより早く、そんな声と一緒に右脇腹に鈍い痛みが走って、その勢いでふっとんだ。

数メートルを平行移動してから落下、それでも勢いは止まらず坂道を転がり落ちるようにして、

「がっ!?!」

強かに背中を樹木に激突させて、止まった。

マ、マミーが……出る。

全身痛いからもうわけわかんなくて、そんな事が脳裏をよぎった。左手には確かに“雪”の感触、離さなかった。偉いオレ。

「寝てる暇はないぞ」

愉しげな声に、頭で理解するよりも先に体が動く。

上体を起して右膝を立てて、“雪”を斜めに振り抜いて銀の刃を弾いた。次いで、振り下ろし、振り上げて、横に一線。

「さっきのは凡ミスか？ 100点だ」

何故か拍手を貰った。

「うるせえ」

肩で息を付きながら、視線を谷口へと……――げ。

思わず顔が歪んだ。

くっそ、眼鏡！ 気持ち悪……。

込み上げて来る嘔吐感を必死に堪える。視界に映るのは、さっき

までとはまるで違う世界だ。

同じ筈なのに、全く違う色を伴ったそれ。感じていた、谷口の臭いテリトリーであるその証、それが今はしっかりと視認できる。

歪んだ、鈍い藍。木も、空も、大地すら、いびつに歪んでみる。

一際、谷口の周囲がヤバイ。怨嗟の念が染み付いて、それを纏ってる。睨みたいのに、睨んでたら吐き気が……。

「くそっ、どこに……」

悪態を付く。さっき勢いよく飛んだ上に転がった、確かにそんな目にあったら眼鏡なんて吹っ飛ぶだろうなあコンチクショウ。

谷口だけは直視しないように、顔を向けつつも視線は地の上を張った。

アレがないと、戦えない。

くそ、情けねえ……。けど、体感だけでも悪いつつーのに、それを目で捕らえたらもっと洒落になんねえ。ただでさえ、状況最悪なのに、肌で感じるモノに上乘せして、それ以上のモノを視覚が伝えてくるから。

「次は倍だ」

オレの様子なんか気にするでもなく、ゆっくりと歩み寄りながら両手を広げる。

5の刃の倍は10、……つーかそれどころじゃねえんだよ、こっちは……！

「行くぞ」

くそっ！

左に、右に、弾きながら立ち上がり、最後の一本を避けて、谷口

——の、足元……より手前を睨む。

本人直視は出来ねえ……って、眼鏡！？

探し物は探してる時は見つからないってヤツか？　ちくしょう。

オレと谷口の間辺り……いやまあ、谷口よりだけど。そんなところに落ちてやがるよ。更に状況悪化。

壊れてない事を説に祈る。

……：つか、あれか？　これは仕掛けるしかないってヤツか？
あのまま進まれたら、谷口の背後に回る形になる。その方が楽に拾えるような気はするが、気付かれないとも限らない。アレがただの眼鏡じゃないって気付かれたら、壊されないと限らない。そう
なったら、オレ、終わり。

いやまあ、すでに終わってる気もしないでもないが…。

「愉しいか？」

乾いた笑いを浮かべていたオレに、そんな声。

「お前は愉しいんだろうな」

「そうだな。しぶといからなお前、それになりそこないでも長の子供。狩りがいはある」

「狩り、か」

呼吸を整える。

まだ、動ける。大丈夫。まだ、やれる事は残ってる。

“雪”を握る左手を差し出すようにして正面に構え、右手を口元へと運ぶ。

「オレは、高いぜ？」

人差し指と親指を噛み切って、唇に付いた血を舌で拭う。

右手を柄へと当て、神経を集中させる。血を流す2本の指で柄に輪を描き、鞆側の鐙の上下に添える。

「抜けるのか？」

「出来なかったら、預かってない」

ただ問題は、オレの方が空っぽに近いって事。それでも、やり方がないわけじゃない。“雪”は担い手の“力”を吸って、その威力を示すモノ。

本来は、ソレに触れるモノ全ての“力”を吸い尽くし、己の力を発動させるモノ。

制御する“力”が足りないならば、他で補えばいいだけの話。自身の持つ“力”以上を望むなら、それ以上に高純度なモノを“喰わせれば”いいだけ。

だから、親父はオレに預けてくれた。

このままでも、己を示せるように。何と言われようと、確かに、血族の者である証として。

“雪月花”が喰らうは、“力”。

従う事を示すは、作り主より続く血統。持ち主が常に血族の長であるのは、血を持ってその封を解く事が出来るから。そして。

最大限にその“力”を示すには、絶対高純度の“力”———
“魂”を喰らいて、“雪月花”は尤も輝く。

「“雪”、持って行け」

オレの呟きに、谷口の気配が変わる。

ゆっくりと右手で鞘の上をなぞり、その動きにあわせて“雪”が色を変えていく。

白い鞘は、紅の刀身へ。

血のように赤い、紅い、半透明な刃。

……いつ見てもコレは綺麗だよなあ。

いろんなモノを喰らって、時にその命すら奪って行くというのに。

切先までその色を変えさせて、“雪”が露になる。

「2ラウンド目」

呟く。

出来ればコレを最終ラウンドにしたい、ウィナーは勿論オレで。

「なるほど。禍々しくも美しい：か」

感嘆した声が聞こえた。

「欲しいって言われてもくれねーよ？」

「扱える血統ではないからな」

そう言ってからクスクス笑い始める。

「ああ、だが、お前を喰らえばそれも可能か」

風が鳴った。

迫る銀の刃を弾き、“雪”を構えて地を蹴る。右手は添えるだけ

にし、続く銀刃を叩き落とし、走る。

走る。

眼鏡に向かって！！……な、情けなっ。

「……って、待っ！？」

谷口も向かってきた。眼鏡を軽やかにスル……じゃなくて飛び越えて。

ちーん。

「ふざけんなーっ！！」

渾身の力で振り切りながら右側に跳ね飛んで谷口の側を抜ける。手ごたえあり。

軽かったけど！！

「……いい切れ味だ。意味はないが」

その声に気持ち悪いとか何とか言ってる余裕もなく反転し、構える。

我慢。我慢だ。後方5メートル、そこに眼鏡がある。それだけで到達出来るから。

谷口は半身になって、じっと自分の左手を眺めている。長く伸びていた筈の爪は、4本、極端に短くなっている。

……爪かよ！！

「爪じゃ、確かに意味ないな……」

ちくしょう、思わず同意しちゃった。せめて腕の1本くらいくれてもいいじゃねーかよ。

つまらなげにブンっと左手を振ると再び元の長さに戻った爪をカチカチ言わせて、完全に向き直る。

「宝刀と呼ばれるモノが、その程度の筈はないだろう？ 当然」

「たりめーだ」

ただ、扱うオレの方に問題があるけどなっ！！

正面に構え、じりじりと後退する。空気を持って体に伝うそれが、目で持って更なる嫌悪を呼ぶ。

……マジでヤバイ。

飛んで来た銀の刃を弾き、“雪”を横に掲げる。

「あぶねっ」

「後3センチってか」

“雪”で阻んではと言え、目の前でカチカチ鳴る爪先は気分のいいもんじゃない。先端恐怖症じゃなくてよかった…。

じゃねえ!!

「力勝負に部がないってのはわかったかと思ってたが」

「十分わかってんだよ!!」

“雪”を捻りながら蹴り上げるが肘で止められる、左手を返して爪を防ぎ、もう1度蹴りを入れる。

ただし今度は、後方へ跳ぶための踏み台にするため。

「遅い」

ちっ!?

落下点、谷口の手が見えた。もう刃物を手につて次元じゃないよ、手が刃物だよ。ういず刃物。

地に足を付いてすぐに後退、ギリギリで爪先が腹部を掠める。

服だけならセーフだ、セー…ふううう!?

「がふっ」

弧を描いて更に後方へ落下。間抜けにも蹴りをまともにくらった、つーかりーチの差が。経験値の差が!!

「……本当、面白いなあ。やる気があるのかないのかわかんねーな」

蹴り入れたポーズのままでそんな事を言う。

うっせ! んなモノあるわけねええええっ!!!!!!!!!!

思ってるだけで、動けないんだけどな。あー…痛え。

かくん、と首を右横に傾け——やりい、蹴られ損になんなくて良かったあ…。ま、かなりダメージ貰ってんだけど。苦笑しつつ右手を伸ばして、眼鏡確保。

「…めんどくせえ」

思わず本音がぼろっと漏れた。

「ははっ、そうか。…安心しろ、すぐに面倒だなどと考えられなくなる」

「じょーだん」

眼鏡を手に上体を起し、しっかりと装着。よし、あちこち痛いが何とかなる。存外丈夫に出来てるからな、この躰。自然治癒能力つてのもあるらしいが、まあ、ケモノつちやケモノだけに、傷やら怪我なら治りは早い。つーかそうじゃなかったら、とっくに死んでる。谷口云々の前に、親父のせいで。

谷口を睨み付ける。眼鏡OK！ 壊れてない、流石ばあちゃんお手製っ！！！！

「めんどくせえけど」

内心、微妙な安堵感に包まれながら立ち上がった。

「お前に喰われるのはご免だね」

右手を添えて“雪”を構える。結局、オレにはこの方法で“雪”を使うしかナイし。

姿勢を沈め、うつすらと双眸を細める谷口を正面から見据え、

「お前の血肉になるのも、“雪”を取られんのも」

若干前かがみに構えた谷口へ向かい、地を蹴った。

横に一線、かわされる。左から右へ振り上げ、かわされる。右から左へ振り上げ、かわされる。左から横一線、かわされ……エンドレス。

お互い様だがな。こっちの一撃は触れる事も出来ず、谷口の爪は“雪”で阻む。……オレの方が不利なんだが、まあ、そこは今更ってヤツだし。

何度目かの攻防の後、3度目の焼き増し。

「力が落ちてきてるな」

上から目線の谷口。余裕ぶっこきやがって、無理もねえけどさ。

「“雪”は疲れるんだよ」

正直な話“魔力”を込めて使うなら、そう躰に影響はない。まあ、負った怪我やら動いた事による疲労感とは別として。ただ今は、“魂

”を込めて、開封中。疲弊の度合いが、通常の5倍増し。多分。

「お前が未熟なんだろ」

るっせ。最初の一撃がなかったら、そうでもねえんだよ。こちららガンガン死亡ルート一直線なんだっつーの！！

「だからお前の追っ手に選ばれてんだよ」

嘲笑う声。顔も多分嘲笑。実際余裕なんて全然ないけど、そうでもして谷口の余裕顔をどうにかしないと、そうすれば何かの隙も出来るだろうし。オレでもつけ込めるような。

……そこまで躰が持てばいいんだけど。

「お前らの4人の中で、1番下っ端なんだもんな？」

ピシリ、と空気が凍った。

三知にいの時とは別の意味で。谷口の双眸が冷淡な怒りに燃え——肉の避ける音と、右腕に鋭い痛みが走った。

「あ、くっ……」

“雪”でなぎ払うも宙を切り、肩膝を付く。

ってえ。直下の怪我はしゃれになんね……。だらんと落ちる右腕に視線を移し、更に顔を歪める。肘下から肩口まで、か。思いつきり裂かれてんね……はは。

「……ってえ、ナメんな！！」

“雪”を左へ走らせ、谷口の爪を弾く。くそ、暢気にしてる場合じゃねえ、本気になってる……。

落ちた膝を奮い立たせて、痛みの走る右手を添えて正眼に構えて——ぞくり、と、今日一番の殺気を感じた。背後から。

「くそっ！」

慌てて振り向きざま“雪”を走らせるが、宙を切り——「遅い」

冷淡な声がすぐ耳元でした。嘲笑うでもなく、怒りに満ちているでもなく、愉しむでもなく、ただ、事実だけを告げる声が。

漫画ならがぶり、実際にはずぶり。右耳に嫌な音が届くけれど、それ以上に右肩に鋭い痛みが走ったのも束の間、激しい熱を帯びる。

右腕と左肩にも同じように痛みは走ったが、喰い付かれた右肩のそれには遠く及ばない。

背後からしつかりと捉えられ、耳障りな音が。

「…な、せよ、このやろっ！」

“雪”をくると反転させるように逆手に持ち直して、自由に動く左手で後方へと突き刺す。

「それはいらねーよ」

軽口が返るのと、“雪”が宙を切るのと、ほぼ同時。くそ、気付かず夢中で喰ってんのかと思ったのに…。反転しながら右肩に手を持っていく、大ダメージどころじゃねえな、コレ…。

「しかし、やはり長の血族か。なりそこないの割りに上等だ、三知よりいい味だしなあ」

両手と口の周りを血で染め上げてそんな事を言う。……全然嬉しくねえ。

つーか深い、この傷、マジでヤバイ。すぐ治療しないと死ぬね、確実に！ だからと言って――

「血が流れて勿体無い。時間をやるから止血しろ」

酷く冷静にナメくさった科白を吐きやがりました。

「ヤだね」

「ならすぐに意識を飛ばす事だな」

事も無げに言い切って、一瞬で眼前に迫るといい蹴りを飛ばして来る。反応しようと躰が動いた瞬間、右肩に走った激痛が全てを台無しにしてくれた。

まともに右腕……じゃなくて右脇腹、もうどっちでも同じだけど、そりゃもう痛みが走って無防備になった所に綺麗に決まって。オレは躰をくの字にさせて、吹っ飛んだ。

……飛ばされるの何回目だ？

頭の中はやっぱ妙な方へ行っちゃうんだが、そんな事はお構いなしで落下もせずに樹木に激突して、落下。

木に寄りかかるようにして、上体が起きた状態で止まったのはい

いんだか悪いんだか、わかんねえし、もう声もでねえし。息も絶え絶え、とは言わねーけど……結構、あの世の入り口が近づいてる感じがひしひしと伝わってくる。

谷口がゆっくりとした足取りで近付いて来る気配が伝わって、木に背中を預けるようにして向き直った。

「まだ意識があるのか。…随分と血が流れているように見えるが？」

「てめーで付けといて、何言ってるんだっつーの…」

「口だけは達者だな」

視線がオレからずれて左下へ。

「そんな状況になってもソレを手放さない、か」

「死んでも離す気はねーよ」

「安心しろ。綺麗に喰ってやるから」

馬鹿か！ 何でそんなに安心出来るってーんだよ、ちくしょー……。あーも、眩暈がする。悔しいが谷口の言う通り、勢いよく血は出たし、ま、今頭も撃ったしなあ。ここまでか、オレ？ あーごめん、兄貴。勉強無理だった。でもさ、やっぱ、コイツだけは絶対仕留めるから。

谷口が側まで来たら、全てを“雪”に込めて、開放する。

……この辺り一体吹っ飛ぶだろうが、まあ、こんな時間にこんな山の中歩いてる一般人もいねえだろうし、いいだろ。別に。大事の前の小事ってヤツだ。協会で旨く後始末はするだろーし……。コレ使うハメになるとは思ってたな…、オレがやったら、オレ自身が耐えられないから、まるっきり自爆だし。

ああ、本当、情けねえ……。

近づく谷口を見据えるのもやめて、俯く。今更、しかも一番しなくなかった覚悟をするハメになるとはなあ。本当、アリエネエ。

気配だけが伝える、谷口の歩み。

やるなら、1番効果あるゼロ距離だよな。そう思い、軀を少し右に傾けた。これなら左肩に喰らい付こうとかするだろう。“雪”

を掴む手を緩めて、開いた掌にその柄を乗せているだけの状態にする。まあ、握る力がもうほとんど残ってないからだけど。触れてさえ入れば問題ないし、何よりそれで谷口が油断して近付いてくれるなら恩の字だ。

……………？

その時をシュミレーションしながら待っていたオレは、それに気付くのに少し遅れた。

谷口が足を止めている。

気すらもオレより逸らしてからやっと、訝しむようにして顔を上げた。

「…は？」

谷口は、明後日の方へ頭を向けている。躰はその場に立ち止まったであろう状態のまま。そうして、その顔が、瞳が、愉しげに歪むのを目にして、ゆっくりと同じ方向、左へと顔を巡らした。

「なん、で…？」

思わず驚愕の眩きが漏れる。

それは完全なイレギュラー、ありえない、あつていい筈がない。

谷口のテリトリーであるこの空間の外れに、森から出てきたのであろう、小さな人影が1つ。小学生、もしかしたら低学年かもしれない、まだ幼い子供だ。距離があるし木陰の暗がりにいるから表情は読めないが、躰と顔の向きから察するに、谷口を正面に見据えているんだろう。

多分、驚きと恐怖でソレから目が離せなくなってる。

退魔師協会やら人外が存在なんてのは、表を生きる一般人からすれば夢物語だ。大人でもそれを目にしたら、泣くか、狂うか、逃げ出すか。時々平然としてるヤツもいるけれど、そんなのは極めて稀で———じゃねえよ！ あんな一般人つか子供が何でこんな時間に山の中にいんだよ！？ 親は何やってんだっ？ だいたい、あんな所にいられたら、使えねえじゃねーか！？

どうする、どうするよ、オレ？ ————って、そんなの決ま

つてる！

「お前、逃げろっ！！」

渾身の力で叫んだ。もう痛いとかそういうの言ってらんない、今すぐ逃げろ。すぐに立ち去れ、“雪”の影響の出ない所まで。

「死ぬ気で走」「逃がすわけないだろうが。――この時間に小さな子供か、前菜には丁度良い。迷って出た己の不運を嘆くんだな」
前のめりになって叫ぶオレを、無常な谷口の科白が遮る。

「谷口！ お前っ！？」

「なりそこない、お前は後でゆっくり喰ってやる」

一瞬だけ視線をオレに戻して、歪んだ双眸を愉しそうに輝かせて、くつくつと笑った。

6 最高消費者

谷口が躰の向きを返る。

木陰の子供に動く気配はない、つーか動けるわけねえよな…。普通に通に。

「お前っ！ 逃げごふっ…」

血が出た。

あー人生何度目かわからん吐血、お陰で科白が変に……て、違うだろ、オレ。

口元を拭い、両腕に力を入れて立ち上がろうとして、顔面から倒れ込む。

間抜けだ、この上ないくらい間抜けだ。

だが、谷口は全く気に止めた様子もなく、顔だけ上げてみれば、心底嬉しそうに歪んだ笑みを浮かべてる。一見するとただの嬉しそうな犬面なんだが。まあ、狂犬病の犬がちょっと嬉しそうにしてるって感じだ。

……わかんねえか。

「大人しく止血でもしておけ、せっかく美味しいのに勿体無い」

嬉しくもない科白でオレを横目で一瞥、完全に標的はあっちの子供に移ってる。

つーか何で動いてねーんだよ！ あの子供っ！！ さっさと逃げろっての、マジでどっか行けっ！——て、おい。

微動だにしなかった小さな姿が、1歩、前へと踏み出す。

何でこっち来んだよ！？ 訳わかんねーよコンチクショー。

「そうだ、逃げ様なんて無駄な事はしなくていい。——いや、逃げ回るのを追いかけるのも一興か」

腐れ外道！ この非人間がっ！！ …て、谷口は人間じゃねーよ。

そもそも同族喰いに人間喰ってるんだから、真っ当な訳ねーよね、

ははは。

…じゃなくて。

笑ってる場合じゃないから、オレ。

ここで余計な犠牲出そうもんなら、オレの夜になっても仕方ないよな決死の突撃がまるで無意味じゃねえか!!

「谷口い!!」

叫びながら“雪”を振り上げるようにして左手を後方へと、それは所謂、槍投げのようなポーズで。

もー自棄です、コンチクショー。

「無駄な事をして勝手に死なれるのは、困る」

「がはっ!」

科白と共に、銀色の球体が飛んできて見事に顔面直撃。

………カッコ悪い。

「大人しくしてろ、そう時間はかかるな…」

軽い痙攣をするオレの耳に届いていた、完全に嘲笑う谷口の科白が途切れる。

今度は何だと思いつつ顔を上げて見たのは、嬉しそうに舌なめずりをする谷口の姿。犬面だけど。

「喰いがいがあるな、ガキなのは残念だが」

それを目にしている正直な感想が谷口の口から漏れて、思わずオレも視線を走らせる。

木陰から進んで月光の元に姿を見せた子供は、一言で現すなら、

綺麗だった。

いや、子供だけど!

肩口できちんと切り揃えられた髪は月光を受けて輝く漆黒。何の感情も表さない双眸はアーモンド型の大きな漆黒の瞳。月の光のせいなのか青白く浮き出ているような肌は、太陽の下で目にしても色白なんだろうと思われる。大人になったら男は振り返ずにはいられないような美人になる事間違いないの、造形見事な美少女がそこにいた。

だが、小さい姿そのままに、幼さを十分過ぎるほど残したその表情は、無表情だった。

まるで能面のように。

月明かりの下に佇む姿は、まるで日本人形のように。儚さを感じさせながら、どこか影があるようにも見える。

「10年は経過した後が1番の喰い時か」

下品な笑いをしながらそんな事を言い、谷口は子供へと向かい歩き始めた。

「谷口、止めろ！」

「餌は黙ってろ」

「誰が餌だっ！」

“雪”を地面に突き刺して、それを支えに躰を起こそうと力を入れる。

「お前！ とつとと逃げ……」

睨むようにして子供へと視線を動かして、思わず言葉が途切れた。

全身に悪寒が走る。

嫌な予感がするという次元じゃない、本能が、それに恐怖した。

無表情だったその顔が、目は笑ってないのに、口元だけを歪めるようにして、小さな笑みを浮かべている。

それだけなのに。

出合っではいけない何かに遭遇してしまったような錯覚を覚える。

例えるなら死神とばったり出くわしてしまいましたといったような感覚で。……わかんねーな。オレにもわかんねえ。

1人乾いた笑いを漏らしそうになったが、その少女の笑みを浮かべていた唇が何かを呟いた。

「……は……？」

意表を付いたそれに躰がバランスを崩して喰い付かれた右肩から地面に落ちる。その過程で視界の隅に谷口が動いたのが見えて、落

下のインパクト。声にならない叫びを上げてから、右腕を庇うように反転し、……正確にはごろごろと左右に転がりまくったがそれは置いて。左腕に重心を預けて匍匐全身スタイルになってから顔を上げる。

いない。

少女の姿はどこにもなく、オレはゆっくりと視線を右へとずらしていった、谷口を見つけた。

若干前のめりになった変な体制で止まって、やはり少女の姿はなく。更に視線を右へとずらそうとしたところで、ぐらりと揺らいだかと思うと、どさりと音を立てて谷口が地に横倒しに臥した。

その傍らに、小さな人影が1つ。

「何で…？」

やっぱり無表情で、足元に倒れる谷口を何の感慨もない目で見下ろしているその姿。

何がどうなったのかさっぱりわかんねーが、確かなのは、オレがあんだけ苦勞した谷口を、無表情なその少女が何らかの方法で一撃（？）でのしたって事。

あえりえねー…。

「…ば、かな」

谷口の声が弱々しく響いた。その科白に、オレは激しく谷口に同意したくなる。

「まだ話せるんだ」

可愛らしいのに淡々とした声が続いた。

「おじさん人狼なんだよね？ その割には全然たいした事ないね。三流のくせに私の獲物を横取りするなんて、馬鹿だね」

年に似合わぬ嘲笑う科白が更に続き、谷口が震える。多分怒ってるんだろう。

てか何なんだよ、あの子供…。オレは全然状況が飲み込めなくて、本気で茫然と、2人を見つめる。

「この、ガキ…」

両手を地面に付いて、必死に立ち上がろうとする谷口。力が入らないのか、体を起こす事すら出来ないようで、その瞳が怒りでギラついているのがわかる。

「まだそんなに元気なんだ？　でも無駄だよ」

事も無げに告げて、少女が屈むようにして腰を降ろし、谷口の爪がそれを狙って走る。

「無駄って言ったよね？」

かなりのスピードで振り払われた筈なのに、簡単にその手首を捕らえた。

「人間如きにっ！」

弱っているのに、怒気だけを含んだ叫びを谷口が上げる。それを見下ろすようにして、少女の双眸が薄く細められた。

「誰でも、食べ物の恨みは深いよ。私の食事の邪魔をしたアナタが悪い。痕跡までしっかりと残してあったしね」

「――がっ」

びくん、と谷口の全身が一瞬震えて、止まる。

どさりと先ほどよりも小さな音を立てて地に臥した。動く気配はない。

つまらなさそうに谷口の腕を放すと、ゆっくりと立ち上がる。

「やっぱり三流か、人狼なのに。――ピンキリって本当なんだ」

そんな科白を吐き出してから、やっと視線をオレに合わせた。茫然としてたオレを品定めするように一瞥してから、谷口を踏み越えるようにしてこちらへと歩み寄って来る。

「おにーさんも、人狼なんだよね？」

谷口を瞬殺したとは思えないほど可愛い声が暢気に尋ねてくる。

「お前、一体……？」

間拔けな事に、そんなお約束の科白が口を付いていた。

それにピタリと足を止めると、軽く眉を顰めてみせる。いや、てーか、そうしたいのはオレの方なんだけど？　特に、その、物凄くうさんくさいモノでも見るかのような視線を真正面からどうどうを

投げて来るそれに対して。

「おにーさんの方が上等そうな匂いなんだけどな」

ぽつり、とそんな科白を口にした。

匂い？

鼻がいいと？ いや、ていうか上等って、オレ、谷口相手にかなり苦戦してたし、さっき殺されかけてただけど？

「お前も、そうなのか？」

訝しむように尋ねる、眉間に皺を寄せまくって。

「違うよ。でもやっぱり、おにーさんは、人狼なんだね」

あっさりと否定し、再び歩き始める。

意図が掴めず、眼前にまで歩み寄った姿を黙って見上げた。

「私が横槍入れたのは、問題になるよね。…でも、見過ごしたり、見逃すのは、無理だったんだよね。私も、命かかってるから」

左手に力を入れて、屈むようにして足を折ると、腹筋に目一杯力を入れて、左腕で支えつつ上体を起こす。

「さっきの、見つけたってのは…」

呟くオレに、無表情だった少女の口元が歪む。

「聞こえたの？ 耳がいいね、おにーさん。結構遠くにいたし、小さい声だったのに」

「何で、谷口が？ お前に、何かしたのか？ いや、そもそもお前一体何？ どの…」

「わからない？」

一気に零下まで下がったような声音に、反射的に半身引いて膝立ちになると“雪”を構える。

「直接それを相手にするのはまだ無理かな。——長の血族、その血肉を喰らいて“力”を揮う、一族の宝刀“雪月花”。時に持ち主の命すら奪うモノ。魔刀と呼ばれる所以もよくわかるね」

「お前、何でそんな事知って…」

「おにーさん、それを預かってるからって、本気にならないで殺されかかってたね」

っ!?

ちよつと待て、その科白は可笑しい。

気付かなかった。全く。見られてる感覚もなかったし、いや、それどころじゃなかったってのもあるけど。こういう状況で、他に誰かいたらそれを感じない訳がない。オレも、谷口も。

それなのにずっと見ていたかのような口ぶりだ。

「お前、いつから…?」

「少し前から。おにーさんが、がぶつとやられた辺りかな。気付かなかった?」

至極あっさりとした答えが返った。

思わずごくりと生唾を飲み込んで、目の前の少女を凝視する。暢気な科白だが、口調は変わらず単調のまま、顔は無表情で。

「さっきのおじさんはともかく、そっか…。ま、それはおにーさんが未熟者だからってだけの話だよ」

「って、何あっさりとヒト馬鹿にしてんだ!!」

「事実だよ。そもそも、本気にならないで殺され様としてる時点で、馬鹿だと思われてもしょうがないよ」

ぐっ…。

何なんですか、この子供っつかガキは!?! 見た目がいいと性格悪いってのの典型か、こんちくしょー。

「一応、かなり本気で、めっちゃうちゃマジだったんだけどな?」

「あ、そう」

流した!?!

本気でスルーするつもりなのか、顔をオレから逸らして北の空を眺める。

「お前…:…どんだけ 「ね、おにーさん」

文句を言おうとしたオレの科白を遮ったのは少しだけ愉しそうな響きが交じた声。

「何だよ」

「さっきのおじさんだけど」

「谷口はまだ29才」

思わずどうでもいい突っ込みをしてしまった。

「私から見れば十分おじさんだよ。それで、1つ確認したいんだけど。あのおじさん、仲間とかいたの？」

オレの事は半ば放置気味に科白を続け、最後の問いに思わず硬直する。

「その反応だと、いるんだ」

「…それがどうかしたのか？」

「別に」

北の空を無表情な顔で、何の感情も籠ってない漆黒の双眸が見つめる。

黙りこんで空を眺める姿を、オレも黙り込んで眺めてしまったり。

将来有望なのは容姿だけで中身は極悪とか、このお子様でアレだと、成長したらどんなになるんだっつーの。親泣くなー……いや、親の前ではいいコなのかもしれないな。結構猫を被ったりしてな、馬鹿な男は騙されるんだな、それで。

悪女か……。

何故か、身震いがした。

「――3人か」

ぽつり、と声が漏れる。

「何が？」

思わず聞いてみる。

「血の匂いが、3つ。こっちに来るよ。」

「は…？」

「覚えがないから、さっきのおじさんの仲間だと思うな」

「いや、覚えて？ 何で追手かどうかなんてのがわかるん……」

「何だ？」

「おにーさん、テリトリーが狭いね」

何だよ、このガキはああ！！

余計なお世話だよ、どうせ鈍いよ、悪かったな。こんちくしょー。

「てか、この感じは…」

「来るよ」

その声とオレが“雪”を構えて立ち上がるのとは、ほとんど同時だった。

後にくるようにして、3つ、影が降り立つ。

長髪のインテリそうなキツネ目男を中央にして、両脇にはガタイのいい筋肉質な大男が2人。つーか、お前等、キャラも見た目もかぶってんぞ。ま、双子だし、しょーがねーか。

「くそっ」

顔を確認して、悪態を付く。

「知ってる人？」

エライ暢気なことを聞いてきた。んな訳ねー。

「こっちが一方的にな」

「――“雪月花”か」

長髪キツネ目が品定めするように視線を投げて、

「慧斗は、ガキと侮ってやられたか」

動かなくなった谷口に横目で一瞥するようにして続けた。

「向こうも知ってるみたいだよ」

左隣から淡々とした声が返る。

いや、てかさ、そこでそういう判断はしないだろ、普通！？

「ガキ2人が追手か。ナメてんのか？」

「美味そうだからアリだろ」

肩を疎める大男2人。いや、お前等脳みそも筋肉？

「慧斗との戦闘で負傷しているな」

1人冷静にキツネ目男。

「だが。“雪月花”を手に行っている以上、全力で潰した方が得策だな。アレは暴走する事もありうる、持ち主に扱いきれず、または、持ち主が意図的に」

「詳しーじゃねーか、きりごきりめうどう錐崎竜道。腐っても、分家補佐役ってか？」
キツネ目、もとい、錐崎は小さく肩を竦めた。

「次期長と仕事をする機会があったものでね。それに興味は尽きない、その特性にも」

「あっそう」

「錐先、オレはあっちのガキの方が。長の息子とかいらねえよ？」

「ロリコン」

「わかってねーな、かきよう佳夾。ガキの方が美味いんだよ。そこに性別は関係ねえ。7、8歳くらいが1番の喰い時なんだよ」

「ロリシヨタか、きょうか夾佳。我が兄ながら、そこは一生理解出来そうにないな。それにオレは20代の方が喰い時だと思うがねえ？」

うんうんとうなりながら、筋肉だるまは変態筋肉だるまっぷりを発揮している。

兄は山井夾佳、弟は山井佳夾。

一卵性双生児の双子だが、メモにあった注意事項の変質者ってそういう意味だったのか……今更納得だ。ついでに、オレはどっちからも外れていて、一安心。

——じゃ、ねえ!?

思わず視線を左下へと移してみると、無表情だったその顔が、あからさまに不満げな色を浮かべている。つーか目え細め過ぎ。

「2対3か、子供相手に少々大人気ないかな」

「錐崎、でもアイツラ、谷口に2人がかりなんだからアリだろ？」

「子供だからね、彼等」

「それでやられてんだけど、谷口は？」

「慧斗は相手を見た目で判断して、中途半端に手を抜く悪い癖があったからね。油断大敵という言葉は、まさに彼のための言葉だ。補足するなら、後悔先に立たずでもいいね」

緊張感ゼロだなー…。

こっちのガキは、本気でご機嫌斜めですよって顔してるし。
何だろう、これ。この状況ってか、この空気。そういう状況じゃ

ないよーな気がするのにはオレだけか？　まあ、お陰で、いい感じに回復出来てるけどさ。もちっとこのだらつとした時間があれば、肩の傷は塞がるしなあ。

「あー、んじゃ、アレだ。タイマンならおっけー？」

「“雪月花”って話にしか聞いた事ねーけど、きれーだなあ」

「佳夾、駄目だ。それと、夾佳、あれは、長の血族にしか使えない」

「「えー」」

……えーって。もうおっさんなのに、「えー」はないだろ、「えー」は。確かオレの記憶が正しかったら、こいつらもう40歳とかだった気がするんだが……。ああ、まあ、31歳の錐崎に使われる時点で、お察し下さいか。

小さく深呼吸をして、すり足で半歩全身。

「十郎太君」

えらい人が良さそうに、優しげな笑みを浮かべる錐崎。

オレの本能が察した。こいつ、絶対、性格悪い。

「……何だよ？」

「君が協力してくれるみたいだから、色々と助かるよ。“雪月花”の事も含めて」

にこやかに告げられた、それ。

「逃げろっ！」

“雪”を右に構えて、地を蹴る。

「察しがいいね。流石は戦闘に長けた、長の血族といった所かな？」

右から横槍を入れた佳夾の爪を避けて左腕を掴んで捻って押し下げ、変な音がしたが序に踏みつけて跳躍、振り抜いた“雪”を錐先は変化した爪で受け止める。

「狙いはいいね」

「お前が1番強いからな」

「有り難う。でも、1つ忘れてるよ？」

「何を：」「1人で、僕達3人の相手は、流石に欲張り過ぎだと思よ？ それに、我々は喰らう者。ゆえに、追われている」

言われて、ハタと気付く。佳夾は避けて踏みつけた、でも、夾佳は対峙すらしてない。

「いただきます」

お行儀いいと褒めるべきなのか微妙な科白が聞こえ、肩越しに振り返ろうとして、

「余所見する余裕はないと思うよ」

何ら様子の変わらない錐崎の声と、“雪”を握ってる左手側から佳夾が右手を振り上げる。

「くそっ」

せっかく直った右腕が少しばかり挟まれるが、その手首を握って直撃はしのぐ。……つか、腕が交差してるし、力入れにくいし、動いたらやられるだろうからヘタに動けない。

「喰いがいねーなあ。余り美味くなさそーだよ、錐崎い」

「長の息子だから、美味しいと思うけどね」

「そっかあ……？」

何でこの状況でこいつら、どんだけ暢気に会話しやがるんだよ！佳夾の左腕は暫く使い物にはならないだろうから、その間に何とかしないと。いや、もう終わってる感があるっちゃあるんだが。

あーもう！ だから逃げろって言ったのに！！

「中学生なのに、恐るべきだね。流石は長の息子と言うべきかなかな？」

「それはどーも」

「十郎太君、君は、本気になったら、どれくらいなのかな？」
言いながら、錐崎の輪郭がぼやける。

「こんな事しながら変化出来るなんて、流石は分家補佐役殿だな」

「そーだよ、錐崎はすげえんだよ」

何でかオレの科白に、佳夾が同意して。んなもん、いらねーっつの！

で、当の本人は皮肉を込めたオレに相変わらずの笑みを浮かべたままだが、“雪”を伝わる圧力が強まる。

終わったなあ、とか。今日何度目かの悟りを開く。

どさつと背後でした小さな音が耳に届いた。ああ、やつちまったよー。オレの決死の特攻も無駄に終わりましたってか。ちくしょー。でも、だ。

巻き添え食ったのは悪いと思うが、自分から首突っ込んだんだし、自業自得って……——本当、悪い。んでも、すぐにオレも行くし、幾らでも苦情は受け付ける。変わりに、コイツラはしっかりと仕留めてくから。

オレの全部を“雪”に食わせる。

さつき谷口にやろうとした自爆技。やらねえで済んだと思ったけど……、はは、やっぱ、甘いんだな、オレ。

この近距離なら、逃げる間すらない筈だ。

「でもさ、錐崎竜道」

全身が銀色の体毛に覆われた、赤い瞳を見つめる。

「全部終わるまで、わかんねーよ？ 勝負ってのは」

「君にその覚悟があるとは思えないけどね」

「ま、全然ねーけど。一応、オレも 「さつきの科白、あなたに返すね」

はいっ!?!?!

科白を遮って、冷淡に、けれど、どこか愉しげな声が響いた。

「油断大敵」

可憐なその声は、すぐ傍でした。

「なっ……」

錐崎の顔が驚きに変わり、オレの視界から消える。“雪”が持つて行かれそうになるが佳夾を掴んでたから何とか持ち応え、——いたのも束の間、掴んでいた右手首に一気に体重がかかった。思わず放して半歩下がったオレの目の前を、膝から崩れ落ちていく。

「何で……?」

目を瞬いて、佳夾を見つめる。ぴくりとも動く気配がない。

「相手を見た目で判断しないってのはいい事だけど、相手が何なのかもきちんと見て判断出来ないんじゃ、三流だね」

淡々としたその声。すぐ傍で聞こえる。幻聴じゃないよな、そんなわけないよな。この上から目線の科白。こくりと生唾を飲み込んでゆっくりと視線を左へと。少し上げるようにしながら。

悪魔が悠然と笑みを浮かべていた。

…じゃねえ、違うだろ、オレ。落ち着け。

「お前…」

「おにーさん、私に助けられるの2度目。カッコ悪いね、私より年上なのに」

可愛く微笑んで告げられた科白に、思わず殴りたくなった。

「さて、蹴り飛ばしたおじさんは、このおじさん達よりマシなのかな？」

「蹴ったのか…。視界から一瞬で消えたぞ」

「助走付けてあったし」

「いや、そういう問題じゃ」「ガキが！！」

怒号が轟いた。

フェミニストっていう文字はどっか行ってるな……無理もないか。

思わず溜息を付いた後で、弾かれたように視線を走らせる。銀色の球体が数個、木を背にして立ち上がろうとする錐崎の周囲に漂っていた。徐々に増やしていく数。

「……谷口より多いな」

そう口にしてから、笹の葉のような形状の銀色の刃が混じっているのに気付く。

「同時に使えんのかよ、流石、分家補佐役」

「それってエライ人？」

どうでもいい事を尋ねて来る。

「一応は。人狼の中では結構上」

「あの人強いの？」

「協会はBランク認定してる。つーか谷口とかあの筋肉だるまツインズよりは全然強い」

「ふうん」

“雪”を構える。ちったあ回復してるから、“雪”を使えば相殺出来る筈。何たって、今回の開封は、命かけてんだし。

「餌は黙って喰われてろ！！」

吠えた。

「三流に命令される謂れはないよ」

こっちは毒を吐いた。

平然とした顔でそんな事を口にした姿を一瞥してから、ハタとする。余所見してる場合じゃねー！？

慌てて視線を錐崎に戻すのと、銀の光が飛んで来ると、同時に。

「邪魔だよ」

本気でそう思ってるんじゃない声で、オレに一瞥くれてから、前に出る。

邪魔って何だよ！　ってか、危ねーだ……——はい？

錐崎の狙いはいつの間にか摩り替わっていたのか、光は完全にその少女の方へ向かっていて。いやまあ、気持ちはわからないでもねーけど。

でも。

直撃した筈のそれは、全て、綺麗さっぱり消えていた。

当たると思われたその刹那に、むしろ、当たった後で？

「やっぱり、三流」

短いコメントを残して、うんざりしたように肩で息を付く。

「本当ならアレでよかったのに、余計な事するから後追ってきて、無駄な体力使ってるし。今もそうだし。それなのに、この程度か。どう考えても採算合わない。偉そうな事言っておいて、全然たいしたことないよ、おじさん」

何事もなかったかのように、毒を吐き続ける。

いや、何ていうか、目の前で起きた事にもびっくりだけど、その激しく上から目線とか、偉そうな事ってお前が1番偉そうなんだけど？

で。少女の向こうで錐崎は赤い眼を限界ギリギリまででっかくしちゃってたりして。無理もない。気持ちにはわかる。

しかし、どーいうからくりなんだ？ 防いだでもなく、弾いたでもなく、消えたって言葉しか合わない。

「面倒だから、さっさと終わりにしようか。門限過ぎてるから、早く帰らないといけないし」

すたすたと、普通に歩いて錐崎へと近付いていく。

すげー我儘だな……。

その背中を眺めて、内心呟いた。

「——お前、まさか……。何でこんな所に……？」

驚きだけだった錐崎の目に、声音に、怯えが交じる。

「おじさん、それ、本気で言ってるの？ ここが何処だか知らない筈ないでしょ？」

「馬鹿な、手出しは 私、関係者じゃないよ。15才未満の子供なのは、見てわかるよね？ それに、喧嘩を売ったのはおじさん達で、私はただの正当防衛だよ」

怯えきって後ずさる錐崎の姿に、オレは本気で疑問符が浮かんだ。

錐崎竜道は、退魔師協会でBランクに認定されていて、分家の家長の補佐役を務めてた経験があつて、兄貴達と一緒に仕事をした事もあつて、何より、里を出る時に、谷口と2人がかりだったとはいえ、三知にいを交わして逃げたヤツだ。

そいつが、怯えてる。

「冗談じゃないっ……」

錐崎が、叫びながら反転した。回れ右。……いや、敵に背中を向けちゃ駄目なんじゃないか？ 普通。それもわからないくらい、気

が動転してるって事か？ 走り出そうとして軽くコケる辺りはお約束：じゃなくて、追いかけないと！

「逃がさないよ」

酷く凍り付いた声だった。

後を追おうと地を蹴ったオレの耳に飛び込んで来た声、それに視線を走らせるが、——いない？

3歩で足を止め、周囲を見回す。

「がっ！」

呻き声をして、そこを見ると……：錐崎が首根っこつかまれて地に突っ伏していた。

掴んでいるのは、能面みたいに無表情になった顔の少女。

「逃がさないって言ったよね」

錐崎は必死にもがいているように見えた。それでも、少女の手が放れる様子がなければ、必死に抑えているという風でもない。だって、片手だ……。

「馬鹿な、馬鹿な！ こん、な：と、ころ、で……。霊ぐ……」

抵抗が弱まるのと、声が小さくなるのとは同時進行で、それつきり錐崎は動かなくなった。首をねじ切ったとか、締めたわけじゃない。

ただ、抑えてた、それだけで。

「やっぱり、三流」

事も無げな評価だった。

立ち上がり、不服そうに顔を顰めて、オレに向かって歩いて来る。

「——お前、いったい……？」

いつかの科白をもう一度繰り返したオレに、顔を顰めたまま視線を向けて。

「最高消費者」

短く、そんな科白が返った。

7 喰らう者

思わず凝視した。その科白の意味する所は、何だろうと。

「それにしても、本当に大した事なかったね。不味いし」

本気で不服そうに双眸を細めるその姿は、食べたお菓子に不満を言う子供の姿と全く同じだ。

ただ、意味合いが全く違う。

「お前まさか、アイツラを…」

「食べたけど。悪い？」

あっさりと、それを口にした。完全に開き直ってる。

生き物を糧にする種族は数多。

人間も動物を食べるし、時に食べられたりもする。

それでも、一方が一方を喰らい尽くさないよう、その種が他者に喰われて滅ぶ事のないように。退魔師協会によって、そこに明記されている種族は、同じく明記されている種族の命を奪ってまで糧とする事を禁じている。

それをした場合、退魔師協会より処罰対象として命を狙われる。

「元々、退魔師協会から処罰命令が出たし、人を喰ったせいで、人狼一族の掟が優先される事態にはなったけど」

「お前、協会の関係」「所属できるのは15歳以上だよ」……だよな。でも、お前のした事は…」

「人狼側からクレームが来る？」

「そうじゃなくて、お前…。アイツラは、まだ」「そうだね。生きてたね」

至極、当たり前のようにそれを呟く。

「退魔師協会は」「知ってる。でもね、私の貴重な食料を残らず食べて、しっかり自分の痕跡残しておいたのが悪いし、後の3人に対しては、完全に正当防衛だよ」

ごくりと生唾を飲み込む。

何の感情も込められてない瞳が真っ直ぐにオレを見つめている、口調は年に似合わないほど飄々としていて子供とは思えない。人間のフリをしているだけで、実は違うのかもしれない。長寿の種族なんかでは、子供の姿でも何百歳ってのがいるし。

でも、谷口に対して、自分からすればおじさんだと断言した。

それなら、多分に見た目どりの年齢なんだろうが、違和感が有り過ぎる。

わかっていて、どうして谷口を皮切りに、全員を喰った？ 知られば、自分が退魔師協会から討伐対象になるとわかっていて。

「お前も、アイツラと同じ…なのか？」

導き出される結論は1つだけだ。

アイツラと同じように、誰かを喰い、退魔師協会から負われる身なら。更に誰を喰らおうと関係ない。ただ、それでも疑問は残る。

“喰らう”と一言で済ませても、その有り方は様々だ。丸ごとなものいれば、一部だけってのものもある。有名所だと、血とか、目とか、手とか。

けれど目の前にいる少女は、そのどちらにも該当していないように思えた。

「あんな三流と一緒にしないでくれる？ 失礼だよ。それに…」

本気で不服そうに眉を顰めてそう呟くと、首を傾げるようにして科白を止める。

失礼って…。ルールをやぶって平然と人間のフリしてる方がよっぽど失礼じゃねーかよ！ ってか、そういう意味で言ったんじゃない！！

「お前、ふざけた事…って、何だ？」

双眸を細めて何か思案するような素振りを見せた姿に思わず問い掛けた。

「おにーさん、本気で言ってるの？」

「何がだっ！」

「おにーさんの方が上等な匂いがするんだよ？ ———— 凄く、美味

しそうな」

絶対零度に下がった声音に、背筋を悪寒が走りぬけた。
愉しげに歪む双眸、口元に浮かぶのは小さな笑み。

初めて見た時に感じた、アレだ。

出会ってはいけない、それに触れてはいけない、見てはいけない。

本能が、恐怖する。

知らないうちに“雪”を握る手に力が籠った。

「これって問題だね。手出し無用なのに、人狼一族じゃない私が
手を出した。クレームじゃ済まないかな、流石に」

クスクス笑いながら、ゆっくりと歩み寄る。

“雪”の間合いに入っているが、多分、それには気付いていない。

「でも文句言われる筋合いもないよね。私の邪魔をしたし、正当防
衛だし。しかも不味いし。逆に私が文句を言いたいくらい。あれだ
け騒いでおきながら、この程度なのってね」

2メートルほどの距離を置いて、少女が立ち止まる。

「おにーさん、それ、使ってもこの距離だと意味ないよ」
動じた様子もなく告げる。

「威力、知ってて言ってるのか？」

「一弥^{たかや}さんに、何度か会った事あるよ」
は…？

その固有名詞に、思わず緊張感がぷつぷつと切れた。

「何で兄貴に…」

「ここがどこだか、おにーさん忘れてない？ それと、将和^{まさかず}さんは
お父さんの友達で、弥生^{やよい}さんには、私の都合で隔月ペースで会って
るよ」

「親父の知り合いの娘？　つか、ばあちゃんとも知り合いつて…。
マジで何者だよ、お前」

「おにーさん。もしかしなくても、甘やかされて育ってるね」

ぐはっ！

自分より年下のお子様と言われたくねええ！！！！

「話を戻すと、その威力自体は関係ないよ。一弥さんが使っても同じ。空いてると、私に対しては無意味だよ。直接、こない限りはね」

「兄貴が使っても駄目なんじゃ、オレ如きじゃ全然駄目じゃねーか」

「使い手は関係ないよ、その性質に理由があるんだから。――一弥生さんにはお世話になってるし、他の人も知らない訳じゃないけど、お父さんにこれ以上迷惑かけたくないし、仕方ないかな」

「何が：？」

「私が余計な手出しをしたのを知ってるの、おにーさんだけだよ」

「だから？」

「死人に口なしって言うでしょ？」

歪んだ笑みを浮かべた。

「お前っ！」

「さっきのおじさん達じゃ全然足りなかったけど、おにーさんが美味しいのはわかるし、容量も多い。食欲を凄くそるよ。それに、お父さんに迷惑かけたくないなら、おにーさんを黙らせるのが1番と言う事で、おにーさん、大人しく食べられて」

「ふっ、ふざけんな！」

「痛くないから大丈夫だよ」

「そういう問題じゃねーっ！！」

叫びながら“雪”を揮った。

谷口に対して使い切った“魔力”は若干回復してるし、錐崎達には使わないで済んでよかった。つーか、何でアイツラいなくなったのに、オレは変わらず命が危機的状况になってんだっての！？ わけかねーよ、コンチクショー。

「意味ないって言ったのに」

降り抜いて隙のありまくるオレに、そんな声が聞こえて。

視線を動かせば、何事もなかったかのように立ってたりする訳で。

「冗談だろ…？」

「これが現実だよ」

「……そういや、さっき、錐崎の攻撃も…」

消えてた。んでもって平然としてた。……無敵か？ いや、でも、それなら、襲い掛かれても何もする必要はない筈だよな。なのに動いてて、つーか迎撃してた。錐崎だって片手で簡単に押さえつけてたし、どんだけ馬鹿力なのかと…。

……て、あれ？ ちょっと待て。

何だ、何かひっかか……って！ 何か来たーっ！？

「おい！ あぶねーだろー！！」

言いながら“雪”で払って、後方へ跳躍して交わす。伸ばされた右手は宙を切って、愉しげに笑う。

「おにーさん、頭大丈夫？ 私、おにーさんの口封じをしようとしてるんだけど？」

そうでした……。

まるで、肩に付いたゴミとかムシを払うって感じだよ、ちくしう。つーか、真面目に、アイツラよりコイツのが、思考回路が危険極まりない気がするのはオレの気のせいかな？

普通、そんな理由で世話になってるヤツの孫とか、知人の息子とか、弟とか、命狙わないっつーの！

「怪我はもう綺麗に治ったみたいだね。おにーさんの方が上等だし、ちょっとくらい抵抗しても構わないよ。面白そうだから」

「子供がそんな事言わない！！ 可愛げが全然ないっ！」

「別におにーさんに可愛いと思ってもらわなくて構わないよ」
あっさりと……。

「ただ曲がってんだよ、コイツ…。」

「逃げてもいいよ？ 逃がす気はないけどね」

「オレは、逃げ切る自信が全然ない」

「負けを認める発言だね。おにーさん、ヘタレ？」

「っさいわー！！　こんな知らん土地で、地元のヤツ撒ける訳ねーだろー！！」

「ああ、なるほど。でも、私が追いつけないくらいの速度で逃げつづけたら、エネルギー切れて追いかけれなくなるよ」

「そんな少ない可能性……って、エネルギー切れ？」

「そうだよ。でも、まあ……匂いは覚えたし、そうなる前に捕まえる自信はあるけどね。狙った獲物は逃がした事ないよ、一度も」

言いながら、一直線に向かって来るわけで、後方へ飛びつつ逃げるオレ。

……情けなっ！　んでも、全然殺気とかねーし、冗談なのか本気なのか微妙……いや、マジなんだろうけど。多分。

「狙った獲物って、狩猟でも趣味なのかよ。オレよりガキのくせに」

「確かに。おにーさんより年は下だけだね……、こういうのの経験値は間違いなく私の方が上だし、場数も踏んでると思うな」

そういうつつ、右に回りこんで蹴り入れてくるのを交わして、“雪”を正面に構えて距離を取る。そこに手刀が飛んできて、“雪”で払おうとすると向こうが避けるし、キリがねー。

「いや、ガキが何言ってるんだか」

軽く笑って余裕たっぷりと言い返したが、実際は結構ヤバかったり。

「私、5才の頃から、退魔師協会の仕事を斡旋して貰ってるんだよ」

口もアレだが、手も足も出るし、こういう教育受けてんだよ、このガキっ！！　口調に反して殆ど無表情だし、それが逆に怖えんだよっ！！　ちっさい分、リーチが短いからそこだけは助かってるけど！

「ったく。2年かそこいらじゃねーか。それにどうせ、保護者同伴だろ」

その科白に物凄く不服そうに眉を顰めて、距離を取ったオレを追わずに立ち止まる。

「小さいのは認めるけど、凄く失礼だね、おにーさん。私、これでも中1なんだけど。それに単独だし」

「はああ!？ 何寝言言ってるんだよ! お前のどこが中1なんだっつーの!! しかも単独とか有り得ないし!!」

「誕生日はまだ来てないから12才だけど、この山を東に下ったところにある、錫ヶ原^{すがはら}学園の中等部に在籍してるよ。1年2組」

「聞いてねーっ!! ってか、幹旋も何も、所属してないヤツに「お父さんにお小遣い稼ぎで分けてもらってるんだよ。1人で行く前は、お小遣いはなかったよ」

おいおいおいおい。お前のオヤジは何を考えてる!! オレんトコよりひでえじゃねーか! 違う意味でっ!!

「それに、狩猟っていうよりは、食事に出かけてるだけで、別に退魔してるのとも違うんだけどね」

暢気な口調で言いながら、地を蹴る。

「食事い?」

伸ばされた手を交わして、右に飛び退いて、再び距離を保つ。後を追って来るのに対し、“雪”を右手に構えて……ちよつと、待て。食事?

「そうだよ」

即答し、迫る姿に、一線。居合抜きのみで。

「食べないと、死んじゃうでしょ?」

簡単に上へと飛んで避けてから、当然のように科白を続けた。

……避けた。前は動かなかった、でも、今は避けた。って事は、だ…。

「そうだな。わかった、やっつと」

「何が?」

立ち止まり、オレを眺める姿は、ただの子供だ。どこをどう見ても。いや、やっぱり中1にはどうしても見えないけど!

それでも。つーか、年の話はおいというて。

右手をメガネに伸ばす。……真面目に、すげー確認するの嫌なんだけど。多分に、オレの予測が当たってれば、つーか、絶対そうだと思うんだけど……。

「メガネ、壊れたの？」

「いんや。これ、ばあちゃんお手製だし、そう簡単に壊れないから」

言いながらメガネを外して、――自分の存在が抹消される未来を再確認した。

そこにいたのは、先ほどとは全くの別人だ。顔は同じだけど。まとう気配も別物だ、メガネがないとよくわかる。直に見えるから。隠してても、化けてても、間近で見れば、わかる。

漆黒の髪と眼は、その色を変えていた。

白髪、紅眼。

雪のように白い髪と、血のように紅い眼。

「――“霊喰い”」

呟く。

「非似の色合いはあるが……。そこまで交じりつけないのが現す存在は、1つだもんな」

心底納得したオレの科白に、拍手が返った。

「見えるんだ？ やっぱり、おにーさんの方が上等だね」

「乃木月乃のぎつきのだな？ 現存する、最後の“霊喰い”」

「そう、正解。名前まで知ってるなんて、やっぱり弥生さんの孫だね」

「ああ。ばあちゃんに聞いた事あったし。――過去に例を見ないほど、強いってな」

「お陰で、日常生活に支障をきたしてるよ」

「そうは見えないが」

「動くのはね。でも、足りないんだよ、全然。普通の人間を生活にするのにね。満腹感とか味わった事ないし、ヘタに動くと、すぐに

エネルギー切れちゃうんだよね。そのまま食べられないと、死ぬし。やせ細って、弱って、餓死する訳じゃない。残量がゼロになったら餓死なんて、滑稽だね」

1歩、踏み出す。

「“霊”を喰らう事で軀を維持する、“霊喰い”。霊体だけでなく、霊的エネルギー、はてには、生きてるヤツの魂すら喰らう者。それゆえに、付いた字が、死神。――なるほど。最高消費者か、確かにそーだな」

「それで？ 対処法は、当然変わるんだよね？」

「どーしても、喰うってか？」

「うん。だって、美味しそうだから」

即答かよっ！！

「いや待て、口封じっていうなら、オレが黙ってれば済む話だし」

「それただの口実だから」

あっさりと暴露しやがったよ！

わからなくて当然だよ、こんなの。ばあちゃんに聞いてたのと話全然違うし。どこがいい子なんだよ、コレの何処が！？ あんたの孫、喰われそーになってるっつーの！！ 孫娘同然のように気に入ってるとか、実の孫の命がヤバイっつーのっ！

「それじゃ、続きやろうか」

「オレが勝ったら見逃してもらおうぞ。お前の事は黙っておくから」

「命狙われてるのに、優しいね。甘いって言われない？」

「っさい！」

「それで、どうやって勝敗決めるの？」

スルーかよ！

「……オレかお前が、ダウンするかで」

「わかりやすいね、いいよ。まあ、あんなおじさん達相手に苦戦してるおにーさんに、私が負ける訳ないんだけど」

……あれだ。オレが勝ったら、黙っておくけど、その性格、矯正するよう言おう。

「オレはまだ死にたくないんだよ」

「さっき殺されかかったのに」

ぐっ…。

普通にぶん殴りたい。つーかどこをどうやると、ここまで見かけとかけ離れた性格に育つんだっつーの！！

「オレが勝ったら、ケツ100叩きも追加する」

「セクハラ」

「安心しろ、お前みたいなお子様に興味はない」

「興味があろうとなかろうと、やられた本人がそう感じたらセクハラになるんだよ。知らないの？」

「勝敗に組み込んでるんだ、ただの敗者への罰ゲームだろ。それとも何だ？　口で言うほど勝つ自信がないってか？」

「おにーさん、挑発ヘタだね」

「……うるさいよ」

「慣れない事はしない方がいいよ。どう見ても、おにーさんは、いじられて、からかわれるってキャラだよ。残念ながら」

「っさいわー！！」

“雪”を右に構えて走り、振り翳して斬りかかる。

「正直な反応だね」

言いながら右へと避けて“雪”は宙を斬り、すぐに後を追って右斜めに斬り上げるがやっぱり宙を斬る。だが、今度は相手の手が伸ばされて“雪”で払おうとしたら、後方へ跳躍して逃げられた。

“雪月花”は便利だね。扱えるなら、担い手の意思で、他人の“魔力”を取り込めるんだから」

「お前にはかなり有効な手だろ」

「当てられるならね。先に言っておくけど、白羽取りなんて馬鹿な真似しないよ？　以前、一弥さんとの模擬戦で痛い目見てるからね」

何っ！？

兄貴いゝゝゝっ！！

余計な事をおおお！！

兄貴のせいで、

兄貴曰く可愛い末っ子は帰らぬ人になる確立が更に上がってるよ！

「それと、忘れてるみたいだけど。私、三流とは言え、人狼4人分の蓄えがあるからね」

……。

そ、そういえば！？ 谷口を皮切りに、丸々喰ってんじゃねーかコイツ…。

「稀に見る強い“霊喰い”ってのは、嘘じゃないってか」

「おにーさんが本気じゃないからわからないけど、今のおにーさんなら、食べても、全然余裕あるよ」

「さいでつか。つーかアレで満足してくれねえ？」

「嫌。不味かったし、足りないし。おにーさんは美味しいから、口直しにもってこいだよ」

「それはどーも」

「どういたしました」

「“雪”！」

！
フェイントを2発入れて、“魔力”を通して、直斬り。捕らえた

「“壁”^{ヘキ}」

ばちって音がして、“雪”が停止する。眼前で。

「符術っ!？」

「乃木家は、今は術師の家系で、符術は、両親とも得意な上に、母さんの実家ではお家芸だよ」

淡々と解説するその左手の符咒は、自然の法則に逆らって、直立で、静電気みたいなのを発生しながら、“雪”を塞ぎ止めてる訳で。

どんだけ効果発揮してんだよ、“雪”を防ぐって!!

「何で“霊喰い”が符術なんか使うんだよ!!」

「便利だから」

「必要ねえだろ、全然全く！ 触れるだけでいいのにつ!! つー

かそんな“霊喰い”ありえねえ!」

「わかってないね、おにーさん。そんなだから、昔の“霊喰い”は人間に殺されたりしてたんだよ。それだけだったから。物理攻撃に弱いのがわかってるのに、防ぐ手段を手にしなかったせいだね。ちなみに、私が覚えたのは便利だからだよ。符術って言っても、これしか使えないけどね。壁を創るだけ、でもそれで十分でしょ?」

別の符咒を右手に、上目遣いに薄笑みを浮かべて、

「獲物を逃がさないためにするには」

「ふざけんなっ!」

“雪”に込めたモノを四散させて眼くらましをし、後方へ飛び、間を取る。何てーか、こっちの飛び道具効かない時点で、間合いとるのはどうなんだよって感じはするが、居合抜きだけなら避けるってことは当たればダメージがあるって事だろうし。

てか、普通にぶん殴りたいんだけど。

「やっぱり“雪月花”は凄いな。符咒が一回でぼろぼろ、これ、お父さんのお手製なのに」

呟く科白に、思わず頬が引き攣る。

父親って、アレか。乃木管理者にして、北斗以外のSSクラス。そのお手製符咒ってか。……っーか、凶器、子供に持たせるなっ
ての。

「使う時と場合を心得てるから、凶器にはならないよ」

「人の思考を読むな!!」

「おにーさん、正直に顔に出すぎだよ」

右手に符咒を持ったまま、地を蹴る。

「お前は無表情の上に尊大で慇懃無礼で、性質が悪いわっ!!」

「酷いな、そこまで言われる筋合いないよ。“壁”」

斬り付けた“雪”を符術で防いで、左手を伸ばし、

「ちっ!」

半身になってすんで避けて、そのまま後方バクテンジャンプで上空へ逃れる。

「携帯鳴ってる、お父さんかな…」

音は聞こえないが、そんな暢気な事を口にして右手の符咒を、投げる。ペラッペラの紙の筈のそれは、硬い長方形のモノであるかのように真っ直ぐオレ目掛けて飛んで来たから交わし、

「爪が甘いね、おにーさん」

そんな声が届いた。

「壁」

その言葉と共に、オレの顔の右横で、正面が見える状態で、符術が展開する。

「がいっ!？」

右肩を寸断するように壁が展開し、オレはそのまま落下した。

で、落下地点に悪魔が駆け寄ってるわけで、もう必死に“雪”を縦にして、―――錐崎を吹っ飛ばした蹴りがそこに炸裂した。

勢い付いたまま斜め上空に吹っ飛んで、再び落下。葉っぱが受け皿に……なるわけもなく、若干衝撃を和らげてはくれたものの、その分、枝にダメージを負わされて、最後に強かに背中を打って終了。

一瞬、呼吸が止まった。

「勝負ありかな？」

動く気配はなく、そんな事を聞いてくる。顔を声のする方へと向けると間に木の幹が1つ、どうやらあっち側から飛ばされて、こっち側へってか。どんな蹴りしてんだっつーの…ガキのくせに。

「…オレが左に避けるように、投げたんだな。右に避けて展開したら、心臓寸断で即死だから」

「うん」

「マジで、場慣れしてんだな。普通、あんな風に壁造る符術は展開しない」

「基本的に身を守る術だからね。尤も、事前準備がないと流石に四方には張れないけど。でも獲物を逃がさないためなら、一面で十分だから、ぶつかってる間に追いつけるし。生きるためにやってるか

ら、私も必死なんだよ。まだ、死ねないから。どうしても」

「そっか」

それでも放さなかった“雪”を手に、背後の木に寄りかかるようにして状態を起こす。

「丈夫だね、おにーさん」

「……オレも、まだ死にたくないんだ」

「そう。それじゃ、仕方ないね」

「ああ」

背後で気配が動く。急ぐ気はないのか、ゆっくりと歩いてるらしい。

まったく、余裕だなあコンチクショ。

ああ、でもまあ、しょーがねえかあ。

「――ちっと待ってろ。すぐに済むから」

「何が？」

「足りねえんだろ？」

「どういう意味？」

「オレもさ、ばあちゃんに頼んでかけてもらってんだよね。これ。自分でだと弱いから。ただ、今、空っぽだから、不安は残るが」

近づく気配が止まる。

「どうせ喰われるなら、全部持ってけよ」

「負けを認めるって事？」

「もうちっと粘れっけど、その分、消費するし、色々。そうすると、お前の取り分減るからな。こっちに逆転のチャンスはねーし、そうした方がいいだろ」

「随分潔いね」

「お前じゃなかったら、“雪”に全部喰わせて、暴走さて、このヘン更地にすんだけどな」

「そうしたら？ 多分、私にそれ、避けられないよ」

「それだとオレも死ぬから。それに、どっちかがダウンするまでってルール決めただろ。オレが先にダウンした、それだけだ」

「そう」

「あー…10年ぶりくらいだなあ、元に戻るの。2度とねえと思っ
てたけど」

左手の“雪”を眺めて、柄を握りなおす。

“雪”、頼んだ」

刃を腹に差し入れる、所謂、切腹。

……ギャグでも何でもないから、笑うなよな。

“雪”は喰らって力を発揮する、基本、“魔力”を。だから、オ
レの躰にかかってる術を解くためにやっているんであって、斬ろう
としての訳じゃないから、躰に傷は付かない。まあ、こういう原理
なのかはさっぱり不明。五体満足だったら真っ当な方法取るが、右
手使えないからこの方法にした。1番手っ取り早いしな。

——右肩の痛みが遠のく感覚、自分の気配が遠ざかる感覚、枯
渴する感覚。

俯き加減だった顔にかかる前髪の色が変化し、視覚もこれまで以
上に見えるようになって、気配すらも様変わりするのがわかる。

「おにーさんの方が、やっぱり上等だよ」

「そりゃどーも」

軽く答えて、顔を上げて幹に寄りかかる。やっべ、予想よりキツ
イ。

“魔力”が枯渇してて、さらに重症だもんな、元に戻るって、両
方びんしゃんしてれば平気でパワーアップなんだろうが、この状態
だと逆に負担か、やっぱり。右手は沈黙しっぱなしだしな。つい
か肩の傷が全く痛くないんだが。あれか。もう死ぬか、オレ？

俯いて、ゆっくりと、“雪”を引き抜く。

「乃木月乃。全部、お前に、くれてやる」

「うん」

返事がして、近付く気配。

「あー…出来れば、急げ。あんま、もたねえ」

「大丈夫そうだけど？」

「少しはな」

伸びた両膝の上に、横に“雪”を置いて。

“雪”との付き合いも10年を数える。長いのか短いのか、わかんねーけど。まあ、お陰で、最後にちよつとは面目躍如って感じだな。“雪”を預かってなかったら今回来なかったんだし、オレが片付けた訳じゃないからそこは情けねえけど、伝わる話ではオレが4人を片付けたって事になりそうだし。

足音がびたりと止まる。

視線だけを動かすと、小さな足が視界の隅に入った。

せめて、中学くらいは卒業したかったけどなあ…。ま、しょーがねえな、自分で言ったんだし。他にも何か手はあったのかもしれないけど、オレの頭じゃアレが精一杯。

むしろ、あの4人を瞬殺した相手に、持った方だろ。ははは、情けねえのは変わんねーけど。あー…いい感じに気も遠くなってきた。傷は痛まないし、苦しくはないから。

死ぬってイマイチわかんねーけど………まあ、いいか。ただ死ぬんじゃないって、他人の寿命延ばすんだし。蹂躪する相手じゃなくて、しっかり負けを認めた相手に。それに…ばあちゃんのお気に入りだかな。うん。

尤も、気休め程度にしかなんなさそー………って。いつまで立っても、手が伸びてこない。そこにいるのに、何もしない。

「どーした？」

軀に力が入いんねーな、もう。

右に軀を傾けるようにして顔をあげる。

「……は？」

完全に気の抜けた、間抜けな声が出た。

だって、予想外もいいところだ。

半ば茫然と、オレを見下ろしていた姿に、眼があって、本気で驚いた顔をした姿に。

「そーいう、顔、出来んのか、お前」

思わず苦笑する。鉄面皮かと思ってたのに、意外すぎるな、こりや。

年相応の、驚いた顔。お子様全開で、ぽけっとしてるし。

「ど、して…？」

呟いたのは、本当に小さな声で。表情そのままに、驚いた子供の声。さっきまでの淡々としたしゃべりはどこいったやら。

「何、が？」

「だって、それ、私と、同じ色…。人狼なのに、何で、銀髪じゃないの…？」

「ああ。オレ、なりそこない、だから。オレだけ…。母さん、と、同…じ…」

ぐらり、と躰が更に右に傾いた。

「早く、しろよ。…先に、死ん、じ、まう…ぞ」

そのまま倒れてくのを止められなくて、意識もどんどん遠ざかって、何か言ってるけど、もーわかんね。判別無理。完全にぶっ倒れて顔面打ったけど、痛みはなくなつて。

視界がブラックアウト、眼が空いてるんだか閉じてるんだかもわかんなくなつて。

あー……無理。

8 一つの結末は、新たなる始まり

あー…。

視界がぼやけてる。何処だここ？ …何してたんだっけえ？
薄っすら開いた目は焦点がよく会ってなくて。

「――、――っ？」

あー…。何か聞こえる。

よく見えないけど、視線を動かして。

「…母さん？」

そこにあった顔に呟く。

「あだっ!？」

べしつと額にチョップが入った。

「寝起きにボケる余裕があるなら、もう大丈夫ね」

母さんが苦笑してそんな事を言う。

でも、確か、母さんはもう…。

「十郎太、まだ足りないの？ 本当、寝起きが悪いんだから」

しっかりと見える位置に手を構えて、にっこりと微笑ん…――あ
だあだだだっ!…!!

連打で5発。

「これで起きたでしょう？」

にっこりと、変わらぬ笑み。

…よく見たら銀髪、母さん銀髪じゃないよ。

「――三知に…？」

「はい、よく出来ました」

満足そうに笑って、多分赤くなってるであろうオレの額を撫でる。

「無事だったからよかったようなものの、流石に今回は無理をし過ぎ。後1歩で死ぬところだったの、わかってる？」

「え、えーと…？」

苦笑する顔に、瞼を閉じて考え込む。三知にいに頭を撫でられるのは結構好きだから、そこはいい。親父だったら逃げるけど。

オレ、何かしてたっけ？

もう一度三知にいを見ると、本当に心配してたんだってのがわかって…。

「…って、ああああっ!!」

「大きい声を出さないの」

ずびしつとまたチョップをくらい。

「三知にい、オレ、生きてんの？」

だって、死んだ筈だ。負けて、喰われてる筈だ。魂ごと。

そう、あの外身と中身のギャップ有り過ぎる“霊喰い”、乃木月乃に。

「まだ寝惚けてるの？ もっと強いんじゃないと、起きられない？」

言いながら、カチャって音がして、オレの頭上に“月”を構える。

「―――月”……って、あ、いや、三知にい、それちょっとやりすぎだからーっ!？」

「大きい声を出さないの」

ばしつと、青白い鞆で顔面を打たれた。真面目に星が舞って、くらくらす。生きてたのを確認した直後に、死にそう…。

「生きてなかったらここにいるわけじゃないでしょう？ ……十郎太、記憶障害とか起きてないでしょうね？」

「い、今ので飛んだかも…」

「そう、それなら、ショック療法でもう1つ 「いや、いい! 大丈夫っ!!」

“月”の鞆を押しつけるようにして、慌てて躰を起こす。

そうしてから、ぱちくりと目を瞬いた。

「オレの部屋？」

「そう。怪我とか色々酷かったから、向こうで応急処置だけして、

ここで療養。昨晚落ち着いたから、部屋に戻したの」

「……何で生きてんのかな？」

ぽつりと呟いたオレに、三知にいの苦笑が返る。

「運が良かったから、としか言いようがないでしょうね」

「……そーなの？」

どこをどうやると運が良かったになるのかさっぱりだが。何でオレ喰われなかったんだろうな？　そこらヘンが、運が良かったってのになるのか？

「十郎太、状況が切迫していたのはわかるけれど、今回の事は本当に無理をし過ぎ、私怒ってるのわかる？」

「……ごめんなさい」

兄貴には色々な意味で全然勝てないけど、記憶に全くないとは言え母さんと同じ顔をしてる三知には全然頭が上がらない。そういう意味で、確かに、オレは甘やかされてんだろーけど…。

「宜しい。：勿論、父さんにもきつく言っておきましたからね」

「え…？」

「幾ら人手が足りないからって、十郎太を行かせるのはやり過ぎ、結果だけを見れば無事に帰って来てるし、いいのだけれど、それでも、彼等の相手をさせるには十郎太はまだ早い。発見と治療が遅れてたら、本当に死んでたんだから」

「……うん」

「だから、父さんにはきつーい、お急を据えておいたから」

にっこりと笑ってそんな事を言う。……母さんと同じ顔してるから、父さんも三知にいいは弱いからな。オレが本気で嫌がっても止めないし、誰が止めても同じだけど、三知にいいが言うとすぐやめるし。

「それから、十郎太はきちんとお礼を言わないと駄目ですからね？」

「お礼…？」

「さっきも言ったでしょう？　発見と治療が遅れてたらって」

「…三知にいが見つけたんじゃないの？」

「違います」

「じゃ、三知にいと同じ、追手の人ら？」

「違います」

「え…？　じゃあ…」

誰が、という科白は、ノックする音に阻まれて。柱を。

その後少しの間を置いて襖が開いて、兄貴が顔を見せる。何でか顔は横向いたままだけど。

「三知、将道まさみちが来てる。お礼と謝罪に。根性だな、あんな状態であるんだから。嫌だろうが、顔を出してやってくれないか？」

言ってから視線を室内へと移して、オレと目が合ってから険しかった顔が微笑む。

「十郎太、起きたのか」

「あ、うん」

「気分はどうだ？」

「全然大丈夫」

「起き掛けにボケるくらい、いつも通りです」

三知にいが溜息がちにそんな事を言ってから、兄貴に視線を移す。

「将道さんは悪くないのに、弟の不始末で色々大変でしょうからね」

「お前が言うか、それを…」

「弟を止められなかった兄の責任は当然ありますもの」

平然と言い切る三知にいに、兄貴がえらい苦笑いしてる。…何で？

「将道って誰？」

「敬称が抜けてます、十郎太。立場だけなら私より上な方ですし、年も実力も十郎太よりずっと上です」

「…将道さんって誰？」

じろりと睨まれて、思わず言い直すオレ。その様子に、兄貴が溜

息を1つ。

「三知がここ2年組んでたチームのリーダーで、今回の逃亡劇の首班、錐崎竜道の兄」

「なるほど」

「謝られても、冬悟も沙奈絵も帰ってこないのに……。半殺しにされた相手に対面を願ひ出るなんて、本当に太い神経してるのね」

淡々と呟いた三知にいに、オレは思わず軀を引いた訳で。

「仕方ないので、お会いしてきます」

本気で嫌そうではないにしろ、少しだけうんざりしたような声音で言って、立ち上がる。

「そうしてやれ。それと、言うまでもないだろうが、アレ以上怪我を増やさせるなよ？ 今後の業務に支障が出る」

「今更1つ2つ増えても変わらないでしょう？」

並び立つ2人の兄の不穏な会話に、思わず視線を逸らすオレ。笑顔で冷氣漂わせて普通に会話する中に入れるほど、大人でもなければ、心臓が強い訳でもないから。

「将道は変わらないが、お前に問題が出る。前回は理由が理由だけに多めに見てもらえたが、これ以上は無理だから。謹慎にでもなったら支障が出るだろう？」

「……そうですね。わかりました、大人しくしておきます」

「足りないなら、いい相手がいるからそっちで息抜きすればいい。条件次第で本気でやってくれる」

「平常時の兄さんと互角に渡り合う相手にですか？」

「気晴らしにはなるだろ」

「それは……。そうですね。考えておきます」

「代価高いけどな」

肩を疎める兄貴に、同じように返す三知にい。

「それでは、兄さん。十郎太の事、お願いしますね」

「ああ」

そう言って、三知にいが部屋を出て襖を閉めて、兄貴がオレの傍

に腰を降ろす。

「躰の感じはどうだ？ 違和感とかは？」

「あ、うん…全然平気。——兄貴、あのさ、オレ、何で助かったのかな？」

「見つけてくれた人が、治療してすぐに連絡してくれて、管理者の乃木さんから父さんに連絡入って、それで」

「そうなんだ」

もたもたしてて喰い損なったのか、案外間抜けだな、アイツ。

「でも、それも運が良かったからだ。幾ら何でも無茶し過ぎだぞ」

「運って…。三知に何もそう言ってたけど、そりゃ、無茶はしたけどさ、でも」

「でもない。無事だったからよかったけど、本当に心配したんだからな」

「う…。ごめんなさい」

「ま、終わった事だからもう言わないが。…改めて、お帰り、十郎太」

「うん、ただいま…」

「で、躰の方は本当に大丈夫なんだな？」

「うん」

「そっか。それなら…どうする？」

「何が？」

「いや、そのままでもいいなら別にオレは構わないけど」

苦笑して、右手をオレの頭に乗せて撫でる。

「折角綺麗なんだ、隠しておくのも勿体無いと思うからな」

そう言われてから、気付いた。そういうオレ、術を解いてた。て、事は、だ…。

「親父に見られたら大変な事になる」

「…：…そうだな」

愕然として呟いたオレに、一瞬だけ硬直した兄貴が苦笑して同意した。

筆頭に上げて心配しないといけないのはそこじゃないのはわかってるけど、オレにとっては最重要死活問題だ。主に精神面で。

「ばあちゃん、いんの？」

「ああ、お前が目を覚ましてから本人の意思でって待ってるよ」

「そっか、じゃ、頼んでくる」

「やっぱり隠しておくのか」

「……そういうわけじゃないけど、慣れないし」

「そっか」

見慣れないってのは本当。何しろ10年近く見てないんだから。でも自分で変化させたのじゃ弱くて、オレの目じゃ見える訳で、鏡見るたび目にするのは、正直辛くて。

ていうか、母さん云々とか周りに色々言われて云々とかに加えて、今回の“霊喰い”遭遇も思い出して凹みそうだし。

「どっか、ヘンじゃない？」

「ヘンって？」

「いや、兄貴から見ても、どうかなって……」

「別にヘンとは思わないよ。母さんの髪と、爺様の眼だろ。そりゃ確かに、外見と本性がかみ合っていないのはあるかもしれない。でも、そんなの関係ないだろ、十郎太は間違いなくオレの弟で、父さんと母さんの息子って確実な証拠じゃないか」

「うん……」

「あらぬ噂が立ってるのは知ってるけど、それだって、“雪”を使ってるんだから戯言だって証明してる」

「うん……」

「オレとしては、そんな感じなのに、何でそうなのかなって不思議でならない」

「……何が？」

「自覚ゼロだから教えてあげない」

満面の笑みで、あっさり言われました。

いや、てか、何の話……？ それまでシリアスでわかりやすい話だ

ったのに、何で急にわけわからなくなるんだろ…。

「ヒントとか」

「そのまま1週間も過ごせば気付くと思うよ」

爽やかな笑顔。

「どうやら、言うつもりはさらっさららしい。

「…わかった。んじゃ、1つ聞きたいんだけど」

「うん？」

「オレの事助けてくれた人にお礼言えって三知にいわれたんだけど… 「ぐうううう」

…………。

真顔で真剣な話をしてたのに、オレの腹は何で鳴く!?

で、何で兄貴は笑いを堪えてんだよ!! ちくしょー。

「…ああ、怒らない、怒らない」

笑いながら言われても納得出来ないよ!!

「無理もないよ、丸2日寝てたんだから」

「……は？」

「一昨日の夜発見、で、今までずっと寝てたんだから」

「…そんなに？」

「それだけ酷かったって事。魂まで“雪”に与えて欠けた状態で、半死半生の自覚あってそこまで驚いてるなら、オレ、怒るよ？」

拳を握り締めて、にこやかな笑みを浮かべる。

「いや、その、何ていうか、死んだと思ってたから…。生きてて良かったけど、ちょっと複雑」

「何が？」

「言われた時も、向かった時も、対峙した時も、本当、全然覚悟なんて出来てなかったけど。でも、諦めた訳じゃなくて、そういうのも有りかなって… 思ったから」

アイツに喰われるなら、いいかなと思ったのは事実で。言えないけど。

勝ったのにオレ生きてるし、黙っておくってのくらいは守ってや

らないとな。好きで見逃した訳じゃないだろうが。

「死んでもいいとか、自棄になったんでもなくって。自分で納得出来てたっていうか…」

「そっか…。でもそれ、他の奴には言わないように。特に父さんにはね」

「…え？」

「最初に連絡受けて、父さん倒れたらしいし、その後も、やる事なのに、仕事丸投げして様態が安定するまで、ずーっと傍に付いてたから。何だかんだ言っても、父さんにとっては、十郎太は1番可愛いんだからさ」

「三知にいの間違いじゃねー…？」

オレの科白に、苦笑が返って。

「三知は確かに、母さんに瓜二つだけど。父さんにとって母さんの思い出、1番思い出せるのは十郎太なんだよ」

「何でオレ…？ 母さんに似てるのって、髪くらいなんだろ？」

「うん。十郎太は父さん似だからね」

あっさりとそれを口にする兄貴に、思わず顔を顰める。

それに右手を伸ばして、ぽんぽんオレの頭を軽く叩いて。

「不満そうな顔しない、自分でもわかってるくせに。でも、だからこそ、母さんと会った頃とか思い出すんじゃないかな。多分ね」

「むー…」

「とにかく、さっきの話はここで終わり。誰にも言わない、わかった？」

「…：…わかった」

「父さんそれ聞いたら卒倒して、北斗引退とかしちゃって、長も引退しちゃって、多分、24時間監視体制で十郎太を監禁するよ。家に。それでもいいなら言ってもいいけどね」

ひくり、と頬を引き攣らせるオレに、兄貴は満足げに微笑んで。

「納得したみたいだね？ それじゃ、食事の用意するように言ってくるね。お昼の時間過ぎてるから、夜まで待てないだろうし」

「あ、うん。有り難う」

「どういたしまして」

頷いたオレの頭を、またぼんぼん叩いて、立ち上がる。
襖を開いてから一瞬動きを止めて、思案するように首を傾げてから肩越しに振り返る。

「マミーも付けるから、着替えて居間においで」

「え…？ あ、うん」

頷いたオレに、何でか含み笑いをして兄貴は去って行った。

あの笑みは何だったんだろう……。

兄貴は親父みたいな食事への有り付き方をオレに強いたりしないだろうし、いや、流石にこの状況なら親父も素直に飯くらい食わせてくれるだろうが…。多分。

「ぐうううう」

…………。

食べ物の事考えたら本当に腹減ってきた。

ついでに喉もエライ渴いてる。むしろこっちのが酷いかも。……
ヤバイな、うん。やっぱり駄目だ。早めにばあちゃんに頼まないと。

オレは、嫌だから。

「よし！」

気合いを入れて掛け布団を捲って立ち上がり、脱力した。

…………。何で浴衣なんかなあ。部屋に移した時点で、着替えさせておいてくれればいいのに。この柄はアレだなー八乎やおにいいのお古か。まあ、八乎にいい曰く、四真しまにいいのお古らしいが。兄弟多いと、どーしてもお古の連鎖だよなあ。こんちくしょー。

ぶつぶつ言いながら筆筒を開けて、ジーンとTシャツ、念の為にパーカーを取り出す。

「……昼間ならいらなかなあ」

そう言いつつも浴衣を脱いだら寒気がしたから、しっかり着込んで。準備万端。

布団をたたんで、上に浴衣を投げて、部屋をぐるっと一周見回して、生きてんだなあ……とか再確認。

「マミーがオレを待っている!!」

気合いの雄叫びを上げて勢いよく襖を開き、

「その前にする事があると思うよ? 礼儀として」

全身が硬直すると同時に、上から下まで悪寒が走りぬけた。

……げ、幻聴?

今、凄くありえない声が聞こえたような気が。

固まったまま、ぎぎぎ……て音が聞こえそうなくらい機械的な動きで左右を見回して。

「……空耳か。そうだな、はー。ありえねー……」

「本当に失礼だね。小さいのは認めるけど、おにーさんだって大きい方じゃないでしょ」

……聞こえない、聞こえない。

それは、左の足元からするんだけど。母屋は右手側の廊下を進んだ先だし、うん。気のせいだ、気のせい。見ないでおこう。

くるりと小さく右回れし、背を向ける。

「そういう態度、取っていいと思ってるの?」

1歩踏み出したオレの服が突っ張る。

……夢だ、コレは。そうだ、きっと極彩色の悪夢。いや、もしかしたら、マジでオレ、死んでるのかもしれない。んで魘されてる。

……死んでも魘されるかどうかという突っ込みは却下で……!

「本条十郎太、それ以上無視するなら私にも考えがあるよ?」

ぐはっ!? 名指しされたーっ!!!!!!

しかも何か背後から冷気が漂ってるよお。ううう、母さん、オレ、そっちに行った方がよかったよーな気が物凄くしてきたよ……。

本気で、恐る恐る、振り返る。

白い髪と紅い眼の悪魔が冷笑してた。

「……な、何でここにいんの?」

「人の顔見て開口一番がそれ?」

オレより30センチは確実に小さい身長で、何で上から目線なんだろうな、コイツ…。

「……こんにちは」

「おはよう、じゃない？ おにーさんの場合」

「オハヨウ」

「おはよう」

「んで、乃木月乃、何でここにいる？」

「おにーさんが起きるの待っててあげたんだよ」

「…そりゃ、どうも。つーか、何で？ 誰かに見つかって喰いはぐったんじゃないの？」

「私がそんな間抜けな訳ないでしょ。失礼だね」

「……。くそ、兄貴に本当の事しゃべっとくんだったー！！」

「そんな事より、人狼って本気で頑丈なんだね」

「……まあな。んでさ、服、伸びるから引っ張るのやめてくんねえ？」

「だって逃げようとするから」

「悪いかよ！！ つーか、何でここにいんだよ！ 訳わかんねーよ、コンチクショー。」

「逃がす気はないってか？」

「別にいいけど。でも、そんな事したら、おにーさんがみんなに怒られるよ」

「は…？ 何で？ お前にぶべっ！！」

顔を強かに打った。

「腕を上げたな、十郎太」

次いでそんな声が頭上から聞こえて、鼻を抑えながら顔を上げてみれば、大元の元凶が、むしろオレの厄災がにこやかに笑ってやがった。

「親父…」

「ふむ。気配を完全に消してたし、月乃ちゃんと暢気に話してたから気付いてねーと思ってたが。残念」

わきわきと両手を握ったり広げたりしてて。

いや、何の話…？

「しかし、親子の感動の抱擁を避けるとは、いただけんなあ」

「思春期だから、きつと照れてるだけです。将和さん」

えっらい可愛いー声が、親父のフォローに入った。

「男の子はそういうものだって、お父さんが言っていましたから」

年相応の可愛い笑みを浮かべて、そう続ける。…ちよっと待て、何だその変わり身…！

「そうか…。月乃ちゃんは優しいねえ」

しみじみと頷く親父。って、待てや、何馴れ合ってたんだよっ！

オレ、そいつに殺されかけたんだっつーの…！！

「で、十郎太。いつまでなっさけない格好でいるつもりだ、しゃきつとしろよ」

好きで寝転がってる訳じゃねーよ。

って言えたらいいが、言えないオレは、釈然としないまま無言で立ち上がる。つーか、何で転がったんだよ？　そもそも自分の意思で避けたら顔面打ってねーよ。

「……それで、何だよ、親父？」

「何だよじゃねーよ。お前、月乃ちゃんにお礼は言ったのか？　は？」

思わず目が点になる。何で命狙われてた相手に礼を言わなくちゃなんねーんだよ？

「あゝ、何だ？　その顔はわかってねえな？」

「何が？」

「そりゃ戦闘中に月乃ちゃんに遭遇して、気付かねーで庇いつつ交戦とか、カッコイイけどよ？　本気でやって、殲滅したのはいいが自分も瀕死って、男としてちよつとばかし情けなくねえか？」

……は？

何の話だ、そりゃ…。

「それで、名乗らずに去るとかならカッコイイけどよ。そーじゃね

えんだもんよ。ぶっ倒れたお前を介抱して、恭一に連絡して、あ、恭一ってのは月乃ちゃんの父親で、あそこらへんの管理者な。それでオレんとこ連絡来たんだが、月乃ちゃんがいなかったら、お前、今頃あの世だぞ？　ほんつとに情けねーなあ」

思わず頭を抱えた。

あー……何だ、誰のホラだ、それ。って、言うまでもねーよな。ちらりと視線を流すと、にこにこ年相応の笑みを浮かべてやるし、この悪魔。何だよそれ、エライ豹変しすぎだろ。

「私も助けて貰ったから、お互い様だと思いますよ？」
平然とそんな事を言う悪魔。

「控えめだねえ、月乃ちゃん。ガツンと言わないとわかんねーんだよ、この馬鹿息子は」

「でも、怪我をしたのも私のせいだから」

せいっつーか、お前のが1番の致命傷だっつーの！！

「あーまあなあ、身を呈して庇うとかな、それで自分が死にかけてちゃ世話ねーよ」

「仕方ないですよ、一般人だと思ったんだし」

「そこも情けねえんだが。ま、しょうがねえ。まだまだだかな、十郎太も。――とりあえず、ほれ」

顔だけ向けて言いながら紙パックを投げ……って、マミーっ！！
がっちりキャッチ。

「さんきゅー」

「オレの息子なのにマミーとかなあ」

「るっせ」

言いながらストローを指して、早速飲み始める。

「ま、それで持ってるなら別にいいんだけどよ」

「……それが主食なの？」

軽く驚いた声と顔で疑問の声が上がった。

何っーか時々、ほんとーに時々だけど、普通の可愛いお子様だな。
見た目だけは。

「そーなんだよ、月乃ちゃん。笑ってやってくれよ。人狼一族最強の血族、“人狼吸血鬼”ともあるーもんがね、血いじゃなくてマミーなんだよ、コイツ」

オレの頭をがっしりつかんで、わしゃわしゃ撫でながらそんな事を言う。

「るっさいよ。普段出ないから、これで十分なんだよ。つーか足りないんだけど？」

500mlをあっさり飲み干して、パックをたたみながら尋ねる。それに対して、親父はこれ見よがしに両手を振って返してくるし。

「一弥が居間に用意してたからそっちにあるだろ。まあ、手遅れになって月乃ちゃんに襲い掛かれても困るから、持ってきてやったが。感謝しろ」

「ドウモアリガトウ。って、誰が襲うかつ!!」

「どーだかな。お前、初期段階をロクに経験してねーで育ってんだろ。普通は成長過程で自制を覚えてくんだよ、でもそれをすつとばしてるからな。可能性はゼロじゃねーよ」

「……絶対ないね!」

「暫くマミー厳禁にして試してみっか？」

「ごめんなさい」

横目で言う親父に、即座に謝るオレ。マジそれは勘弁っ!!

「んな事されたら、オレ死ぬ」

「別に死にゃあしねーよ、そんなすぐには。ただちよつとばかし、凶暴になるだけで」

あっさりとしたんでもない事言ってますよ、この親父。

「ああ、それと。月乃ちゃん」

くるりと顔の向きを変えて、オレを放置しやがるし。

「はい？」

「お袋が準備できたって言ってたぞ」

「本当ですか？ よかった。わざわざ有り難うございます」

本気で嬉しそうな顔をしてそう言って、丁寧に頭を下げて最敬礼。

オレに対する態度と違い過ぎねえ…？

「いやいや、礼を言われるほどの事じゃないよ。んじゃ、また後で」

しゅたつと片手を軽く上げて、疾風のよーに去って行く姿を思わずじと目で見送った。

9 非常食認定

親父が去って静かになった。

しかし、本気で何がやりたかったんだよ、あの親父は……。マミー持って来てくれたのは嬉しいけど、何かついでくさいんだけど……。

「……で、お前は行かねえの？」

まだ同じように立ったままの姿に問い掛けて、……すぐに年相応の笑顔が、物凄く邪悪な笑みに変わる。

「他に言う事あるでしょ？」

声の調子まで変わってやがるし……。

「お前、猫かぶりすぎだろ。それに、何だよ、あれ！　どんな作り話だっつーのっ！！」

「感謝してくれていいよ？」

「何がだよ、そもそもお前が横槍を　「私がいなかったら死んでたくせに」

ぐはっ！？

それは確かにそーなんだが、オレの命すら狙ってたじゃねーかよ、お前……。

「お礼は？」

目線は果てしなく下で、オレは完全に見上げられてる格好なんだけど、態度も何もかも、完全に上から目線。矯正しろって……こいつの性格。マジで。

「ドウモアリガトウ」

「心が籠ってないな、おにーさん」

「嫌味っぽいからそれヤメロよ」

「当たり前だよ、わざと言っててるんだから。――それじゃ、十郎太。心の底から　「呼び捨てかよ！！　オレのが年上だっつーの！」

「知ってるけど」

「しかも親父との態度差何!？」

「将和さんは、お父さんの友達だし、強いし、地位も高いし。敬意を払ってるだけだよ」

「オレには!？」

「何で？」

あっさりと、不思議そうに返されました。

「敬意を持って接する個所が微塵も見つからないんだけど」

思わず遠い目になった。泣きそうだ。何でもここまで馬鹿にされないといけないんだろう、あん時が初対面の、しかも自分より年下のヤツに。

「それで、お礼の言葉は？ 心をこめて」

「…………。どうやってつじつま合わせたんだよ？ オレより全然強

いやツらなんだぞ、あの4人。それに、オレには 「十郎太って、馬鹿？」

がはっ！

「あ、ごめん、そうだったよね。本気出さないで殺されようとするくらいにお人好しの馬鹿だったんだっけ」

って、1人で納得すんなー！ しかもすっげー失礼な事言ってるから!! オレをどうこう言う前に、お前が失礼だっつーのっ！

「私の言う事をすんなり受け入れられたのは、その状態の十郎太なら、あの4人に勝つ可能性があるからだよ」

「…………は？ 冗談だろ」

「事実だよ。奥の方に仕舞い込んで隠してるせいで、自分がわかってないのは問題だと思うけれど？」

「…………マジで？」

「しつこいよ？」

「…………わかった、じゃ、そういう事にしとくけど。んでも、どうやって認めさせたんだよ？ オレ、外傷ゼロでって無理なんだけど」
「首はねといたから」

…………あっさりと、何でもないように言われました。

本気でどういう思考回路してんだ、コイツ。

「頑丈な人狼一族、1番確実なのは、それでしょ？　だからそうしたの。文句ある？」

「いや、別にねえけど……。お前、いつもあんな事してんの？」

「普段は、自爆霊とか、浮遊霊とか、そういう雑多なお払い系の仕事を回してもらってるよ。今回もそれだったの。でも、行ってみたら、全部綺麗に食べられちゃった後だったから。そういうのって頻繁にある訳じゃないし、全部が全部、お父さんから回してもらえる訳でもないからね。だから私にとっては、1つ1つが死活問題なんだよ」

ああ、なるほど。ずっと言ってたのはそれか。

食い物の恨みって本当恐ろしいな……。

「——って、それなら何で？　オレ喰ったら足しにはなったんだろ？」

「食べたよ」

はい？

それはあまりに即答過ぎて、一瞬、頭が真っ白になったんだが…。

多分、恍けた顔をしたんだろうと思う。オレの顔を眺めながら、小さく、本当にかすかにだけど、嬉しそうな笑みを浮かべる。

「すっごく美味しかったよ。一弥さんよりね。それでね、勿体無くなって思っ、生かしておく事にしたの」

何でか悪寒が走った。

表情と科白があってないってこういうの言うんだろうか、いや、満足したみたいだからいいのかもしれないけど、何か違う。

オレの顔を観察するように黙り込んでから、にっこりと笑う。

「非常食として」

………はい？

今、何だった？　今、何て言ったお前——！！！！

「隔月で弥生さんに会うし、その時に来てもらうんじゃないくて、私

がこっちに来るようにすればいいだけの話だから」

にこにこ笑顔だが、言ってる科白が理解不能。つーか理解したくねえ。

「……冗談だろ？」

顔は完全に引き攣ってたし、声もヘンに上擦ってた。

「本気。だって、十郎太、私でしょ？」

「は？ 何で、オレが、お前の 「全部くれるって言ったじゃない」

……言ったか？ オレそんな事言ったか???

必死に記憶を弄る、幾ら決死で混乱状態だったとは言え、そんな悪魔に身を売るような科白……って、言ってるよおお!?

思わずその場に座り込んで頭を抱える。

「どうかした？」

「……いや、待て。あん時は、もう、死ぬってのが前提にあってだな… 「男のくせにグチグチ言わないでよ」

いや、男とか関係ないだろ!? ってか誰でも言うよ！ 何だよ

それ、しかも非常食って呼び名も嫌だろ、ふっー！?

同じようにしゃがみこんで、頭を抱えるオレの顔を覗き込む。満足そうなにこにこ顔と思っていたが、それはアレか、オレを嘲笑ってるってヤツだったのか。こんちくしょう。

本気で涙が出そうだ…。

「自分の発言に、責任を持って欲しいな」

そんな事を言う。

「——隔月、なんだな」

頭を抱えたまま、唸るようにして声を絞り出す。

「うん」

「わかった。言ったのは事実だし、しょーがねえ」

「潔いね」

「ただ非常食ってのはやめて欲しいんだが？」

「無理。だってそうだから」

即答でした。

オレの未来が真っ暗になった気がするのは何でだろう？

「もういいよ……。んでさ、1つ言いたい事があるんだけど」

「何？」

「何で呼び捨てなんだよ」

「十郎太さんって言って欲しいの？」

「嫌味っぽいな……」

にこやかな笑顔で言われたそれに、思わず、頭に浮かんだ言葉がそのまま口から出た。言った後でしまったと思ったが、これ見よがしに溜息を吐き出してから俯き加減になって視線を逸らす。

「ああ言えば、こう言う。我儘だね、本当。私より年上なのに」

「殴っていいか、乃木月乃」

「暴力反対」

「お前のは暴力じゃないのか」

「非常食だしね」

「……あのな、マジで。ほんとーに、お前ね、その性格をだな」
「臨機応変なだけだよ」

お前の方がああ言えばこう言うじゃねーかよ。お前がふざけんな
つつーの！

「……って、どうかしたのか？」

完全に俯いて、いつの間にやら目を閉じて小さくなってる。

「何が？」

そのまま、淡々とした声が返った。

声の調子はアレだ、相変わらずって表現が合いそうなくらい、可愛げが全くない。尖ってるし。だけど、何か、顔色悪いような感じがしないでもない。元々、太陽？ 何それ？ ってくらい、日焼けの日の字もないつつーか、もやしか？ ってくらい白いのはわかったけど、青白くなってるよーな……。

「いや、何か調子悪そうだけど？」

「気のせいだよ」

即座に否定して、すくつと立ち上がる。

「それじゃ、そういう事で。早死にしないでよね、せっかく見逃したんだから」

「もうちつと言い方あるだろ…、可愛げゼロだな、お前」

「別に十郎太に可愛いと思われなくて構わないよ。前にも言ったけど」

「あ、そう」

「じゃあね」

短く言って、すぐ傍を通り抜けて歩いて……って、やっぱ、ヘンだろ！？

「待った！」

右肩を掴んで、無理矢理振り向かせ…ようとしたら、ふら付いてそのまま倒れそうになってるし！

「オレ、ナイスキャッチ」

受け止めて一安心。……つかマジでちっさいな、本当に中1か、コイツ？

「誰のせいっ…。とりあえず、離して欲し」「ふら付いてるし、やっぱ顔色悪いし、何でだ？」……余計なお世話」

オレの親切心はエライ勢いで寸断されました。

投げ捨てたろうか、コイツ。

「とりあえず、離して。弥生さんのトコ行くから」

「……歩けんの？」

「そのくらいは残ってる」

残ってる？ 言い方が妙……て、待て。それってつまり……いや、でも、あれ？

「人狼4人分」

「いきなり何の話？ それよりも離して欲しいんだけど」

「更に、オレ。それだけ喰って、何でこんなに早くエネルギー切れしてんだ？」

ぴくって、小さくだけど、しかも一瞬だったけど、反応が返った。

動揺するような事なのか、思わず喜びそうになるオレ、何だか勝った気がしたんだよ。

「どーした、乃木月乃？ そりゃ、ばあちゃんが強いって言うくらいだから、許容量が多いってのはわかるけどさ。切れるにはちと早すぎじゃねーの？ 本気で足元おぼつかないって感じになってるよな、乃木月乃？」

「いちいちフルネーム連呼しないでくれる」

無然とした声が返る。どうやら言い返す元気はあるようだが、離せと言う割に、オレを引き剥がしたり、殴り倒す力はないよーだが。

「んじゃ、月乃」

「馴れ馴れしいね」

「オレが名前呼び捨てにされてて、何でお前に敬称をつけなきゃなんねーんだよ」

「非常食だから」

ちっさい成りで軽いけど、重みを感じてる時点で、自力で立てんのかも怪しい。つーかオレによりかかってるくせに、態度は変わらず。殴りたいと思う所だが、本気で調子悪そうだし、苦笑しか出ねえ。……って、オレは甘いのか。やっぱ？

「一応、オレにも人権ってものがあるんだがな…」

「…もうそれでいいから。離して」

「急に寛大になったな。倒れねえ？」

「まだ残ってるって言ったで」「んで、何で切れかかってんだ？」沈黙した。

言いたくなくて無言なのか、しゃべる元気もなくなったのかはわかんねーが。

「まさか、首落とすのに使い切ったとか言わねーよな？」

言いながら見下ろして、改めてそのちっさを再確認。兄貴達の気持ちは何となくわか……って、待てオレ。落ち着け。幾ら今、弱っているとは言え、コイツは悪魔で非道でオレを非常食とか言うヤ

ッだぞ。兄心を抱いてどうする。

しかし本気で小さいな。栄養不足のせーか？ 太陽の下で光合成しねーと駄目だろ。流石に、白すぎだっつー……。

ごくり、と無意識のうちに生唾を飲み込んだ。

少し斜めになっているせいで髪がかかって表情は見えない、けれど、青白い肌と首筋は見えて、自然とそこに目が行く。

——美味そう。

両手の肩口を掴んで少し引き剥がすが、顔は俯き加減のままで特に動く様子はない。そのまま同じ高さまで腰を落として、肩を掴む手に軽く力を込める。逃げられないように、抵抗する気力もないだろうが。

自然と口が開いて、首筋に……って、駄目だ！！ そう思った瞬間、噛み付こうとしたその場所に額を押し付ける。

「だーっ！！」

叫んで、掴んでいた手を離すと脇に手を入れて勢い付けて左肩に担ぎ上げる。

「…ちよっ、何するの！」

「っさい！」

あああああぶねええええ。心臓に悪いわ、ああ、もう、美味そ……じゃないから、オレは血とか飲まないからっ！！ 必死に自分に言い聞かせつつ、足は猛然とダッシュ。

「ばあちゃんとか連れてくから大人しくしてろ」

それで、オレはさっさとマミーを補充しに行かねば。こんなのにうろつかれたらあぶねえ。

「歩いて行けるよ、そのくらい」

ばあちゃん、離れに住んでるからここからだ歩いて10分かかる。

けど、今はそれどころじゃない。渡り廊下のガラス戸を開いて、裸足のまま降りて、一目散にそこへと向かう。走れば1分で着くだろう、きつと。

「あ、そう。んじゃ自力で降りたらー？」

担がれるままになって、嫌なら暴ればいいのにその気配はゼロ。無駄に体力消費して残量ゼロにしたくねえんだろうけど、降りるのすら躊躇うとか。本気で歩くだけだったんだなーと思いつつ、黙り込んだ姿に勝利を確信する。

危うく、誘惑に負けそうだったのはさておき。

「ああ、まあ、命を見逃してもらったお礼と思って気にせず乗っければ？」

「こんな安いので済むと思ってるの？」

「口だけは元気だな」

「後で覚えてなさいよ…」

「いや、無理じゃね？ オレ物覚え悪いから。―――ばあああちゃーんっ！！」

叫び終わる頃に、ばあちゃんの離れに到着。

「十郎太っ！ 病み上がりのくせに大声出してんじゃない！」

部屋ん中から怒鳴り声が返ったが、気にせず玄関を勢いよく開く。

「ばーちゃん！！ 早く急いでっ！！」

「五月蠅いって遠まわしに言ってるのに気付け、この馬鹿孫！」

木刀が勢いよく飛んできて、脳天に直撃。お星様が舞った。

っーか、もうすぐ70才とは思えない俊敏な動きだよ、ばあちゃん…。

「――と、あら、月乃ちゃん」

「こんな失礼な体勢で申し訳ありません、弥生さん」

やっぱり態度豹変かよ、わかってたけど、オレの立場は？ でもまあ、無理もねーか。オレ前から担いでるし、ばあちゃんにケツ向けてる訳だしな。

「いや、いいよ。キツそうだね」

「歩くくらいは大丈夫だったんですけれど」

「それなら、こっちこそすまないね。全く、気の利かない、馬鹿孫

で。女の子をどういう運び方してる……十郎太、およろしく」

呆れ顔で溜息を1つ吐き出して、オレの顔を一瞥した途端真顔になって両手を差し出して歩み寄る。オレから引き剥がすように腰を掴んで持ち上げると、そのまま赤ちゃんの手におさまった。

「任せた」

「お前に言われるまでもないよ、全く。女の子はこう運ぶもんだよ、十郎太」

くるりと背を向けてそんな事を言うばあちゃんは、所謂お姫様だつことゆーヤツをしてる。

「恥ずかしくて出来るかなもんっ!!」

「そういう事にしておいてあげるよ。さっさと行きな、また殴られたいなら構わないがね」
くっ。

どーやら、ばあちゃんには全部バレてるくさいな。

真面目な話、そんな格好で連れてこようとしたら、到着云々の前に確実に誘惑に負けてるっつーの。

「んじゃ」

「はいはい」

軽い返事が返って、ばあちゃんは部屋の奥に引っ込んだ。オレも反転して玄関を出て。

「やべ、裸足だ!？」 兄貴に見つかったら怒られる」

今更な事実に愕然としてから、来た時と同じ速度で部屋まで戻り、タオルで足を拭いて、廊下も拭いてから、何気ない顔で居間へと向かった。

結局のところ、たらふくマミーを飲んでる所に笑顔の張り付いた兄貴がやってきて、来るのが遅いから呼びに行こうとして足跡を目撃していたらしく、飲み終わるまで延々説教を受けるハメになる。

喉の渇きもおさまって腹も膨れて満足したオレは、そのまま寝ちゃった訳で。

次に起きたのは翌日の夜で、月乃は無事に帰宅したとかで顔を合

わけずに済んだ事にほっと一安心し、その後で、また再来月会う事になるのかと脱力した。

そうして、オレの中学時代最凶の思い出になる事件は終了したのだが、随分後になって、別にオレが行く必要はなかったという事実を知り、これは親父の仕組んだ、ただの布石だった事に気付くのだった。

一掌の上で踊る一

12月。

平和な日常にオレは心の底から万歳三唱。

尤も、今月の末には悪魔の来訪があるわけだが……——思わず遠い目になって机に突っ伏す。

「十郎太、親父が呼んでんぜ？」

何の音沙汰もなく、いきなり襖を開いてかけられた声にビクリとして振り返ると赤い頭の八乎にいが立っていた。

メガネかけてるから、黒髪に見える筈なのに、大学生の八乎には最近何でか赤く髪を染めている。ちょっと前は蒼かったが。

「八乎にい……。ノックくらい」「お前は女か」……いいよ、もう」

「で、親父が呼んでんだけど？」

「わざわざ言いに来てくれてどうも有り難う。てか、いつ帰って来たの？」

「さっき。親父に挨拶したら、ついでに呼んで来いって言われたから」

「ついでかよ！」

ま、八乎にいの部屋は隣だから有りなのかもしれないが。よく見たら、肩からでかいバックかけてるし、足元にトランクケースが1つ。

「わかった。てか、早くねえ？」

「大学生はとくに冬休み入ってんぞ？　こっちで兄貴と一緒に仕事するバイト入ったから帰って来ただけだし。稼ぐぜ」

「あ、そう……」

「羨ましいからってそんな顔すんなや」

「違っ！！　厭きれてんだよ！！」

「あー？」

途端に八乎にいの目がすつげえ細くなつて。

「おにーさまに対してなんだろうねえ？ その口の聞き方は？」

「誰がおにーさまだ！？ そんなお上品な育ち方してねえっつーの！！」

「…そりやそうだな。ま、今の科白、後悔する事になつてもオレは知らねえけど」

「は？」

「お前の進学先が決まったそーだ。良かったな〜十郎太」

にやにや笑ってます。八乎にいのその顔は、これまでの経験から行つて物凄く不吉な予感しかしねえ……。

「どこだつて？」

「自分で聞けつて」

「……知つてるなら教えてくれてもいいじゃん」

「しゃべつたらオレが親父に半殺しにされんだろ。せつかく休みの長い大学生になつたんだ、余計な怪我してバイト時間減らしたくないね」

「八乎にいの、バイトバイトつて、金に拘り過ぎだよ」

「しゃーねえだろ。小遣い少ねえんだから」

「1人暮らしなんかしてるからだろ、修行で世話になつてゐるトコで大学卒業するまでは面倒見てもらえるじゃんか。そーすりゃいいのに」

「面倒くせえ。つーか、家長とすでに同ランクだぜ？ オレはまだランク上がるが、もう50過ぎてんからむこうは無理だろ。何をどう修行しろっつー話だろーが。大体、場所変更はあっちからの提案だかな」

くっ！ あっさりと……。

そりや順調に昇格してるからいいだろーけどさっ！

「それに娘がウザイ」

「……モテるつて自慢かよ」

「面倒くせえ。オレは親父とか二刃兄貴とかみて〜に10代で生涯

の伴侶を決める気ねーの」

「遊び人……」

「あのな、本家の息子だからって理由だけでまとり付いてくんだよ。別にオレじゃなくてもいいわけ、そこは。わかるか？」

「わかんないね」

オレの科白にこれ見よがしな溜息が1つ。

「お子様にはまだ早い話か」

「るっせ！」

「ま、いいや。早く親父んとこ行けよ」

「……わかったよ」

オレの納得してない顔をそのまま放置して、しかも襖を開けっ放しのまま自分の部屋へと去って行った。

つーか、何でいつまで立ってもオレだけお子様扱いなんだっつーの。大体、八乎にいだって4才しか違わないのにさ。

はああああっ、と溜息を大きく付いて立ち上がる。親父を余り待たせると、オレが半殺しの目に合うからな……。

しかし、他の兄貴は早々に決まったのにオレは随分かったよなあ。

進路希望ギリギリじゃん。つーか普通に過ぎてるっつーの。このまま地元残りか？ とか言われてるっつーの。

人狼一族には、子供が15才になったら家から追い出して、他の人狼一族の家で修行させるって掟がある。昔は15才の誕生日当日に家を追い出されてたらしいが、今は、人間に交じって学生生活とcaしてゐるから中学卒業に合わせてそれが続けられてる。

……んだけど、オレは正直嫌で。

自分が余所でどう言われてるか知ってるし、どこでも歓迎しないだろうってのは流石にわかる。ま、例外が千早伯母さんのトコで、地元残りって言われてんのも伯母さんがこっちにいるからだろうし。

でも可能性低いんだよなー。三知にいが行ってたらしーから。

あー、何でそんな掟を未だにご丁寧を守ってんだろぅなあ。ちくしょう。

脱力しまくって、オレは親父の下へ向かうのであった。

+

翌日、放課後、進路指導室。

「それで、昨日、長から連絡があつて決まつたから書類持たせるつて言つてたが」

入るなりいきなり本題に入る、担任の奥谷先生。立場上、表立ってオレをどーこー言わない教師連中の中でも、唯一と言つていいくらい、オレの外見のせいで態度変えたりしない人。柄がいいとは余り言えないし、教師っぽくもないが。

「てっきり師範代んどこだと思つてたけどなあ」

「オレもそうだといいつて思っていました」

頷く。先生曰く、師範代は千早伯母さんの事。剣術道場で師範代を務めてて、先生はそこに通ってたとかで今でもそー呼んでる。

「だろーな。ま、座れや。それとどこだつて言つてた？」

1つ頷いて、テーブルを挟んで向かいに座りながら茶色のA4封筒を手渡す。

「どこかで聞いた事あるんだけど、錫ヶ原学園って言うってた」

「マジで？」

あからさまに驚いた顔になった。

「何か問題でもある学校？」

「いや、うーん……。まあ、近いってわけじゃねえけど、住んでない事はないか」

「親父の嫌がらせか」

難しい顔で呟いた科白に、ぽつりと本音が漏れる。

「3、40分圏内だろ。多分。んでもなあ、学校の方も：ああ、まあ、本条ならイけるか」

「やっぱり学校に問題が：？」

「問題っつーか、聞いた事ない訳がないんだよ。入試の難易度、全国トップ5に入るくらいレベルが高い」

ひくり、と顔が引き攣った。

「中高一環で、名うての進学校。偏差値がエライ高い。ま、共存学校だしな」

共存学校ってのは、人間だけじゃなくって、それ以外も受け付けてて混ざってる学校の事。勿論、人間だけってのもあるし、表向きは違っても“退魔師協会”で持ってる学校の中には人間以外のみってトコもある。

てか、それはオレとしては有り難いんだけど、何、その狭き門？

「……オレ、受験で落ちたくないんだけど」

「気合い入れて勉強すりゃなんとかなるよ。お前成績悪くないし」

何とかって……担任なのにそんない加減でいいのかよ？ 泣きたいよ、やっぱり親父の嫌がらせじゃん。

「それにほら、お前には、次期長が付いてる。兄の七と八なな乎が3年の時もオレが担任だったがよ、あの2人に比べれば元々がお前のがマシだし、次期長の指導がありゃ余裕だろ」

茶封筒から紙の束を取り出しながら、軽く言われる。オレはがっくりと頭を落として机にぶつけた。

「……その様子だともう始まってたか」

「先月休んで帰って来てから、家にいる時はずっと。留守にする時もしっかり宿題を置いて出かけてる」

「次期長が見てるなら、軽いだろ。イけるって」

「その前に死ぬかも」

「大丈夫だって。それに、立地的にも修行には最適……はあ？ 何だコレ、マジか？ うは、長もすげーな」

取り出した紙の束を眺めながらそんな事を口にする。何でかすげ

―愉しそうな笑みを浮かべて。

「何：？」

「ああ、いや。：見てないんだな、本条。コレ」

「親父に、明日、奥谷先生と見ろって。見たらわかってるよなって言われたから」

「なるほど。いや、しかし：長も思い切ったことするなあ。ま、本条の事考えてだろうが。アレか、遅れたのはジジイどもの説得に時間がかかったんだろーな」

感心したよーに言う姿に、オレは本気で疑問が沸いた訳で。親父がオレの事を考えてって嫌がらせてって意味が大半なんだけど、どうにも先生の顔はそうじゃないっぽい。

しかも、ジジイどもって…。

「よかったな、本条。お前の修行先、一族と関係ないところだぞは？！」

思わずがばっと顔を起こして、テーブルに身を乗り出すようにして凝視する。

言うまでもないだろうが、修行先は一族内の他の家。それ以外は駄目とは掟に記されてないけど、そこは暗黙の了解ってヤツで一族外を選んだりはしない。普通の親は。

「どーやって説得したんだろうな、コレ」

嬉しそうに一枚、紙を引き抜くとオレに見えるように差し出してペラペラと動かす。

「はあああああ！？」

思わず、叫んだ。つーか叫ばずにいられるかっ！？

その紙には冒頭に修行に関する在住地及び指導者とタイトルがあった。それはいい、まだいいが…。

「乃木恭一、国内在住唯一の北斗以外のSSクラス。最高の指導者だな。しかも場所が乃木の管理地とはなー、いい環境だなあ」

感嘆した科白。

いやまあ、そこだけ見れば、そうかもしれないけどさ。

「驚くのはわかるが、驚き過ぎじゃねえ？」

「いや…先生、それ…」

再び机に突っ伏して、今度は頭を抱え込んだ。

「何か不味い事でもあんのか？」

「……そこ、悪魔が住んでる」

「は？」

「悪魔が」

「狼男のくせに悪魔が怖いのか、お前。つーか退魔師免許取るんだろ？ そっち系怖がっててどうすんだ？」

「……狼男じゃないし。そっち系は全然怖くないけど、人間の皮被った人を喰ったよーな悪魔が住んでる。正直、これ以上関わり合いになりたくねえ」

脱力した体制のままぶちぶち愚痴るオレを一瞥し、先生はぼりぼりと頬をかいた。まあ、進路指導室での態度としてオレの状態は問題有り過ぎるのはわかるけど、無理。

「乃木の人間にもう会ってたのか」

何でピンポイントでわかるんだろーな……。

「仕方ないな、あそこ、人間だけど人外と平気で渡り合える神経持ってる稀少な家系だから。乃木のお家芸だぞ、低姿勢なのに自分有利に話を進めるとか、笑顔で人を陥れるとか」

……どんな家だよ。つーかあの性格は、育ちのせいなのか。矯正しようがねーじゃん、それじゃ。

「ま、オレも当主の乃木恭一に直接面識はねーけど。そういう話はちらほらとな」

「有名なんだ？」

「あー…まあ、な。……何たってSSクラスだし」

「先生、何か取って付けたような理由に聞こえる…」

「他にも色々逸話があるからな。まあ、本人に会ったし、言うまでもねーだろ」

「……親父みたいなの？」

「それはない」

きっぱり、はっきり、即答で否定してくれました。

「どっちかって言うと、見た目は真逆の筈だ。優男って話だから」

「……でもSSクラスって事は　「まあ、見た目どおりじゃないんだろうな。乃木の人間だし」

嫌な断言してるよ……。

「本人に会ったのと違うのか？」

「いや、娘の方に」

「跡取か」

「……そーなの？　符術も壁張るのしか使えないって言ってたけど」

「そりゃ違うな。ああ、そうか。……あー、アレだ。頑張れ」

急に同情に満ちた眼差しでオレを見つめてくるし。

ことさらに嫌な予感しか募んねーんだけど……？

「向こうは今と真逆の環境だかな」

「……それってどーいう？」

「乃木恭一には子供が4人いて、全員娘。娘馬鹿としても業界では有名」

行きたくねえ……。

本気で力が抜けて、椅子からずり落ちた。

それはつまり、あんなのが他に3人もいるって事だろ？　終ってるよ、勘弁してよ。やっぱり親父の嫌がらせじゃん。

「しかも、先祖還りの“霊喰い”いるし。跡取は長女でもう20才超えてんだけど、来年の昇給でSクラス確実ってのの筆頭に上がってたな。オレのがAクラス上がったの早かったんだけどなー……」

「先生は教師業優先してるからじゃん」

「あーまあ、ガキと戯れてるほーがオレには合ってるからな。長に言われない限り、あっちの仕事する気ないし」

「先生、何で退魔師免許取ったの？」

「師範代に良い稼ぎだからって言われて」

千早伯母さん……どういう後輩育成してんですか？

金じゃないだろ、言うべき所は。

「それにオレに合ってるって言われたしさ。まー確かに、仕事だけならいいんだけど、他が面倒でなあ……。上とのやり取りとか、決まり事とか。チーム組んで、明らかにオレより程度の低い脳みその持ち主の指揮に従わないといけないとかさあ。やってらんねーよ」

駄目じゃん、先生……。生徒の手本にならないといけないのに、駄目人間っぷりしか伝わらないよ……。いや、人間じゃないけど。

「教員免許取っておいてよかったよな、本当」

「先生、余り先生っぽくないけどね」

「そーか？」

「うん。でも、オレはそっちの方が嬉しいけど。だってさ、普通、オレとか言葉遣い注意されると思うよ？」

「オレよりマシだからな。注意しようがねえ」

自覚ありかよ……。

「それに、かたっくるしいのは好きじゃねーし。本条、とりあえず、顔出せよ？ 椅子座りなおせ。脱力してても始まんねーよ、もう修行地は乃木の管理地で、指導者は乃木恭一で決定事項なんだから」
ぐはっ！？

せっかく忘れてたのにいい！！！！

「それに安心しろよ、別に乃木の家に住むって訳じゃねーみてえだぜ？」

え？ マジで？？？ ——って痛え……。思わず勢いよく頭を上げて、テーブルに強かに打った。阿呆か、オレ。頭を抑えながら立ち上がると、先生は思いつきり笑うのを堪えてるし。ちくしょう。

「落ち着けよ？」

「うん。……で、何で？ 普通住み込みなんじゃないの？」

「娘馬鹿で有名というのから察するに、年頃の少年を同じ屋根の下に置きたくねーんじゃない？ 管理してるアパートって書いてある」

「アパート？」

「ののはら荘って名前で、104号室。独り暮らしだな、悠悠自適だぞ」

「……いいのか悪いのかわかんない。つーか悠悠自適じゃないと思う……」

「ああ、まあ、修行に行くんだからな。しかも乃木の管理地。協会で教育プログラム組んでやるにしても、Bランク以上指定区域だからな、あそこ。かなりキツイだろうな」

笑顔で何か言ったー!?

「せ、先生。今…Bランクって言った？」

「ああ。Bランク以上指定区域だから、それ以下は死ぬ可能性があるから却下と」

死ぬ可能性って…、そんなあつさり言う事か？ オレ死ぬじゃん、それ。

「お前は大丈夫だろ。Bランクの竜道撃退してんだから……」

あ、ああ、そういえばそんな話になってたーっ!?

「あの4人を1人で撃退してんだからな、ヘタな場所に修行に出せねーだろ。やっぱ。そこらヘンも考慮してんじゃねーの？」

自分の事のように満足そうな先生の顔から思わずオレは視線を逸らして、椅子に座りなおした。

「照れなくてもいいんじゃない？」

「……いや、だって、“雪”のお陰だし。つーか、何で先生がそんな事知ってんの？」

「三知はオレの弟分なんだが。師範代んところで一緒に修行した仲よ？ 冬悟もな。それで、まあ……な。うん。将道が半殺しで済んだのオレが止めたからだし」

知らなかった……

いや、千早伯母さん繋がりは、先生が師範代って呼んでる時点であるだろうとは思ってたけど、そこまでとは。それに冬悟さんの事

があつて三知にいがキレてたの知ってたけど、あの時の半殺しとかいう話はそういう経緯もあったのか。

てか、キレた三知にいを止められるって、先生やっぱ凄いな…。

「まー。三知も冬悟も、20代半ばでオレを踏み越えてったけどな」

「……先生、今、凄く感心してたのに。台無しだよ、それ」

「事実だからしょーがねえな。とにかく、ざっと見書類は揃ってるし問題ねーからコレで出しとくな。お前は受験勉強頑張れ」

「……先生、オレ、落ちてもいいかな？」

「次期長が怖くないならいいんじゃないか？」

あっさりと不吉な事言った!?

全身硬直したオレを横目に、出した紙の束を茶封筒に仕舞い込む。

「長は直情型だからどういう行動に出るか予想は付くが、次期長は予測不可能だからな。恐怖という意味なら、次期長を怒らせる方が怖いだろう？」

無言で頷いた。こくりでもこくりでもない、がっくりと。

「受かるしかないよな。七なんか、それだけで受験戦争クリアしたよーなもんだし」

暢気な口調でそう言って、立ち上がる。

「つか、兄貴、七にいに一体何をしたんだ…? それだけでって、

兄貴を怒らせたくなくてって事だよな? いや、気持ちはずげーわかるんだけど。

「本条。もう帰っていいぞ。気合い入れて勉強しろや」

「……はい」

「んじゃ、明日な」

右手をひょいと上げて、左手に茶封筒抱え、やる気なさ全開で進路指導室から出て行く姿を思わず見送ってから、溜息を1つ。それからろのろと立ち上がって、足元においてあったバッグを手にオレも帰宅の途に着いた。

オレの人生、終った気がするの、は、きっと気のせいじゃない筈だ。
ちくしょう。

月乃の日常1

何の変哲もない一日が終わろうとしている。

「ただいま」

「お帰りなさい、月乃。……これ、恭ちゃんから預かってるわよー」

そう言って取り出す、一枚の紙。

「今回は早いね」

「恭ちゃん、ほら、人狼さん達のお手伝いしてるから」

「それで回してくれたんだ」

「そうなの。少し遠いんだけど、送る？」

紙を受け取って目を通し、肩を竦める。

「電車で1駅だから大丈夫だよ。それにまだ結構残ってるから」

「そう？ ……何かあったら連絡頂戴ね」

「はい。さく姉は？ 今日家はいるって朝言ってた気がするけれど」

「一弥君から連絡があって、駅前で張り込みするって言って出かけたけれど」

「……さく姉、何をたくらんでるんだろう」

「多分、ただの口実で信司君とデートでもしてるんじゃないかしら？」

「お母さん、今日は平日……」

「あら。それなら信司君はまだ銀行ね」

「うん、流石に仕事サボってまでさく姉と会ったりしないと思うから。それじゃ、着替えて行って来ます」

「ええ、気を付けてね」

穏やかに微笑む母に頷いて、部屋へと向かう。日没までにはまだ時間があるがのんびりしていて帰宅が遅れるのは良くないだろう、ただでさえ問題が起きているのだから。

——工事現場の除霊、か。SSランクの退魔師に回ってくる仕事とは思えないんだけど、自分の管理地だから仕方ないのかな…？内心呟いて月乃は溜息を1つ吐き出すと、着替えるために母親から渡された用紙を机の上に置いた。

押入れを開いて腰を降ろすと、下段に入れてある筆筒の引出しを開いて洋服を取り出し、学校指定の制服を脱いで着替える。

制服が皺にならないようハンガーにかけてから、背伸びを1つ。

「さて、食事に行きますか」

+++++

てくてく、と。

アパートを出て、駅へと向かって歩く。

言う必要もないが、月乃は小さい。

12才、中学1年生、というのが月乃の身分だが、ハタ目には、小学校低学年にしか見えない。

父親——正確には父の母、つまり祖母の幼い頃によく似ているらしいのだが、遺伝子の不思議の技か、童顔なのは母親譲りだ。それに合わせるように、足りなさ過ぎる身長も。それらのせいで、非常に幼く見られる。

だからと言って不満があるかと言われれば、答えはノーだ。

元より、見た目など、気にしていない。

他人からどう見られようと、その本質を自分が理解していればそれで十分な話だ。

それに月乃は真面目に興味がなかった。

自分の外見にも、他人の外見にも。

同じなど、ありえないのだから。

とはいえ、10才の誕生日を迎えた直後に幼稚園児と間違えられたのには、流石にむっとしたが。

てくてくてくてく、と。

躰のバランス的に足は短くないのだが、元々の身長のせいでコンパスはかなり短い。

本人は普通に歩いているつもりでも、それを表す擬音はてくてく以外存在しなのだ。

「……………ベアキャット。今日は電車に乗るんだけど？」

塀の上を付いてくるように歩いていた黒猫に向き直って、月乃は立ち止まった。

にゃあ、と泣き声が返る。

言葉が理解出来るのか、同じようにして、金の双眸がじっと月乃を見下ろしていた。

「どこで知ったの？ 確かに、方角は同じだけど、付いて来る気満々だね……………仕方ない、寄り道しようか」

苦笑しての科白に、にゃあ、と満足げな声を返して、黒猫——ベアキャットは月乃の足元に降り立つ。

「お花買って行かないとね」

呟いて歩き出した月乃に、ベアキャットが続いた。

月乃とベアキャットは飼い主と飼い猫ではない。

強いて言うなら——人と猫だが——友人、だ。

2人の出会いは、1年と半年ほど前————小学6年生の春まで遡る。

ある意味で、2人にとって受け入れがたい現実が、2人を引き合わせた。

その後紆余曲折を経て、半年ほど前に再会してからは、半分、乃木家の飼い猫のようになっている。

半分というのは、基本的に野良猫と変わらないのに、月乃にやた

ら懷いていて一緒にいる姿を多々目撃されているからだ。

それは近寄り難い雰囲気を異常にかもし出しているのすら若干緩和するほど。

三叉路を駅とは逆方向へと曲がり、月乃は自然と天を仰ぐ。

「あの日も、こんな空だったね」

一般人からすれば快晴であろうそれも、月乃の目にはそう映らない。

ただでさえ青く重苦しいと感じる空は――心地よい青空、というのが普通の答えだろうが――、今、薄い緑の幕が覆っていて、嫌な感情しか込み上げてこないのだ。

問題が起きたためその対策として、父、恭一が己の管轄地に張り巡らした“出さない”ための結界。

そんなモノが見えなかったとしたら受ける印象は違ったのだろうか
かと自嘲するように口元を歪める。

否。

答えは否だ。

私が私である時点で有り得ない話なのだから。

「にゃあ」

気付かぬうちに足が止まっていたようで、ベアキャットの声に我に返ると、

「ごめん。他の事考えてた」

足元に向かって小さく謝罪して再び歩き始める。

誰もが同じようにやってくる終わりの時は本来誰にも選ぶ事などできず、その人生でさえままならず、全てを自身の手で選び取れる者など極少数、ほんの一握りのだけだ。

その一握りに該当している身を喜ぶべきか哀しむべきか、月乃は自嘲する。

事情を知る者は、半分は畏怖の念を持ち、もう半分は同情的になった。知らない者も、見たままの現状を憂い同情的になる。

月乃自身にとっては、己が身を悲観する理由など1つもないのだ

が、周りはそうは思わない。だが2人を巡り合せた存在は、月乃が初めて出会う何も知らないのに同情しない人間だった。

基本的に他人に対して同じように丁寧で親しみやすい態度を取る月乃の姿は、幼いながらも相手に伝わるのか、月乃自身に深く踏み込ませない部分があるからなのか、恐らく両方だろうが、特定の友人はいない。

控え目で、丁寧で、大人しい、薄幸の美少女。

それが他人が月乃に張ったレッテルである。尤も、本人的には、他人に興味がなく余計な労を負いたくないから口を開かないだけなのだが。

そんな月乃にとって、親友と呼べる唯一の存在が、藤井真由^{ふじい まゆ}だった。

級友という関係だけなら小学3年生の時からだそうだが、特に親しくなったのは4年生になってからだ。

きっかけは、物凄く単純で、余りにも馬鹿馬鹿しいものだった。

真由が自宅で木登り——これもちょうどかと思うのだが——をしていて足を滑らせて落ち、腕を骨折したせいで体育の授業が見学になった。月乃は元々体育の授業など受ける元気はないから万年見学組だが、その日は体調もよかったから保健室ではなく、真面目に見学していた。

その時に、暇を持て余した真由が、話かけたのがきっかけ。

真由が普通の、年相応の、女の子だったら、多分、2人は親しくはならなかった。

ただ、彼女は、普通ではなかった。

だからと言って、非人間だったという訳ではない。ただちよつと、いや、かなり変わっていただけだ。

「乃木さんって、鋭利な刃物みたいに綺麗だよな」

開口一番にそんな事を言う、小学4年生がいる訳がない。例えば可笑しいし、親しい間柄でもないのに、失礼だ。

「洗練されてるって言うのかなー。こう、名刀みたいな」

可愛いとか小さいとか見た目だけを表した褒め言葉は月乃にしては割と聞きなれた単語なのだが、刀に例えられたのは流石に初めての経験だった。

内心かなり驚いてはいたが、顔にはほとんど表情の出ない月乃はそれでも、愉しそうに笑う真由を見つめ返してしまった。

「私、猫飼ってるんだけど」

次に出た科白が、それだ。

どこをどうやるとその前の科白と繋がるのか、月乃は思わず目を瞬いて。

「黒猫でね、名前はベアキヤット。戦闘機から取ったんだけど。あ、お父さんが、そういうの好きでね、その影響で私も好きなの」

1人勝手にしゃべる真由。

十分、変わっていると言えるが、辛うじて、一般人の枠に入るかもしれない。

ここまでなら。

「それでね、そのベアキヤットが、これまた頭のいいコでね。あのコは人間の言ってる事がわかると思うのね」

変な電波に脳がやられているのかもしれない。

月乃はこの時になって初めて、距離を置くべき相手なのかどうか本気で思案した。

電波云々の話ではなく、本当に動物の言葉がわかるのだとしたら、確実にそっち業界の人間だからだ。

内心で警戒警報を鳴らしていた月乃に向かって、真由はくっつくような笑みを浮かべ、

「あ、私はベアキヤットが何言ってるかわかんないんだけど、もしわかったら、馬鹿な事言ってるなっとか言われてるかもしれないな。通じなくて良かったあ。でもね、ベアキヤットも、乃木さんみたいに、すっごく綺麗なんだよ。私の自慢なのっ」

そう暢気に告げたのである、月乃が脱力したのは仕方ないのかもしれない。

その後は、延々ベアキャットの話を真由が――相手が人間だったら完全な惚気としか取れない内容で――続けて、体育の見学時間は終了し、2人の間には奇妙な友情が芽生えていた。

正確には、月乃の中に、藤井真由という人間に対しての興味が。

月乃は誰に対しても平等に丁寧な態度、真由は誰が相手でも全く物怖じしない態度、ある意味では2人は似ていたからかもしれない。親友と呼べる仲になるのに、そう時間はかからなかった。

それでも。

その関係には、終わりが用意されていた。本当に、突然に。

1年と半年、正確には1年5ヶ月前に、2人は言葉を交わせない関係になった。

真由が、交通事故でこの世を去ったからだ。

また明日、そう言って別れた後で、また変わらない明日が来ると疑わない子供に、振って沸いた別れだった。

人前ではなかったが、月乃は、生まれて初めて他人のために泣いた。

そして、その葬儀会場で、2人(?)は出会う。

他の級友と供に、式に出席するために来ていた月乃と。

懐いていた飼い主との別れを惜しむように、それでも人前に出る事はなく、物陰からこっそりと式を眺めていたベアキャットと。

何も聞いてなければ、そのままだっただろう。

それでも、淋しそうに遠巻きに式を眺めていたベアキャットに気付いた月乃は、自分から話かけた。

ベアキャット、真由の傍にいないの? と。

驚いたのはベアキャットの方だった。自分に話かける人間が真由以外にいるとは思わなかった。勿論、真由の家族――藤井家の人間はペットなのだから声くらいはかけたのだが。

人間だったら呆けた顔になっていただろう、ベアキャットは、自分に話し掛けた姿をぼんやりと眺めた。

真由ってばこんな最後なのに、何も残ってないくらい幸せだった

みたいだから。

そう続いた科白にベアキャットの呆けていた脳が警笛を鳴らし、全身の毛が逆立った訳でもないのに勘付いた月乃が苦笑した。

ごめん、自己紹介がまだだった。初めまして、ベアキャット。私は月乃、乃木月乃。あなたの話は真由から聞いていたの。

月乃、というのは真由からよく聞いていた名前だったから警戒を解くにはそれだけで十分だったのだが、乃木という姓でベアキャットは相手を理解した。

真由の友人なら声をかけることもあるだろう、例え何を言っているかわからなくても。だが乃木の人間であれば言葉が通じたり気配を察したりしても可笑しくはないのだ。

黒く列を作る訪問客からは姿が見えないよう隠れていたのに気付かれたのも仕方ないのだと納得した。

それで、傍にいかないの？

もう一度なされた問い掛けにベアキャットは低く、にやあ、と鳴いた。

哀しげに、頭を僅かに垂れて。

ベアキャットは黒猫なのだ。

藤井家の人間には飼い猫として可愛がられていたが、今は他人が数多く出入りしている。そんな状況で不吉と言われてる黒猫の自分が、傍にいける筈がないのだ。

弔問客をただ、ここから眺めるしか出来ないのだと。

それならベアキャット、私もあなたと一緒にここから見送る事にするね。

そんな事を言って隣に並んだ月乃に、どれだけ驚いただろうか。今となってはベアキャットにもその行動は理解できるのだが、当時は不思議で仕方なかった。

たかが猫にあわせるなど、有り得ない。例え乃木の人間だったとしてもだ。

私にとって1番の親友だったから、同じく1番だったあなたと見

送った方が真由も喜ぶと思うから。

そう告げた月乃は、普段余り笑わないんだと真由から聞いていたのに哀しげな笑みを浮かべていた。

あれから約一年と半年。

時の流れはとてもゆっくりなようで実は早い。

たまたまタイミングが重なっただけなのだとわかっていても、それは最高の出会いと最悪の別れを暗示させる空なのだといつか話していた。

その際たるものは、唯一の親友を失った事だ。ベアキャットも同様に。

「この空は、哀しい事を思い出させるね」

溜息がちに呟やかれた声に、にゃあ、と同意するような声が続いた。

10 乃木家の事情

4月4日。

桜がいい感じに満開、まさに春爛漫って感じだ。

よりにもよって天気は、快晴。

オレは呪われているんだろう。間違いない。泣く気力も無くなつて、すでに諦めの境地。

そして今日、忌まわしきこの土地に再び立っている。もう2度と来ないと心に誓ってから半年足らずで。

受験は無事にクリアして、いや、本気で試験白紙で出そうかとも考えたけど、兄貴が怖いから真面目に受けた。
で。

オレは脱力したまま、それを見上げた。

木々に囲まれた古い石段、その遥か遠くに見える重厚な造り構えの日本家屋の門……寺の入り口らしいけどな。

表立っては地元の墓守、まあ寺として。実際は、退魔師としてこのあたりの管理地を守る乃木家、その本家。

寺の名前は、樹じゅのノ寺。

「十郎太、大丈夫か？ 車酔いでもしたか？ それとも緊張してるとか？」

タクシー代を払ってオレを見た兄貴には、きつと硬直してるように見えたんだろう。本音を言えばこのままUターンかまして、家出したい。もう最終学歴中卒でいいし、退魔師免許だってなくなっちゃいいよ……。

「荷物はもう全部送ってあるから、今更逃げるのは駄目だよ」

「……兄貴って、読心術が凄いやな」

「逃がす気はないけどね」

あっさりと告げて、オレの背を押して歩くよう促す。正確には石段を登るように。100段くらいありそーなんだけど、コレ。

「兄貴、本当にいいのかな。オレ、ここで…」

「父さんが十郎太の事心配してる現われだろうから、心配いらないよ」

「嫌がらせにしか感じねーんだけど…」

ぶちぶち言いながら石段を登るオレの横で兄貴が苦笑する。

「十郎太が自分の事気にしてて、一族の他の目も気にしてるから、関係ない所を選んだんだよ」

「それはわかってる。でも、他に幾らでも選択肢はあったと思うんだけど…」

「父さんが一族外の全幅の信頼を寄せてる人達の中で、国内に住んでて、強くて、余所の子供を預かってる人って少ないから。それに、恭一さんも弟の遠一さんとおいちも基本的には凄くいい人だよ」

基本的ってのがすげー気になるんだけど……。

「遠一さんの話は聞いてるよね？」

「うん。剣術の腕が凄くいいからって、千早伯母さんも太鼓判押してくれてた。安心して任せられるって」

「実際、本当に強いよ。剣術だけだと、オレでも勝てないから。それに本気でいい人だよ。そういう意味では乃木の人間としてはちょっと異色かもしれないかな。普通で」

普通なのに異色って何だろうな……。

「会えばわかるよ。月乃ちゃんに会ってるから、余計にね」

「…あいつが乃木家のベース？」

「いや。月乃ちゃんは大人しいから」

「騙されてるだろ、兄貴…」

「それはないよ」

笑って肩を竦める。

「ま、オレが何を言っても納得しないだろうけど、すぐにわかるよ。尤も、それで十郎太への態度が変わるとかはしないだろうけど。十郎太の方が年上なんだから、そこは度量でカバーしてあげなよ。月乃ちゃん、あれ、甘えてるだけだし」

最後の科白に思いっきり顔を引き攣らせて足を止める。

「アレの何処が!？」

叫んだオレに、ありえないくらい微笑ましい顔を返す兄貴。

「……笑ってすまそうとしてる。」

「ってか、気付いてるんなら止めるとかあるだろ! 普通っ!!」

「父さんが十郎太にからんでるのに比べたら、許容範囲内。可愛い末っ子と、可愛い女の子で」

「状況が可愛くねーし!!」

「十分微笑ましい光景だよ。別に大怪我する訳でもないし」

あっさり断言した兄貴に、がっくりと項垂れた。

論点が違い過ぎる……。

確かに、親父を初めとして、怪我なしとかありえない状況になるけどさ。アイツが相手だと外傷ないけど、暫く動けなくなる。死なない程度にいい感じに抜かれまくるから。そのどこが微笑ましいんだっつーの!？」

「いいから、歩く」

オレの左腕を掴んでぐいぐい引っ張って行く。……帰りたい、むしろ、還りたい。

「それに、月乃ちゃんを相手にするのもいい訓練になるだろ？」

「……それは、まあ。認めたくねーけど、アイツ、強いよな」

「——いつも、死が隣り合わせの綱渡りしてるようなものだからね。存在自体が。強くないと生きてこられなかったんだよ」

いきなり沈痛な面持ちになった兄貴が、重い口調でそう告げた。

「強いフリをしないと、かな。正確には。実力は折り紙付きだけど、それって、元々の能力と訓練でどうとでもなるものだから。月乃ちゃんは、人より早く訓練を始めた……—違うかな。訓練という名前の実戦を始めた、か。か弱い女の子なのにな」

「とてもそーは思えない」

「十郎太は、まだ、表面しか知らないからそう思うんだよ。本当は、心の優しい、か弱い、ただの女の子だよ」

何でか哀しそうに苦笑した兄貴に、オレは顔をしかめた。表面しか知らないって、裏表激しいのは知ってるっつーの。どこをどう見ても、オレを非常食呼ばわりするヤツが心優しいとは思えないし、凶悪な悪魔だけにか弱いとも思わないし、アレが普通に部類するただの女の子である筈がない。

「――遠路はるばるご苦労様。疲れただろう？」

兄貴に引っ張られながら石段を上がり、考え込んでいたオレの頭上からそんな声が聞こえた。温かみのある優しい声音。顔を上げると、顔にいい人ですって書いてありそうなくらい柔らかい笑みを称えた、Yシャツにパンツルックで坊主頭の優男が1人。

………何で坊主頭？

疑問符を浮かべたまま石段を登りきって、対峙する。

「遠一さん。お久しぶりです、わざわざ門前まで有り難うございます」

ぺこりと兄貴が頭を下げた。

「確かに久しぶりだね、一弥君。――それと、初めまして、十郎太君」

視線をオレに移したけれど、身長は結構高くて見下ろされてるのに、何でかそんな感じが全然ない。

「初めまして。本条十郎太です。これから、お世話になります」
頭を下げる。

「こちらこそ。君の剣術指南を頼まれた、乃木遠一です。千早さんには及ばないけれど、兄さんよりは剣術の腕はあるつもりだから。宜しくね」

「冗談はやめて下さい、遠一さん。千早伯母さん、真っ当な剣のみ勝負だったら結果はわからないって言ってましたよ」

「それは嬉しいね。過大評価にならないよう気を引き締めないといけないな」

「オレだって全然勝てる気がしないのに」

肩を竦める兄貴を横目に、改めてその人を見つめる。とてもじゃ

ないけれど、見た目は、兄貴より剣の腕が上とか、千早伯母さんと渡り合うようには見えない。それに何で坊主頭？ 確かに仏様みたいな雰囲気だけど、すげー謎…。

「私は、この寺で住職をしているからね」

坊主頭を撫でて、そう告げた。……顔に出てるのか、オレ？

「本当は兄が跡を継ぐ筈だったんだけど、春乃さんの所に行ってしまったから。尤も、こちらの仕事だけで、歴代の住職達に比べれば随分楽をさせてもらってるけどね」

優しく紡がれた科白だが、意味がわかりません。

「このお寺、管理者である乃木家の本拠地だから。乃木家の当主が代々住職を歴任してきたんだよ。裏家業と合わせてね。でも、恭一さん、奥さんの春乃さんの実家でやってたアパートの管理業の方を手伝うようになってたから、遠一さんが住職を継いだんだ」

「……なるほど」

「ところで、遠一さん。渦中の恭一さんは…？」

2人で出迎えて挨拶をするという話を聞いていた兄貴の問いに、遠一さんは、心の底から困ったような笑みを浮かべた。

「信司君が来ててね」

ぽつり、とそんな事を呟く。その科白を聞いた兄貴が、遠一さんと同じような顔をする。

「まだ続いてるんですか…」

「彼は好青年だし、私は賛成してるんだけど」

「恭一さんは絶対しないと思いますよ」

「そうだよね…」

「兄貴、何の話？」

「あ、ああ…。乃木のお家事情だよ。むしろ、乃木本家のお家事情というか」

「いや、わかんないし」

「身内の恥みたくないものなんだけれど」

遠一さんが小さく肩を竦めた。

「歩きながら話そうか。疲れただろう？　兄さんが戻って来るまで、お茶でも飲んで待っているとしよう」

そう言って境内へと促す。

先導する遠一さんの後を追うようにして歩き出した兄貴に、オレが続いて。数歩進んだ所で、遠一さんが溜息を1つ。

「――信司君、武井信司君というんだけど」

唐突に語り出した。

「兄さんの長女で、桜乃さくら乃の、恋人なんだよね。もう6、7年くらい付き合ってるんじゃないかな、多分」
は？

余計に意味がわかりません。

「兄さん、娘の事となると甘いし、頑固親父になるから。ずっと交際を反対しててね。娘に近付く男は赦さないとかって、桜乃だけに対してじゃないんだけど、交際以前の問題で、本気で近付こうとしてる相手は、撃退してるんだよね」

……。

オレ、そんな人の下で訓練すんの…？　思わず歩みが遅くなったのは仕方ない筈だ。絶対に。

「けれど信司君だけは、諦めなくてね。ずっと、認めてもらうって頑張ってるよ。勿論、桜乃と付き合ってるからなんだろうけれど、信司君の前に付き合ってた人は、兄さんに睨まれて以来見てないから。それを思うと、彼は頑張ってるって本当に思うよ」

「オレも以前に会ってるんだけど、一般人だけど、いい意味で鈍いから彼女にはお似合いだと思っただけだね」

「そういえば、一時、君の所に嫁がせるとかいいう話があったね？」

「ただの酒の上での話ですよ、お互い、跡取ですから。――乃木の家は、桜乃以外には継げないでしょう？」

その科白に一瞬だけ遠一さんは足を止めて、またゆっくりと歩き出した。

「……そうだね」

少しの間を置いて、酷く重い声音が同意する。

どういう意味なのか聞きたくて、兄貴を横目に見るとさっきと同じように複雑な顔をしていたから思わず言葉を飲み込んだ。

そのまま会話が途切れる。

黙々と歩き続ける大人2人に続きながら、出来る事ならこの場から逃走したい葛藤と必死に戦う。真面目に、兄貴が付き添いで来る時点で逃げられる可能性ゼロだから……。

「まあ、兄さんが妙な事をしでかさない限り大丈夫だと思うけどね」

「――前歴があるだけに、どうですかね……。むしろ、彼がこれまで五体満足でいられる事が奇跡のように感じますが」

「一弥君には参ったね。思っても誰も言わない事をはっきりと口にするから」

そう言ってから渴いた笑い声を上げる。

「ああ、そうだ。十郎太君。君もそこは覚悟しておいて貰わないといけないね」

「……はい？」

「兄さんと桜乃の親子喧嘩は、それはもう激しいから。結果なかったら、この辺り何度更地になったかわからないってレベルだからね。お陰で桜乃も今年の昇給試験をクリアしてSランクだし」

その科白に、足が止まる。むしろ体全体が、所謂、硬直。協会認定のSSクラスとSクラスの喧嘩って……。オレ、巻き込まれたら死ぬんじゃないか？

石像になりかけたオレを苦笑した兄貴が腕を引っ張るようにして歩くのを促す。

「けれど遠一さん。オレからすると、実力だけなら以前から十分満たしていたのに、今まで昇給しなかったのが不思議ですが」

「ああ、それはね……。桜乃、昇給試験受けてないから。お花見シーズンだからね、そっちを優先してたみたいだよ。今年は月乃に説得されて試験を受けたらしいから」

「なるほど」

説得……あの悪魔が？ 騙したの間違いじゃねー……？

「家業をしつかりやってれば、兄さんも反対し難いと言ったらしい。でも桜乃が試験を受ける気になったのは、ランクが上がれば回ってくる仕事の質のレベルが上がるから、それを月乃に横流しして、丸め込んで兄さんの説得に協力させようっていうつもりみたいだけだ」

「恭一さん、月乃ちゃんには特に甘いですからね……」

……。

そーいう環境で育った果てに、あの性格か。甘やかされてんのどっちだつーの。

「仕方ないよ」

何故だか哀しげに、遠一さんが呟く。

「月乃は、何も欲しがらないし、興味も持たないから」

吐き出すようにして酷く重い声がそう続いた。

……あの悪魔が、何も欲しがらないとか！？ ありえねえ。

ああ、でも、まあ、興味がなさそうってのは何となくわかる。つーかむしろ、全て見下しだろ、アレ。どう考えても。

「だからこそ、十郎太君の訓練を兄さん引き受けたんだろぅしね。これまでを見て、男の子だから絶対断ってる筈だから」

「……オレ、嫌々引き受けてもらったんですか？」

「ああ、いや……。そういう意味で言っただんじやないよ。自分の所で衣食住の面倒を見て修行させるって事は、娘にも近付くなるだろう？ 兄さんの行動の全てに男子禁制的雰囲気が見れててね、協会のカリキュラム以外で訓練も指導も、引き受けたの見た事ないんだよね。異性愛者の男性だけは」

……何か、最後の科白がすげー深みがあるんですけど。

「遠一さん。言うまでもないでしょうが、十郎太はきちっと女の子が好きですよ」

って、兄貴！？ 何デスカ、それ！ フォローになってないよ！

？

「ああ、それはよかった。私にも息子がいるからね。跡取の事を考えると、そっちの道に引きずり込まれたら困るから」

「翔君、今度大学生でしたよね？」^{かける}

「そう。最初は部屋を借りて1人暮らしの予定だったんだけど、急に家から通うって言い出してね。通学に1時間半もかけるつもりなんだよ。どれくらい持つか知らないけれど」

肩を竦めて笑う。何でか兄貴がオレを見て、苦笑した。……何？

「さてと。それじゃ、上がって寛いでいて。別に正座してなくていいからね。お茶を用意してくるよ」

「「有り難うございます」」

意図せず兄貴とハモって一礼。それを微笑ましそうに優しい笑みを浮かべながら眺めて、遠一さんはきびすを返した。

兄貴が先に立って、縁側から侵入。……侵入って言い方は可笑しいか。客間なんかな？ でっかい四本足のテーブルと、座布団が2枚ずつ置いてある。手前側の上座に兄貴が腰を降ろしたので、その隣に座った。

「……兄貴、オレ、大丈夫かな？」

沈黙を破って問い掛ける。何っーか黙ってると不安しか募らない。

「何が？」

「いや、話を聞いただけだと、3日持たずに死にそうな気がしたんだけど……」

「大丈夫だよ、月乃ちゃんいるから」

兄貴がさらりと口にした名前に、思わず顔が引き攣る。アレをもつてして大丈夫と断言する意味がわからない、むしろ危険度が果てしなく上がってる筈。

「またそんな顔して……。十郎太って本当、色々鈍いね」

「……は？ って、兄貴。どこをどーやると、そーなるの？」

「自分の胸に手を当てて、よく考えればわかるよ」

苦笑してそんな事を言うので素直に自分の胸に手を当てて考えてみる。

……。

「いや、わかんない」

呟いたオレに、「はぁ」と兄貴はこれ見よがしな溜め息を吐き出し、

「月乃ちゃんが我儘言ってるの、十郎太にだけだと思うから」
ぽつり、とそんな有り難くない科白を口にした。

11 分裂する悪魔

お茶を飲みながら、まったりとした時間が流れている。

本当はダメなんだろうけど、ああ、この空間いいなあ……。お盆を手に戻って来た遠一さんは、慣れた手際でお茶を出してくれて、その後、テーブルの向こうに腰を降ろして兄貴と談笑中。

途中、話を振られたり、疑問を投げかけたりするけれど、所謂、世間話に類するそれは、お子様なオレの出る幕は少ない。

だからまったり。

ああ、お茶が美味し――

「失礼します」

ビシリと硬直した。静かに告げられた声は、オレの脳内でイコール悪魔来訪と結論付けられた。

固まった背後で、障子が静かに開かれて暖かな春の風が流れてくる。

遠一さんが顔をそちらへと向けて、苦笑。

「兄さん、無理そうなんだね？」

「はい。お母さんから、案内するよう頼まれました」

「春乃さんは……そうか、止めに行ったんだね」

「はい」

ゆっくりと振り返ると、悪魔が……心の底から怪訝そうな眼差しをオレに投げていた。

いや、そんな顔される覚えが全くないんだけど？

あれか？ 非常食は下僕も同然なんだから、お前から挨拶しろよコノヤローとか、そういう目線か？

「久しぶりだね、学校の方の調子はどう？」

兄貴の声に視線を向けて、にっこりとした笑みを浮かべ……。ああ、やっぱり態度豹変。

「私の方は相変わらずです。部活も楽しいし」

「そっか。部活もいいけど、錫ヶ原だと勉強も大変じゃない？」

「それなりに。でも成績落ちたら部活やめる約束してるから、落とせないですよ」

苦笑して肩を竦める。……マジでオレ以外へのってか、オレへの対応可笑しいよな？ 一応、人権とかあるんだけ――

「部屋へ案内しますので、付いて来て下さい」

ちらりと一瞥してさっさと踵を返しました。

……ああ、還りたい。

「しょうがないな」

立ち上がった遠一さんが何故か苦笑した。

「無理もないですよ」

続いて兄貴も苦笑して立ち上がる。

「十郎太、ほら、行くよ」

「え、あ……うん」

1番納得いかないのは、オレなんだけど。

「十郎太君、鍛錬の時間は朝6時から1時間で始めるのでいいんだよね？ 学校終わってからの方は兄さんとの兼ね合いもあるけど、時間を増やすのはこっちに慣れた後でと、千早さんから聞してる」

「あ、はい。後々は遠一さんの都合で増やしてもらえたら嬉しいですよ」

「仕事が入らない限りは時間の都合つけられると思うから、早く慣れてくれると嬉しいな。翔はやらないから、剣術のみって機会がなくてね」

「……そうなんですか」

意外だ。勿体無い。千早伯母さんが太鼓判押してるからいい師範なんだろうに。

「遠一さんに鍛えられたら、オレもすぐに追いつかれそうだな」

兄貴がどこか嬉しそうに肩を竦めた。

「善処する」

オレの科白に、兄貴は満足げに頷いてから遠一さんに一礼。

「弟がお世話になります」

「期待に添えるよう、頑張るよ」

言いながら手を振る遠一さんに、兄貴がもう一礼。オレも一緒に頭を下げた。

「余り待たせるのも行けないから、このくらいで。……気を付けてね」

エライ不吉な科白を最後に付け加えた遠一さんに見送られて、比喻でも何でもなく兄貴に連行されるようにして部屋を後にする。

ああ、出来ればあのままでいたかったなあ……。

ぼんやりそんな事を思いながら、むしろ激しく後ろ髪を引かれながら、靴を履いて、兄貴にぐいぐい背中を押されて……あれ？ 何か方向違くないか？

寺の正面から見ると、何でか東側の方へと。

「直通してるから」

兄貴が小さく呟いた。なるほど、納得……。

と、顔を上げると、相変わらず怪訝そうな顔でこっちを振り返ってる悪魔の姿が目に入る。その背後は塀で、視界の右側の塀は途中で途切れて更に先へと伸びている。L字の逆型？ よくみると、こじんまりとした扉の前に立ってた。で。無言のまま、近付いてくるのを見て取ってそれを開いて向こう側へとさっさと姿を消した。

……何も言わないのは、兄貴がいるから大人しくしてるのか？ そう思いながら隣を歩く兄貴を見上げる。

「どうかした？」

「何でもない」

間髪入れずに入った兄貴の問い掛けに、反射的に答えて、扉を潜る。兄貴が後に続いて――

「すげえ」

思わず呟いた。

扉を潜ったら、ほとんど綺麗に周囲が一望出来た。

長い石段上ってきたから当たり前と言えそうですがなんだろうけど、

この辺りは古い住宅街が密集しているせいか、高いビル群とかはほとんどない。……こっち側だけかもしれないが。学校とか、最寄の駅は反対側だし。

でもってそこには車一台通れるくらいの道が。……車で上がってこれたんじゃ？

「十郎太？ そのまま直進だよ」

ぽけっと突っ立ってたオレに、背後から兄貴の苦笑交じりの声。道の向こう側、左手側に向かってずーっと生垣が続いてて、何故か真正面で途切れてる。1メートルくらいの幅を開けて、塀。背後から繋がってる塀は、くきつと直角に曲がって、どうやら下へと続いてるらしかった。

「降りるのか」

「ののはら荘は住宅街にあるからね」

「了解」

頷いて歩いていくと、数段先を進んでる後姿が見えた。……何て言うか、あそこまで無言を付き通されると後が怖いんだが。

で、お約束のようにやっぱり石段で。そこを歩きながら左を見れば、山。斜面の山。下には家。ああ、確かに石段の先に、アパートらしきものが見て取れる。あそこに繋がってるのか……寺へ続く裏口って、住んでる一般人の心境はどうなんだろう？ 墓参りは楽そうだが。

「――で、墓か」

思わず声に出して呟いた。

石段の右手側は、いい感じに塀である。下の方は塀の向こうが見えた訳で、まあ、墓石が連なっていたと。

「ここ、寺の左右に檀家の墓石がおいてあるから」

「小高い山になってるから、斜面を友好利用？」

「それもあるし、寺の裏手は裏家業で使ってるからっていうのもあるし、街の人から見える位置に自分の家の墓があるのもいいらしい。お年よりが安心するとか」

「……へえ」

よくわからん。

首を捻るようにして正面を見ると、距離が開いていたせいか立ち止まって見上げるようにしている姿が目に入る。……オレがキョロキョロしてるせいで遅れてるとか不機嫌になってそうだな、アレは。

近付くとまた無言で踵を返して折り始めた。

一定の距離を保って近付くなよみたいになってんな……オレ何かしたか？　むしろ、オレがそういう距離感を取りたい所なんだが。

「本当に機嫌悪いみたいだね」

苦笑した兄貴の声が背後からする。

「いつも可愛げがないだろ、兄貴は知らないかもしれないけど」

「そんな事はないし、それに……アレは拗ねてる感じだよ」

「何にだよ……」

むしろオレが拗ねたい。

「まあ、大体の予想は付くけど。十郎太、頑張らないとね」

「何に……？」

「多分、誤解してるだけだと思うから」

「何をどう？」

「すぐに解けるだろうから、心配もいらなと思うけれどね」

「……いや、教えてよ」

「釈明理由は自分で考えないとダメだよ。これから1人で頑張らないといけないんだから」

くっ……。最近、兄貴はどこことなく冷たいっていうか秘密主義っていうか。前みたいに教えてくれなくなった。変わりに、わかってるけど教えてあげない的笑顔が多くなった。

前より子ども扱いされてないのは嬉しいんだけど、所謂、含み笑いは怖いから止めて欲しい。

はぁ……。思わず溜め息を付く、肩もがっくり落としてとりあえず降りる。てゅーか、長いよ、石段。

「――疲れてるね、十郎太。そんなんでこれから大丈夫なの？」
そんな暢気な声に、項垂れた体制のまま顔が引き攣った。

「長距離移動だったし、引越しの用意とかで忙しかったからね」
「そう言う一弥さんは全然平気そうですけど？」

「オレは慣れてるからね。それに、十郎太はこう見えて、淋しがりやだから」

「10人兄弟の末っ子だから仕方ないですね」

「うん、そうなんだよね。甘やかした覚えはない…事もないか。やつぱり末っ子は可愛いし、年も離れてるから余計に」

「それに、お父さんに素直に甘えられない照れやさんでもあるし」
「――って、本人目の前にして何言ってるんだっ!？」

思わず立ち止まって突っ込んで、勢いよく顔を上げたら、前を歩いていた足を止めて怪訝そうに振り返ってる。……結構距離があるように見えるんだが、兄貴は後ろを歩いてた訳で……。今、会話してたよな…？

「相変わらずだね、十郎太。もう高校生になるのに、全然成長してないね」

どこか呆れ返ったようなその声は、何故か背後からした。

悪寒が走る。アレか？ 幽体離脱？ それとも新しく式紙とか覚えてみましたーとかそういうオチか？？？ 恐る恐る振り返ってみると、すぐ後ろに悪魔がエライ晴れやかな笑みを浮かべて立っていた。兄貴の隣に。

「……は？」

眼を数回瞬いて、肩越しに振り返る。……いるな。いる。向き直ると、やつぱりいる。

「分裂っ!？」

一気に血の気が引く思いってのを体感しつつ、凝視するように両方の姿を何度も確認する。うん、どっちも生身に見え――

「十郎太、春ボケするには早いと思うよ？」

怪訝そうに呟く。

「いやだって、お前っ!!」

「……ああ、そっか。十郎太知らないんだ」

叫んだオレに、1人納得した顔の兄貴がぼつりと呟いた。

「何が？」

「いや、悪い。てっきり知っているとってた」

「…何を？」

「挨拶も特になかったから、顔見知りなのかと思ったよ」

「いや、だから…」黙ってたんですか？」

「……何でお前はオレの科白を遮る。そして何で兄貴を見上げて年相応の困った顔してるんだ？」

「そうみたいだね」

「そっか」

苦笑した兄貴に、小さく頷いて、オレに向き直る。

「十郎太、向こうにいるの、虹乃^{にじの}。乃木虹乃。私の双子の妹」

あっさり口にしたそれに、思考が停止した。

硬直するオレの隣をすり抜けるようにして、月乃が石段を降りて行く。前を歩いていた月乃…じゃなくて、妹の虹乃の傍まで行くとき小声で何かを話してる。

「十郎太、驚き過ぎだと思うけど？」

苦笑した兄貴の声に、のろのろと顔を上げた。

「……双子？」

「うん。ごめんね、知っているのかと」

「似すぎだろ」

「一卵性双生児で、月乃ちゃんの話だと外側は全く同じらしいよ」

「……性格も一緒なんじゃ？」

「そういう意味じゃなくってね」

困ったように笑った兄貴に、ああ、と呟いた。月乃は“霊喰い”

だ。現存する、最後の。つまり妹はそうじゃない、双子でも。

ゆっくりと顔を巡らして、本当に見分けの付かない2人を眺める。

どこもかしこも同じなのに、その本質は全くの別物として生まれた2人。

「虹乃ちゃんは、普通の子だよ」

兄貴が小さく呟いた。

「乃木のお家芸、全くやってないから。本当に小さい頃、基本を少し齧ったくらいなんじゃないかな。桜乃の話では、小学校に入る前に、やらないって言ってやってないそうだから。恭一さんも春乃さんもそれで納得して、好きにさせてるみたいだよ」

「……それって」

「乃木の家で唯一の、一般人って事かな」

「ありえるのか、それ？」

「まあ、身体能力は、同年代の子と比べると幾分高いけれど。でも、運動神経が良いっていうので済むレベルだから。血筋のせいで、色々見えるモノは仕方ないけれど……。一般の人の中にも見える人はいるから」

「何でだろ……」

「そこは、ほら、個人のプライバシーがあるだろう？ オレは赤の他人だから踏み込んで良い場所でもないから、聞いてないよ。察しは付くけどね」

肩を竦めた兄貴を見上げて、

「……聞いても教えてくれないんだよな？」

「うん。さっきも言ったように、オレが口を挟む話じゃないからね」

「ならいいや。何か複雑そうだから」

オレの科白に、兄貴がぼんぼんを頭を撫でた。

「十郎太は素直だね」

クスクス笑ってそう言うのと、オレが口を開くよりも先に背中を押す。

「ほら、待ってるから行かないと」

オレ達を見上げる格好で立ち止まっていた2人との距離が縮まっ

た。

どれだけ見比べてもマジで似てる。とはいえ、月乃の方は苦笑してて、妹の方は困ったように俯き加減になっているが。何となくだが、表情で判別できそうな気がした。

「虹乃」

ぽつり、と数段を残して立ち止まったオレ達を前に月乃が呟く。

「……………うん」

小さく頷いて、顔を上げる。そっくりだけど、違うな。うん、違う。悪魔はあんな素直な頷きは返さないし、何より、心底困った顔でオレを見たりしない。

「改めて、初めまして。乃木虹乃です。……さっきは失礼な態度を取ってごめんなさい」

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい？ あ顔に謝られたっ！？

本気で驚いて硬直したオレに怪訝そうな眼差しが姉の方から向けられ……………やっぱ、悪魔は悪魔だよな。

「十郎太。挨拶は？ 虹乃、きちんと言ったのに」

「……………五月蠅いよ。つーかね、オレは驚いてるんだよ。そしてその原因はお前だ」

「失礼な。私だって自分に非があると思えば謝るよ」

「嘘を付け、嘘を。お前がオレに謝った事な」「一度も十郎太を相手に非があると思った事ないけど」

ぐはっ……………あっさりと、あっさりとおお！？ お前のその態度はっ！！

「それで？」

じと目で睨んでるし、オレ何か悪い事したかつーの。そんなでもってその隣では、本当に困ったような顔でオレと月乃とを見比べてたりするし。見分けが付かないくらい似てるの、本気で外身だけなんだな……………。

「……………本条十郎太。これから世話になります」

「いいえっ！　こちらこそ！！　アナタが来てくれて助かります」
「…………はい？　助かるって何が…？」

困った顔を花が咲いたような満面に笑みに変えて階段を上ると、
がしつとオレの右手を掴んで両手で握り締める。

「…………え？」

「有り難う！　月乃が大変な時に、それ賄ってくれるんでしょう？」

私のもいいって言っても、月乃、絶対私からは取らないし、凄く
嫌がるから」

「虹乃は本気で一般人の人から見たら多い方だけど、それだけなん
だよ？　私が貰ったら、虹乃まで動けなくなつて、部活だって出来
なくなっちゃうでしょう？」

「でも、月乃が大変な時は…」

「私は虹乃がスポーツやってるのを見たり、愉しそうにしてるのを見
るのが好きなの」

苦笑して断言する姉に、拗ねたように顔を顰める妹。…………ああ、
ここだけ見ると、普通の仲良い姉妹だな。

「だから…」

くるとオレに顔を向きなおして。

「本当に有り難う、十郎太…………さん？　君？　月乃が呼び捨てだか
ら私もそれでいい？」

「…………別にいいけど」

むしろこの顔でさんやら君やら付けられて名前呼ばれる方が心臓
に悪い気がする。

「てか、何で有り難う？　お礼言われるような事は何も…」

「だって、十郎太、月乃に魔力別けても平気なくらい量があるから、
別けてくれるんだよね？　非常時の切り札なんでしょ？　もー、本
当。そうならそうって言っておいてくれればよかったのに」

…………。

何を吹き込んだ、悪魔。

そう言ってから本気で悔しそうな顔をして、オレの手を離して両

手で拳を握り締める。

「私、てつきり……お父さんが手元において面倒見る、同世代のオトコノコっていうから、月乃に無理矢理に許婚でも決めてきたのかと思って」

は？

「お父さんの馬鹿って思って、話聞いた時からずーっと、嫌がらせの方法とか考えちゃったし、口なんか聞いてやるもんか、絶対追い出してやるって思ってたよ」

はいいい！？

「ちょ、待っ……何だそれ！？」

「虹乃の勘違いだよ、ただの」

「オレもそう思うな。父さんが十郎太をそう簡単に手放す筈がない。それならむしろ、月乃ちゃんを自分の所へ招くと思う。こっちには、婆様いるし」

「確かに、将和さんのあの態度を見ると、婿には絶対出しそうになりですよ」

「うん。オレの目から見ても、父さんのあの状態は精神衛生上よくないし」

その悟った顔の、悪魔と兄貴。頼むからあの親父絡みじゃないリアクション下さい。

冷静な2人に、虹乃が本気で困ったように笑う。

「月乃、本当に足りてないから、十郎太のお陰で前よりはきちんと学校にもいけるようになると思うし。だから、有り難う」

「私の非常食なんだから、それくらい当然だよ。一々お礼を言う必要ないよ、虹乃」

「えー。でも、月乃を食べさせてくれるんだから、お礼は言わないとダメじゃない？」

何か普通に勘違いされそうな科白をあっさり口に……。

「そもそも私のお陰で繋いだ命だからいいんだよ」

「…………どーせ、勿体無いな〜とか思って、助けてあげたんでしょ

？ でも月乃はいつも言葉が足りないし、素直じゃないから。私
が変わりにお礼を言ってるの」

ぐっ、と珍しく言葉を詰まらせる。……ふ、そうか。アレか。
お前の弱点は、その妹か。

「でも虹乃ちゃん。十郎太を助けてくれたのは本当だから」

「それでも、ですよ。これから、食の面倒見て貰うんですから」

「代わりに十郎太の衣食住と訓練の面倒見てもらうだけだね」

「そこは、お父さんとかお母さんとかの役目ですから。私は月乃の
事だけを考えて……あ！ でも、十郎太。1つだけ凄く必要な事
が」

自分が言い負かした訳でもないのに優越感に浸っていたオレに、
急に矛先が向いて反応できず。

「月乃に手を出しちゃダメだよ？」

「誰が出すかつ!？」

反射的に叫んだのは、まあ仕様。

「本当？ ならいいけど」

「中学生するには早い心配じゃないかなあ、虹乃ちゃん？」

「甘いですね、一弥さん。彼はもうじき高校生です」

「……確かに」

って、何納得してんですかつ、兄貴!？

「虹乃ちゃんも、お姉さん達に近づく男の人はダメって言ってるの
？」

「いいえ、全然。信司さんの事はさく姉と早く結婚してくれないか
なって少しだけ思います。どーせお婿さんだから、さく姉遠くへ行
かないし。お兄ちゃんが出来るんだし」

「桜乃は良くって月乃ちゃんはダメなんだ？ あ、中学生だから？」

「違いますよ。お父さんが1番五月蠅いから。せつかく、月乃を
食べさせてくれる人なのに、そのせいでお父さんに殺されちゃった
りしたら、月乃が食べるのにまた困るようになっちゃうじゃないで

すか」

場が静かになったのは、多分お約束。

オレも納得。いや、納得したくないし、何か間違ってると思うが、オレもそんな理由で殺されたくないから。

「………そっか。確かに、オレも、そういう理由で可愛い末っ子が恭一さんに仕留められるのは嫌かな。でも、そんな事言ってる、恭一さんと張り合うようになってから行動するかもしれないよ?」

「誰がするかっ!？」

兄貴がうんうん頷きながら口にした科白に反射的に突っ込んだ。

「顔真っ赤にして必死に弁解しなくてもいいよ。十郎太って、からかわれてるって気付かないんだね」

事も無げに告げる悪魔。

「私は本気で言っただけど?」

「虹乃はそうだろうけど、一弥さんは違う」

「あははっ、月乃ちゃん。そこは言わないで欲しかったなあ」

「兄貴ーっ!？」

「怒らない怒らない。これから会える回数が減って淋しくなるから、ちょっとね」

笑って済まそうとしてるっ!

「というか、早く行かないと荷解き今日中に終わらなくなるよ?」

「あ、それもそーだね。んじゃ行こう。月乃、この後、英語をね」

「いいよ」

「本当っ? 助かるー」

笑いながらさっさと石段を降りて行くツインズ。

「ほら、十郎太も行かないと」

ぐいとオレの肩を掴んで歩くよう促す兄貴。それはもう何事もなかったかのように。

「………兄貴、オレさあ」

「うん?」

「思うんだけど、本当にここで良かったのかなあ？」

「そう思うよ。オレはね。……それにほら、誤解も解けたようだし」

前方を指差して。

「……何でそーいう誤解されたのか、すげー謎なんだけど」

「遠一さんも言ってたでしょ、前歴がないって」

「……だからって曲解しすぎだろ…」

「そこはほら、多感なお年頃だから」

クスクスと愉しそうな兄貴を横目に、オレは心の底から思った。
還りたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8392t/>

喰

2011年11月16日03時11分発行